

うつせみのあなたに

第9巻

星野廉

目次

はじめに	
はじめに	2
もくじ	5
第1部 09.09.04～09.12.XX	
09.09.04 お墓参り	8
09.11.11 言葉とうんちと人間（言葉編）	10
09.11.12 言葉とうんちと人間（うんち編）	18
09.11.12 言葉とうんちと人間（人間編）	26
09.11.13 代理だけの世界（1）	35
09.11.14 代理だけの世界（2）	44
09.11.15 代理だけの世界（3）	48
09.11.19 代理だけの世界（4）	59
09.11.27 1年前の記事を読んで	68
09.11.28 今、考えていること	72
09.11.29 社会復帰はあきらめました	77
09.11.30 代理だけ	85
09.12.XX こんなことを書きました（その16）	93
第2部 09.12.02～09.12.XX	
09.12.02 でまかせ・いず・む	100
09.12.03 もてあそばれるしかない	108
09.12.04 わかるはわかるか	117
09.12.05 翻訳の可能性と不可能性	127
09.12.06 わかるという枠	137
09.12.07 わかるはわからない	144
09.12.08 わかるはプロセス	154
09.12.09 3つの枠	166
09.12.10 ちょっとないんですけど	175
09.12.11 あなたとは違うんです	187
09.12.XX こんなことを書きました（その17）	197
あとがき	

あとがき	202
『うつせみのあなたに 第9巻～第11巻』の記事タイトル	203
奥付	
奥付	222

はじめに

はじめに

本書を第9巻とするシリーズは、2008年12月19日から2010年3月11日までの間に書いたブログの記事を再録したものです。初めて開設したブログのタイトルは「ネガティブに生きる」で、ハンドルネームは「パリス・テキサス」でした。ヴィム・ヴェンダースが監督した映画、“Paris, Texas”（文字通りには、米国の「テキサス州、パリス市」という意味ですね）から取りました。大好きな映画です。邦題は、なぜか「パリ、テキサス」ですね。

どうして「ネガティブに生きる」なのかと申しますと、うつとの闘いと共存をテーマ、あるいは目的にしていたからです。つまり。「ネガティブに生きる＝頑張らない」ほどの感覚で、名付けました。

私のブログは、当初の日記的な色彩が薄れ、徐々にエッセイや論考に近いものになっていきます。ブログにしては長めの記事をほぼ毎日書いていたので、データとしての全体の量はかなり大きいです。したがって、いくつかに分冊する形で電子書籍化していく予定です。

ブログで長文の記事を投稿していた時期には、パソコンや携帯電話で読まれる文章であることを意識し、読者がモニターや液晶の画面で読みやすくするための工夫をしていました。具体的には、各段落を短くし、段落間の改行を頻繁に行うようにしました。また、1センテンスでの読点をなるべく多くし、中には読点を打つ個所で改行するといった少々乱暴な書き方もしています。

そんなわけで、今回の電子書籍化に当たっては、もとの文章がブログ記事であったことを、できる限り忠実に再現し、上述のような独特のレイアウトをそのまま反映させるように努めました。

*

以下は、過去に開設したブログの記録です。

- * 「ネガティブに生きる」 2008-12-19～2009-02-27
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-01～2009-03-09
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-03-10～2009-03-15
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-26～2009-04-08
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-04-06～2009-04-08
- * 「うつせみのあなたに」 2009-04-17～2009-07-17
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-08-01～2009-08-08
- * 「うつせみのあなたに・・・」 2009-08-11～2009-09-01
- * 「小品集」 2009-09-04～2009-11-14 (ハンドルネームとして「恵」を使ったブログ)
- * 「うつせみのあなたに」 2009-09-04～2009-11-19
- * 「うつせみのあなたに」 2009-11-27～2009-11-29
- * 「うつせみのあなたに」 2009-12-01～2009-12-11
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-12-02～2009-12-10
- * 「ヒト観察記」 2009-12-06～2009-12-10
- * 「うつせみついたうつせみのおと」 2009-12-08～2009-12-10
- * 「うつせみのな」 2009-12-12～2009-12-15

* 「うつせみのくら」(それまでに削除したブログ記事のバックアップを再ブログ化したもの)

* 「うつせみのあなたに」 2009-12-16～2010-02-28

* 「うつせみのうわごと」 2010-03-04～2010-03-11

ブログを作り、壊し、またもや、作り、壊し、の繰り返しです。お恥ずかしい限りです。とはいえ、以上の記事のバックアップは、ちゃっかりとすべて保存されています。実は、言霊が怖いのです。文章を捨てられない、消せない、つまり削除できないのです。冗談ではなく――。

このシリーズのタイトル、また現在もあるブログのタイトル「うつせみのあなたに」は、いろいろな意味に取れます。その意味の多重性については、本書で何回か触れています。そのため、意味の複数の解釈は保留にしておきますので、どうか想像してみてください。大きめの辞書で「うつせみ」と「あなた」を引いてみると、何通りかの意味に取れることが、お分かりになると思います。

本書は、『うつせみのあなたに』の第9巻です。このシリーズ全体に共通するのは、「代理の仕組み」、つまり「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる」という仕組みです。これをテーマに、さまざまな例を挙げたり、多種多様な素材を使いながら、話を展開していきます。

本書の読み方として、まず記事を読み解説は後回しにする方法以外に、第1部の最終記事「09.12.XX こんなことを書きました (その16)」、そして第2部の最終記事「09.12.XX こんなことを書きました (その17)」に収録されている各記事の解説に目をお通しになった後に、それぞれの記事をお読みになるのも、よろしいかと思えます。

もくじ

はじめに

もくじ

第1部

09.09.04 お墓参り

09.11.11 言葉とうんちと人間（言葉編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（うんち編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（人間編）

09.11.13 代理だけの世界（1）

09.11.14 代理だけの世界（2）

09.11.15 代理だけの世界（3）

09.11.19 代理だけの世界（4）

09.11.27 1年前の記事を読んで

09.11.28 今、考えていること

09.11.29 社会復帰はあきらめました

09.11.30 代理だけ

09.12.01-09.12.11 うつせみのあなたに（再録）

09.12.XX こんなことを書きました（その 16）

第 2 部

09.12.02 でまかせ・いず・む

09.12.03 もてあそばれるしかない

09.12.04 わかるはわかるか

09.12.05 翻訳の可能性と不可能性

09.12.06 わかるという枠

09.12.07 わかるはわからない

09.12.08 わかるはプロセス

09.12.09 3つの枠

09.12.10 ちょっとないんですけど

09.12.11 あなたとは違うんです

09.12.XX こんなことを書きました（その 17）

あとがき

『うつせみのあなたに第 1 巻～第 1 1 巻』の各記事タイトル

第 1 部 09.09.04~09.12.XX

09.09.04 お墓参り

◆お墓参り

2009-09-04 13:57:22 | さくぶん



「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・(隔たったものを) 近くする・知覚する」

= 「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」

= 「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ(全・空・虚)をうつ・うつうつ」

= 「げん・限・限界・限度・境い目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かざる・限る・かける・翳る」

= 「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」

= 「げん・Gen・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」

＝「げん・眼・がん・まなこ・め・見(＝げん・けん)・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」

＝「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす・まいりました」

＝「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減＝増・無限小＝無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・0・〇・まあるくおさめまっせー・輪・和・わ・わっ」

＝「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でっけー・うへーっ・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ・わけわかんない」



うーむ。よくないです。たぶん、こういうのは、やってはいけないことです。許されないような気がします。

「理・事割り・断り」をしている「こと」がむなしくなりました。

言葉と自分との関係について、あらためて考えてみます。



ことわれば さげびきこえるあきのそら

ことうつす かがみわれたる ばちのおと

ことはもの たかをくくりし ぐをおかす

ものはある ことわりなしに ことはある

うたいたいあわいのうちに めをつむり



しばらく記事の更新はできそうもありません。かつて開設したブログの記事を納めた「言葉のお墓」である、「うつせみのうつお」を訪ねていただければ、幸いです。

【追記言い訳をさせていただきます。白状します。行き詰まりを打開するために、心機一転小説を書こうと思い立ち、ハンドルネームを「恵」として「小品集」を書き始めたのです。なお、「言葉のお墓」＝「うつせみのうつお」とは、かつてのブログ記事を収録したウェブサイトのことです。削除したため、現在はありません。(2010.09.28 記)】

09.11.11 言葉とうんちと人間（言葉編）

◆言葉とうんちと人間（言葉編）

2009-11-11 16:43:23 | さくぶん

「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」について書いてみようと思います。「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」という音あるいは文字の連なりで、みなさんは何を連想なさいますか？

個人的には、言葉とうんちと人間を連想します。

この「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」三者は、密接に結びつきからみ合っただけで、「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」状態にあるように感じられるのですが、今回は、そののうち、特に言葉について思うところを書いてみます。

*

言葉というと、阿吽（あうん）という言葉が頭に浮かびます。あ、うん。あっ、うん。ああ、ううん。

*

この阿吽という言葉は、含蓄に富む言葉のようです。中には、阿吽という言葉テーマに蘊蓄（うんちく）を傾けた文章をもつものもいらっしゃるにちがひありません。

こじつけや駄洒落や出まかせやでたらめが好きなたちは、今、わざと、あるいは、ひょっこりと出て来た「あうん」という言葉について、いろいろな加減なことを書きたくてうずうずしているところです。

きっと頭の中が「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」しているからでしょう。その「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」を、ちょっと出してよろしいでしょうか。すっきりさせてください。けっこう、マジなお話ですので、どうかお許し願います。

*

「あうん・あーむ・おおん・おーむ・おうむ・aum・om」という、言葉とも音とも言えるような言えないような声の出し方があるそうです。インド哲学や仏教と関係がある「聖なる音」らしいのですが、詳しいことは知りません。

「阿吽・あうん」という言葉を見聞きするたびに、あいうえお表を連想します。「あ」から始まって「ん」で終わるといって、単純な理由なのですが、その単純さゆえに、かえって深いものを感じてしまうのです。

ここで、みなさん、「あーん」と口にしてみてください。さあ、恥ずかしがらずに、一緒に、「あーん」。

「あ・a」は、大きく口を開けて息を吐き出す音ですね。「ん・n」は、口をかすかに開いたまま、上の歯の裏から奥にかけて（※硬口蓋というそうです）、舌をびったりとくっつけて、鼻から息を出しながら出す音です。

でも、個人的には、「m」、つまり、両唇を合わせて閉じて、鼻から息を出す「む・mu」の「u」なしの構えで出す音で読んでいます。そうすると、「あーむ」という感じになります。さきほど触れた、aum とか om とかいう、仏教かサンスクリットか知りませんが、そんな大そうな話とは関係なく、何となく、このほうがしっくりするので、そう読む癖がついています。

*

あいうえお表のうちの、「あ・a」と「ん・m」だけを、よく口にします。実は、二回に一回は、ただあくびをしているだけなのですが、マジに「あーむ」と声に出すことがあります。

伸ばしぎみにゆっくりと発音しながら、何度も繰り返します。すると、「あ・a」と「ん・m」の二つはつながり、連続した音になります。目をつむって声に集中すると、口と鼻という名の穴を通る空気の流れと、鼻の奥の震えだけが感じられてきます。そのうち、眠くなります。

人間は口を開けて「a」と言ってうまれて、「m」または「n」の口をして息を吐いてなくなる。そんな思いにとらわれます。本当のところは知りません。他人様が生まれる場にも、死ぬ場にも立ち会った経験がないからです。

人間一般どころか、自分自身に関しても、どうなのかは知り得ません。なにしろ、生まれた時の記憶はありません。これから先、いつかは死ぬのかもしれませんが、その時に自分がどんな口をして死ぬのかは知るよしもありません。

それでいいのでしょうか。誰もがそうなのでしょう。

あーむ。

今のはあくびなのですが、あくびは「生きて死ぬ」という行為のレビュー（復習）であり、リハーサル（予行）だという気がします。ワンちゃんも、にゃんこも、ネズミさんも、クマさんも、あくびをしますね。興味深いです。

*

冒頭で述べましたように、「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」について書いてみたいのです。そして、タイトルにあるように「うんち」について書いてみたいのです。

お断りしておきますが、マジです。スパイスとして多少の駄洒落やおふざけはあると

思いますが、本気で書きます。自分にとって、大切なテーマなのです。

*

「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」という言葉は、文字通り「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」しています。そこでの的を絞ります。

*言葉という「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」。

*言葉になる前の「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」。

まずは、以上の二つについて考えてみましょう。

よく考えると、今挙げた二つの文を組み合わせれば、次のようになるはずです。

*言葉になる前の「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」から、言葉という「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」が生じる。＝「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」から「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」が生じる。

まさにそういうことなのです。もっと簡単に言うと次のようになります。

*言葉は何とでも言える。

これをややこしく言うと、以下のようになります。

*言葉には「Aを、BともCともYともZとも言える」という「パワー＝でたらめさ＝いい加減さ」がある。

これを正確に言うと、次のようになります。

*Aというものを、人間が知覚したり意識したり思考したりするさいには、大きな限界がある。

ぶっちゃけた話、以下のような事態となります。

*人間は、Aというものを知覚も意識も思考も「できない」。「できる」と考えるのは、人間が勝手に判断している＝思い込んでいるだけである。

もっと簡略化しましょう。

*○=△。○は△である。人間は○も△も分からないままに、そう言う。

*

具体的な話をします。

たとえば、あなたの目の前には、おそらくパソコンのモニターがあるでしょう。そうです。あなたが、この駄文を読んでいるパソコンのモニターのことです。そのモニターを、じっと見つめてください。

「モニター」なり「ディスプレイ」なり「画面」なり「液晶」なり「画素」なり「映像」なり「文字」なり「活字」なり「ツールバー」なり「画面に付いたほこり」なり「画面に付いた指紋」なりを見つめてください。

たぶん、同時多発的に次のような状態になると思います。

*モニターという器械のいろいろな「部分=パーツ=もの」が断片的に目に入る。

*モニターに映っているいろいろな「目についた語や文字や活字や映像や記号」が断片的に目に入る。

*モニターに映っているこの駄文を読んでいる。

*モニターに映っているものと関係のある、または関係のない、いろいろな「イメージ=目の前にはなく頭の中に浮かぶもの・こと」が視覚的に意識される。

どうでしょう？ そんな「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」した状態になりませんか？

そうした状態になったという前提で、話を進めさせてください。そうした状況を、とりあえず、次のように言葉にしてみます。

*「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」が「立ちあらわれる=出てくる=意識される」。

その時、あなたが「つまんない」とか「ややこしい」とか「ばかみたい」とつぶやいたとします（この駄文を読んでいる方には、おおいにあり得ることでしょう）。

それを次のように言うことができると思います。

*音（おん）が口から「発せられた=漏れた=出た」。

今の文で、「発せられた＝漏れた＝出た」が、「過去形＝完了形」であることに注目してください。その行為は、「もう終わった＝完了した」ということですね。

「つまんない」とか「ややこしい」とか「ばかみたい」とつぶやいた人は、モニターに映し出されたこの駄文を読んだ結果として、そのような言葉を口にしたのでしょうか。

さきほど、『そのモニターを、じっと見つめてください』と、こちらが指示をした結果として、この駄文を「読んだ」のはなく、文字通りモニターを「見た」場合には「モニター」とつぶやいた人もいるでしょう。

または、「そろそろ画面をクリーナーで拭かなきゃ」とか「ああ、お腹が空いた」とか「明日の天気はいいだろうか？」とつぶやいた人がいても不思議はありません。

どのような言葉が口から出てきたにせよ、その言葉が口から出る「直前＝寸前」があったはずです。

その「直前＝寸前」に、その人の頭の中で、「何か」が「起きていた＝意識されていた＝意識というスクリーンに映っていた」だろうと推測されます。

で、その言葉が口から出る「直前＝寸前」に、その人の頭の中で、「何か」が「起きていた＝意識されていた＝意識というスクリーンに映っていた」と推測される場合の、その「何か」が、「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」なのです。

*

* 「何か」と、その直後に「口から出た音（おん）＝言葉」との間に、何らかの「関係性＝関連性＝つながり」があるかどうかは、その音を発した人間にも、その人間以外の第三者にも、「分からない＝知り得ない」。

また、心変わりがして、「何か」と、その直後に「口から出た音（おん）＝言葉」との間が完全に「途切れている＝途絶えている＝プツツン切れている」場合もおおいに有り得ます。むしろ、そのほうがひよっとするとヒトの状態＝常態に近いのかもしれませんが。いつか考えてみたいテーマです。

さて、ただ今述べた二点が、決定的に重要だと思うのです。ややこしいですね。

二点のうち、前者について（つまり、心変わりではない場合について）、うんと単純化して説明させてください。

* 「口から出てきた音（＝おん）＝言葉」は、肛門から出てきたうんちと同様に、それを

出したとされる人間から、離れて存在するものとなってしまっている。

そう言えそうです。したがって、口から出た言葉は「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」としたもののとしてしか存在できないというか、あり得ないのです。言葉は「すっきり」「はっきり」してもいなければ「明快」で「論理的」なものでもありません。

たとえば、単語レベルで「うみ（海）」「はな（花）」という言葉の口にしたとします。その瞬間「うみ・海・濃・生み・産み……」「はな・花・鼻・洩……」という「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」の連鎖が生じます。仮に、その言葉を耳にした別の人が「うみ（海）」「はな（花）」と受け取ったとしても、口にした人の頭の中にあるイメージと同一であるわけがありません。

センテンスのレベルで、「わたし、海が好きなの」とか「この部屋にふさわしい花を買ってきてほしいんだけど」などと誰かが口にしたとします。聞き手が百人いれば百通りのイメージや解釈が可能でしょう。また、時間が経つにつれて、その百人の百通りのイメージも刻々と変化することでしょう。

「口から出てきた音（おん）＝言葉」は、それを出した人から離れて存在するというのは、そういう「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」した状態を指しています。

でも、人間は言葉を何とか使いこなしたつもりでいます。使い損ねた部分を無意識に、または故意に忘れているからです。自分に都合の悪いことはすぐに忘れる。そういうふうに人間はできているらしいのです。

「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」した言葉を用いているために、人間がどれだけ苦労しているか。大きな本屋さんの自己啓発コーナーに並んでいる数々の本を眺めれば、納得できると思います。テレビのニュースで報道される「右往左往ぶり＝出来事＝事件＝事故」を見ていれば、納得できると思います。人間は、「病み＝止み＝闇」、「悩み＝名病み」、「混乱＝昏倒＝昏睡＝全麻（全身麻酔）」に陥っているのが「状態＝常態＝普通＝当たり前＝自然」なのです。

*

ちょっと長いですが、以下の文章をお読み願います。

*もし、「自分」と「他者＝世界」という別個のものが存在するならば、比喩的に言えば、それは固体のように存在するのではなく、液体か気体のように、時によって混じり合ったり、分離し合ったりする形で存在するのでしょう。たとえば、ぼけっとしていたり、うとうとしている時、眠っている時、あるいは、動転している時、精神的にかなり動揺している時、ショックを受けた時、酔っ払っている時、あるいは、何かに夢中になって

いる時の人間は、「自分」と「他者＝世界」が混じり合った状態にあるはずで

今の文章で「自分」と「他者＝世界」が括弧でくくられていることに注目してください。「」が付いているさいには、その文章を書いた人が、その「」の中身に疑問をい

「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」をテーマにしている時に、「自分」と「他者＝世界」というものが確固（かっこ）としたものとして存在するわけがありません。話を進めるう

本音を申しますと、「自分」と「他者＝世界」なんてものは、本当はないの

*

さらに、この駄文では、「○○＝☉☉＝□□」みたいに、やたら「＝」で言葉をつ

「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」とした「自分」や「他者＝世界」を「論じる＝言葉にする」さいには、「自分自身」を含む「森羅万象＝世界＝宇宙」が一言でぴしゃりと

*

再度、お断りしておきますが、マジです。景気付けに多少の駄洒落やおふざけはあ

【後記この駄文は、ブログ記事のバックアップ、つまり「お墓」を掘り出して、かのフ

09.11.12 言葉とうんちと人間（うんち編）

◆言葉とうんちと人間（うんち編）

2009-11-12 10:46:00 | さくぶん

前回の後半で、次のように書きました。

*「口から出てきた音（=おん）=言葉」は、肛門から出てきたうんちと同様に、それを出したとされる人間から、離れて存在するものとなっている。

ここで、言葉とうんちの共通点について考えてみましょう。

*言葉とうんちは共に、体にある穴から出てくる。

これは確かなようです。口と肛門という穴は、人間およびほかの多種多様な生き物にとって、生存するためには不可欠とも言える器官です。

「阿吽=あうん=あーん=あーむ」の「あ」が口だとすれば、「ん=む」は肛門にたとえてもよろしいかと思えます。人間は「あー」と産声をあげ、「ん」とか「む」という口の形をして「なくなる=亡くなる=無くなる」。

肛門から出たものが土や水に返り、生命の一部となり、その生命が口に入る。そして、また出る。こうなると、人間だけの話ではなく、この惑星の生態系レベルの、壮大で美しく神秘的でもある「叙事詩=フィクション=お話=作り話」につながりそうです。あな、不思議。anananananana……。まあ、不思議。mamamamamam……。まま、まんま、まー、まーむ。ままー、まんま。とめてくれるな、おっかさん。南無。

失礼いたしました。

そうなのです。この駄文では、「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」について考えているのです。というわけですので、どうかご了承とご勘弁をお願い申し上げます。

*

で、肛門から出てくるうんちですが、個人的には次のようにイメージしております。

* 「自分」と「他者＝世界」の「間（＝ま・あいだ・あわい）で、ぶかぶかと浮いている。

* 「出る」とは、「出た」後には、「ぶかぶか浮いている」状態に落ち着く。

このイメージにおいては、躍動感までは行かない浮揚感（＝運動）つまり「ぶかぶか」が非常に重要です。

* 出たものは、「静止」してはいない。

この点に、注目していただきたいのです。

「でる・出る」に似た言葉で「あらわれる・現れる・表れる・顕れる」があります。でも、両者は微妙に異なっているようです。「出る」から、具体的に見ていきましょう。次に「〇〇は出る」という言い方をする「〇〇」を挙げ、いったん「出た」後にどうなるかを考えてみましょう。

いったん「出た」ものは、必ず、何らかの運動に誘発されます。たとえば、いったん「出た」給料も、給付金も、保険金も、うんちも、太陽も、声も、にきびも、幽霊も、新刊書も、選挙候補者も、テレビドラマの役者も、家出したお父さんや、家出したお母さんや、家出したお子さんも、火も、くいも、そのまま静止し続けることはありません。

一方、「□□はあらわれる」という言い方をする「□□」を挙げ、いったん「あらわれた」後にどうなるかを考えてみます。

いったん「あらわれた」ものは、「出た」ものとは異なり、静止したまましつこく居座ることも、往々にしてありそうなのです。真価、効果、正体、正義の味方、英雄、悪の権化、〇〇の神様、救世主、影響、才能、成果、結果などです。もっとも、影響や結果みたくに、「出る」とも言うものは、概して「不安定」な気がします。

いったい、何を言いたいのかと申しますと、次のようになります。

* 言葉は、うんちにきわめてよく似ている。

言葉とうんちについて、特に重要だと思われる共通点を挙げます。

1) 「あらわれる」のではなく、「出した」結果「出る」ものである。

2) いったん出た後には、長い目で見た場合、じっと静止していることなく、ぶかぶか浮遊するという運動に至る。(※「うんちの化石をテレビで見たぞ」というお言葉に対しては、たとえ、静止して化石化するとしても、化石に至るまでには内部で「運動」が生じるという屁理屈を用意いたしました、念のため。)

3) 出た後の「浮遊＝液化＝気化＝運動」は、「宙ぶらりん状態＝宇宙を支配する偶然性」とほぼ同義である。簡単に言うと、どうなるかは未定の状態に置かれるという意味です。行方不明にもなり得ます。

4) 人は誰もがうんちをし、また、誰もが広義の言葉を発するという意味で、うんちも言葉も、ヒトという種においての普遍性をそなえている。【※「広義の言葉」としたのは、言葉は話し言葉だけに限らなく、手話、ホームサイン、点字、指字、表情、目くばせ、合図、仕草なども含むという意味です。】

5) ぐちゃぐちゃごちゃごちゃしている。

以上五つの点が、共通しているように思われます。

うんちは、この惑星においては、何かに帰っていきます。分子、原子レベルで循環するそうです。

音（おん）である言葉は、それを「発した＝出した」人自身の内部で、あるいは、その人と他の人たちとの間で、またその人と何らかのもの・こと・現象との間で影響を及ぼし合います。

*

今回は、主にうんちについて書いていますが、その兄弟姉妹である「うんこ」という言葉を何げなく広辞苑で引いていて、語源が載っているのには、びっくりしました。「うん」というのが「いきむ声＝息む声」から来ているというのです。

「うん」と素直にうなずけず、「うーん」と思わず息んでしまいました。「いきむ＝息む」とは、息をつめてお腹に力を入れて、「うーん」と気張ることです。何だか、ますます、うんちに思い入れを深める結果となりました。ここで、さきほど書いた言葉を繰り返します。

*言葉とうんちは共に、体にある穴から出てくる。

この「出てくる」、つまり「出る」という言葉が気になって仕方ないのです。なぜなのか？ おそらく幼児体験と関係があるように思われます。幼児体験ですから、よくは覚えていません。

でも、かねてより、人間は一人であっても複数形であるとか、多面的な存在であるとか、常に揺れ動いている流動的な「状態＝常態」にあるなどと考えてきました。

そうした考えからすると、大人や子どもや幼児は別個の存在ではなく、連続しているというふうに感じられるのです。自分の場合で申しますと、「あな」とか「でる」という言葉やイメージを頭に浮かべると、懐かしく切ない思いがよみがえってきます。ちょっと、エロチックなわくわく感も覚えます。

小さな子どもは、「あな」とか「でる」という言葉や、そうした現象に対してすごく興味と愛着を示します。周りに幼児や小さな子どもさんがいて、毎日、あるいは日ごろよく接する機会のある方なら、体験的にご存知ではないかと思えます。

たとえば、座布団でドーナツみたいに真ん中が開いたものがありますね。幼い子どもさんに見せてやってください。必ず、その穴に興味を示し、手を突っ込んだり、中を覗いて向こう側を見たりしますよ。うれしそうに、または真剣な顔をしてそんな行動をします。

また、練り歯磨きのチューブや、中身の入ったマヨネーズの容器なんかを、チューッと絞って見せたとき。当然、にゅーとか、にゆるにゆるという感じで中身が出て来ますね。その様子を見た時の子どもさんの顔をよく見てください。これまた、うれしそうな、あるいは真剣な表情になります。

中には、きゃっきゃって言って、喜ぶお子さんもいるにちがいません。あなは、あなどれないです。人間の原点かもしれません。マジにそう思います。

*

そんなわけで、「出る」という言葉に対し、内なる幼児が興味を示しているようなのです。つまり、何だか分かんないけどすごく気になる、という感じです。

そうした内なる幼児の思いに対し、次のように、内なる大人が屁理屈めいたことをつぶやきます。

* 「出る」の中心的なイメージ（コア・イメージ）は、うんちをすることである。

ん？ ですよ。なぜ、うんちなのか？ と疑問をお持ちの方が、たくさんいらっしゃるにちがいません。涙だって、よだれだって、おしっこだって、汗だって、おならだって、みんな「出る」って言うじゃないの？ どうして、うんちだけが、「特権化＝特別扱い＝えこひいき」されなければならないの？

ごもっともなご質問だと存じます。

ここで、「うんち＝何ものか」と、人間の出発点である赤ちゃんとの「であい＝出会い＝で合い＝出愛」について、考えてみましょう。

生後あまり経過していない赤ちゃんが、なるべく固形に近いうんちをほぼ初めて、しかも裸で排泄した場合を想定しています。たぶん、「あれっ？」って感じで、「見る＝知覚する」のではないのでしょうか？

赤ちゃんは、大人のような言葉を発することはできないと思われまので、「翻訳＝意識＝超訳＝想像」しましょう。「あれっ？ ＝出た＝何だろう？ ＝どこから来たのだろうか？ ＝（外部から）あらわれた」という感じではないのでしょうか？

さて、ここで、「いないいないばあ」という赤ちゃんを対象とした遊びが、赤ちゃんにとって「いる／いない」「ある／ない」「あらわれる／きえる」という現象を体感する象徴的な体験であるらしい、という「説＝与太話」を思い出しましょう。それを前提に、話を進めます。

ある赤ちゃんが、「未分化」というか、自分と他者とを意識していない「段階＝時期＝状態」であれば、「あれっ？ ＝出た＝何だろう？ ＝どこから来たのだろうか？ ＝（外部から）あらわれた」と言えそうです。

一方、自分と他者との区別ができ始めた「段階＝時期＝状態」であれば。「あれっ？ ＝出た＝何だろう？ ＝自分から出たのかなあ？ ＝自分が出したのかなあ？（＝「（外部から）あらわれたのではない）」という具合になるような気がします。

もしも、こんな経験をしたとすれば、これって、赤ちゃんにとっては大発見だと思います。言い換えると、「（外部から）あらわれたのではない」（否定）を「知覚＝意識＝思考する」のは、同時に、「（外部から）あらわれる」（肯定）を「知覚＝意識＝思考する」ことでもあるからです。

もう少し正確に言うと、「（外部から）いきなり、あらわれる」＝「不意の出あい」＝「遭遇」（肯定も否定もない＝肯定も否定もできる余裕はない）が生じたのではなく、「自分の中から外へ出た」＝「どこからかではなく、自分から出た」＝「『ない』が『ある』になった」＝「『いないいないばあ』が生じた」と言えそうです。

「自（内部）と他（外部）の区別の萌芽＝誕生」、「自己意識の萌芽＝誕生」、「自他未分化からの離脱の始まり」、「自我の目覚め」という「感じ＝テキトーなイメージ＝思い込み＝嘘は泥棒のはじまり」でしょうか。

*

以上を要約しますと、赤ちゃんにとって、「うんち＝何ものか」は、たとえ「うん」と息んだにしろ漏れたにしろ、「出た（＝あれっ！？）」と「出した（＝やっぱり！）」の中間というよりも、むしろ、その両者の連続した意識のうちでは、「出した（＝やっぱり！）」寄りにある出来事である、という気がします。

言い換えると、「うんち＝何ものか」を「出した自分」を意識することは「自分」を意識すると同時に、「他者＝世界」の存在を意識することにより、両者が異なると意識することでもある、となります。

具体的に言うと次のようになります。「うんち＝何ものか」が出た。でも、うんちは自分が出したみたいだ。自分の体から離れてここにあるうんちは自分の一部でもあり、もう自分とは関係のないものでもある。とにかく、自分から「隔てて＝離れて」、そこにある。存在する。重要な点は、「自分から『隔てて＝離れて』」です。

さきほども申しましたように、以上述べたことは、うんちを出した赤ちゃんの思いを、大人が「翻訳＝意識＝超訳＝想像」したものでしかありません。

*

もう少し厳密に言います。

「出した（＝やっぱり！）」を、あえて「出た（＝あれっ！？）」へと「引き戻す＝逆戻りする」意識の働きもあります。

つまり、自分のした行為の責任を「周りの世界＝他者＝世界」に転嫁することにより、まるでそれが自然発生的な現象であるかのように装う、あるいは、故意にそうだと思いつ込むことにより、その現象との距離感を演出しようとする場合があります。

簡単に言うと、「これ、わたし（ぼく）のうんちじゃない」です。

なぜ、そのような距離感の演出をするのかということ、うんちが自分から「離れる＝分離される」、あるいは「分離する＝周りの世界の一部になる」さまを「見る＝知覚する」からです。大切なのは、これは演出であって断定ではないという点です。簡単に言うと、

「これ、わたし（ぼく）のうんちじゃないということにしておこう」です。

断っておきますが、赤ちゃんにとっては、自分と「周りの世界」は分化されているような気もするし、分化されていないような気もするという、きわめて曖昧な状況にあるらしいのです。

ただし、ここで次のように考えないでください。

やっぱり赤ん坊だね。分からないんだね。「自分」と「他者＝世界」が区別できないんだね。

強調しておきたいのは、「自分」と「他者＝世界」が区別できないという状態は、決して赤ちゃんだけの話ではないという点です。大人と呼ばれたり、自分を大人だと思っている人にとっても、状況は同じなのです。

大人は「自他未分化」という階段を晴れて卒業して、「自他分離」という階段に上ったというような考え方は、「嘘＝作り話＝与太話」です。

百歩譲って、「自分」と「他者＝世界」という別個のものが存在するならば、比喩的に言えば、それは固体のように、どかーんと存在するのではなく、液体か気体のように、時によって混じり合ったり、分離し合ったりする形で存在するのでしょうか。さらに比喩的に言えば、分子あるいは原子的レベルで混在しながら、別個のものとして存在するという感じでしょうか。

混じっているけど、別——。そんなふうにも言えそうです。

たとえば、ぼけーっとしている時、うとうとしている時、眠っている時、あるいは、動転している時、精神的にかなり動揺している時、ショックを受けた時、酔っ払っている時、あるいは、何かに夢中になっている時の大人は、「自分」と「他者＝世界」が混じり合った状態にあるはずで、こうなると、人間は常時、そうなっているとも言えそうです。いわゆる常態です。

ヒトという種は、ヒト自身が思っているより、ぼーっとしている——。そんなふうに見えるてなりません。

*

ここまで書いたところで、前のほうの文章を引用します。

肛門から出てくるうんちですが、個人的には次のようにイメージしております。

* 「自分」と「他者＝世界」の「間（＝ま・あいだ・あわい）で、ぶかぶかと浮いている。

* 「出る」とは、「出た」後には、「ぶかぶか浮いている」状態に落ち着く。

このイメージにおいては、躍動感までは行かない浮揚感（＝運動）つまり「ぶかぶか」が非常に重要です。

* 出たものは、「静止」してはいない。

この点に、注目していただきたいのです。

以上が、引用部分です。

これって、言葉とそっくりではないでしょうか。

「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」と「ぶかぶか浮いている」とは、静止していなくて、揺らいでいて、不安定で、いい加減だ、という点で、酷似しています。

言葉もうんちも、穴から出て、きわめて不安定な状態をさ迷っているのです。念のためにお断りしますが、いい悪いとか、正しい正しくないの問題ではありません。そうなっているという「話＝フィクション＝与太話」として受け取ってください。

ちなみに、すべての言説は、「話＝フィクション＝与太話」としてしか存在し得ないのです。言葉という代理を使っている代償です。言葉を用いる以上、人間は言葉と「戯れる＝もてあそぶ＝もてあそばれる」しかないのです。言葉を「コントロールする＝支配する＝整合性を持たせる＝論理的に操作する＝使いこなす」のは無理なのです。それくらい、「あるものを『あるもの以外のもの』で代用する」仕組みは、あなどれないし、誤魔化しがきかなくて、しつこいと考えたほうが、人間にとっては「潔い＝誠実な＝身の程をわきまえた」態度であると言えそうです。

*

ここで話を飛躍します。

言葉とうんちが似ているように、言葉とうんちと人間は似ていると思います。

その話に入る前に、ちょっと休憩しましょう。

【後記次回は、この駄文の続きである「言葉とうんちと人間（人間編）」を投稿する予定です。】

09.11.12 言葉とうんちと人間（人間編）

◆言葉とうんちと人間（人間編）

2009-11-12 13:58:56 | さくぶん

言葉とうんちが似ているように、言葉とうんちと人間は似ている。今回は、そういう話をしたいと思います。

前回と今回のテーマをつなげるために、前回の最後のほうで書いた部分に少し加筆して、以下に引用します。

「(うんちを自分が息んで)出した(=やっぱり!)」を、あえて「(うんちがどこからか)出た(=あれっ!?)」へと「引き戻す=逆戻りする」意識の働きもあります。

つまり、自分のした行為を「周りの世界=他者=世界」に責任を転嫁することにより、まるでそれが自然発生的な現象であるかのように装う、あるいは、故意にそうだと思いつ込むことにより、その現象との距離感を演出しようとする場合があるのです。

簡単に言うと、「これ、わたし(ぼく)のうんちじゃない」です。

なぜ、そのような距離感の演出をするのかというと、うんちが自分から「離れる=分離される」、あるいは「分離する=周りの世界の一部になる」さまを「見る=知覚する」からです。大切なのは、これは演出であって断定ではないという点です。簡単に言うと、「これ、わたし(ぼく)のうんちじゃないということにしておこう」です。

以上が引用部分です。

*

さて、キーワードは「演出」です。

そういう「振りをする＝装う＝演じる」という行為は、「フィクション＝お話＝嘘＝説＝神話＝物語」を「作る＝でっちあげる＝捏造（ねつぞう）する＝想像する＝創造する＝妄想する」ことに他なりません。

言い換えると、言葉にしろ、うんちにしろ、自分の口、あるいは肛門という穴（内部と外部の「境い目＝接点＝辺境」）から出た、音（おん）、および固形物あるいは半液状の物を、自分から出たものではない振りを装う行為です。

なぜ、こんな込み入った行動を人間はするのでしょう。たぶん、怖いからだ妄想しています。恐怖心をやわらげたいからにちがいありません。では、何が怖いのでしょうか。

それを解く鍵は「あらわれる」という言葉とイメージにあるような気がします。

*

順に説明していきます。まず、前提として確認しておきたいことがあります。

* 「あらわれる」と「出る」に先立って、「出あう・あう」という「出来事＝事件＝偶然性の生起」があります。その次に、あるいは並行して、「あらわれる・出る」という「知覚」が生じます。この「出来事＝事件＝偶然性の生起」と「知覚」は、通常、「きわめて短期間＝ほぼ瞬時」に起きます。

では、「あらわれる」の補足説明からします。「あらわれる」とは、「見る・見える＝知覚する」という能動的な自分の行為を、「周りの世界＝他者」に責任を転嫁することにより、「受動的な行為に転換する＝下手に出る＝恐怖感・不安感をやわらげる」、という身体的な知恵が働いた結果としての言語的な操作であると思われます。

簡単に言いますと、こっちの責任で「見ちゃった」のではなくて、「わたしの責任じゃないよ＝あんたが悪いのよ」という感じで、向こうが勝手に姿を「あらわした」ことにしてしまう、という意味です。ずるいと言えばずるいし、精神衛生上、自分を守るためのだから賢いと言えば賢いです。やっぱり、人間はしたたかだという感じでしょうか。

一方、「出る」とは、「見る・見える＝知覚する」という能動的な自分の行為を、「周りの世界＝他者」に責任を転嫁することにより、「受動的な行為に転換する＝下手に出る＝恐怖感・不安感をやわらげる」、という身体的な知恵が働いた結果としての言語的な操作

である、という点では「あらわれる」と同じです。

ただし、自分が作った、あるいは、「生じさせた＝起した」現象を、「周りの世界＝他者」に責任を転嫁することにより、まるで自然発生的な現象であるかのように装う、あるいは、故意に思い込むことにより、その現象との距離感を演出しようとする言語的な操作であるように思えます。

端的に言うなら、「あんたなんて、知らないよ＝はじめまして」と、とぼけるのです。「とぼける＝よそよそしくする＝距離感を演出する」ことで、精神的な安定を装い、安定を装うことで安全を得たと自分に言い聞かせるのです。一種の自己催眠です。「知恵」と呼ぶ人も、いそうです。

*

どうして、「あらわれる」と「出る」という言葉やイメージを使って、「見る・見える＝知覚する」という能動的な自分の行為を「周りの世界＝他者」に責任を転嫁するのでしょう？ 次のような説明が可能かと思われまます。

「出あう・あう」⇒「あらわれる」⇒「出る」

今図式化した順に、恐ろしいからなのです。実は、この三つの体験は別個のものではなく、本来は「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」しています。人間は、「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」に「出あう・あう」体験を「見る・見える＝知覚する」という行為を通して整理します。

「整理する」とは「分かる・分ける」「知る」「名付ける」といった行為によって、恐ろしく得体の知れないものを「手懐ける・てなずける」ことです。

なぜ、「出あう・あう」が得体の知れない恐ろしい体験なのかということ、「いないいないばあ」だからです。「いないいないばあ」とは、「いない＝無＝暗黒＝絶対的孤独＝絶望的トホホ感」と「ばあ＝いる＝存在＝明かり＝自分が独りではないという幸福感＝わくわくどきどき感」を同時に疑似体験する遊びだと言えそうです。

赤ちゃんや幼児にとっては、「いない」という状況ほど恐ろしいものではありません。本能という点から考えると「お乳やまんまがもらえない＝飢え・餓死」につながる生物としての危機的状況およびその前兆です。一方、「ばあ」は「お乳やまんまにありつける」可能性につながります。

でも、「ばあ」とは、「お乳やまんま」と「出あう・あう」可能性であると同時に、自分が何かの「まんま」にされてしまうとか傷つけられる可能性でもあります。自然界では、

日常的に起こり得る当たり前の出来事です。

「何か」に「出あう・あう」という体験は、その「何か」に左右される体験だと言えます。赤ちゃん、幼児、子ども、大人にとって、「何か」が自分に「快または生」をもたらすものか「不快または死」をもたらすものかは、「決定できないもの＝ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」なのです。

大人くらいになると多様な経験を積んで、高をくくっていますから、「決定できる」と思い込んでいます。でも、それは結果なのです。自分に「快または生」をもたらすものを出あうことが多かったから、その結果として、たまたま大人になっただけです。

裏を返せば、「不快または死」に出あったために、「なくなった＝無くなった＝亡くなった」人たちがたくさんいたのです。さもないければ、人間は「不死身＝不死」だということになります。

*

前置きはそこまでにして、核心に入ります。

「言葉とうんちが似ているように、言葉とうんちと人間は似ている」において重要な意味を持つのは、言うまでもなく、「出る」です。人間は何から「出る」のでしょうか。さまざまな解釈ができますが、生物学的に考えましょう。

膣（陰門）から出ます。いや、出るそうです。母親の視点からだと「出産」、子どもの視点からだと「誕生」と言いますね。いずれにせよ、膣（陰門）から出るわけですが、あくまでも物心がついてある期間が過ぎた人間でなければ、「自分が膣（陰門）から出た」という認識には到達できないように思います。

無理を承知で、あくまでもいわゆる一つのお話＝フィクション＝嘘として、生まれる当事者の赤ちゃんの視点を、想像＝妄想＝空想してみましょう。

*生まれつつある赤ちゃんにとって、「自分は膣（陰門）から出る」という感じはないような気がします。むしろ、あえて出まかせで言うとしたら「世界があらわれる」のではないのでしょうか。

「あら、割れる」という感じですか。桃太郎にも相通じるイメージですね。「あら、（桃の皮が）割れちゃった」＝「あらわれちゃった」。そして産湯に浸かり、お湯で「あらわれる＝洗われる」。

おふぎけはそれくらいにして、マジで考えましょう。

生まれつつある赤ちゃんにとって、「世界はあらわれる」。

そうした前提で、お話を進めさせてください。

*「あらわれる」の中心的なイメージ（コア・イメージ）は、生まれたばかりのヒトが赤ちゃんとしてこの世界と「出あう」ことです。

以上のようにも言い換えられそうです。「出会い＝出合い＝出愛」です。

*「見る・見える＝知覚する」という能動的な自分の行為を、「周りの世界＝他者」に責任を転嫁することにより、「受動的な行為に転換する＝下手に出る＝恐怖感・不安感をやわらげる」という最初の体験は、「誕生＝出産＝世界との出あい」なのです

天井の染みやトイレの壁の模様にも、何かが「あらわれている」。テレビ画面の走査線か画素の集まりに、番組の映像が「あわられている」。化学繊維のかたまりである、くまのプーさんのお人形に、くまのプーさんが「あらわれている」。ケータイの液晶にお友達や好きな人の姿が「あらわれている」。

蛇足ながら、「あらわれている」の基盤となるのも、また例の「あるものの代わりに『あるもの以外のもの』を用いる」という代理の仕組みに他なりません。

こうした「あらわれ」の原体験が、「おぎゃーっ！」なのです。まことに「おめでたい＝祝福すべき＝感動的な＝驚嘆すべき」話ではありませんか。

*

話が前後して恐縮ですが、うんちに戻ります。

*「あらわれる」の中心的なイメージ（コア・イメージ）は、生まれたばかりの人間が赤ちゃんとしてこの世界と「出あう」ことである。

これは人間の原点と言えそうです。もう一、人間にとって原点と言えそうな体験が、前回お話した、「初めてのうんち」です。今回は、ちょっと視点をずらします。

*「出る」の中心的なイメージ（コア・イメージ）は、うんちをすることではないでしょうか。

たった今書いた文に、赤ちゃんという言葉がないことに注目してください。ここでのうんちは、赤ちゃんも、いわゆる子どもも、いわゆる大人も、みんな含めての排便とい

う、人間にとってきわめて基本的で重要な行為として、受け取っていただきたいのです。

赤ちゃんが初めて、自ら息んで外に「出して」おきながら、他人事みたいに「出た」と体感する、象徴的な意味については前回に述べました。今回していますのは、この駄文を書いている者はもちろん、この駄文をお読みくださっているみなさまを含めてのお話なのです。

人間である限り、誰もが、何かの形で、外から食物を体内に摂取し、その一部を自分の身体の一部と化し、残りのものを「外へと返す＝出す」という「いとなみ」をほぼ毎日行っています（便秘でお悩みの方には、深く同情申し上げます）。

呼吸という形で、酸素を体内に取り入れることも、基本的には同じです。なにしろ、人間は酸素と交換して、二酸化炭素を排出しているのです。

ということは、人は「自と他」などと偉そうに抽象論を言う以前に、「生物＝生体」としてのレベルにおいて、「周りの世界＝他者」と同化、あるいは、混じり合って存在しているわけです。ゾウリムシさん、ギンバエさん、アサガオさん、コビトカバさんたちと同じです。

前回と前々回において、「心理＝精神＝心」のレベルで、「自分」と「他者＝世界」は、はっきり分けられるものではないという意味のことを書きました。さらに、次のようにも言えるのではないのでしょうか。

*物理的、あるいは生物的レベルでも、「自と他」は、はっきり分けられるものではない。つまり、人間も「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」した存在である。

ところで、うんちって、自分でしょうか？ それとも、自分の一部と言うべきなのでしょう？ もう外に出たのだから「他者＝自分とは関係のないもの」でしょうか？

個人的な話をしますと、排便のたびに、自分ほうんちをよく観察します。そのほうがいと、かかりつけのお医者さんに言われて、納得したからです。

お医者さんの話では、「出る」うんちには、いろいろなものが「あらわれる」そうです。よく考えてみると、そうですね。自分の中から出たものですから、自分の中のことを「知っている」わけです。

たとえば、黒いとか、血が混じるは危険であることを知らせる「信号」だと、教わりました。もちろん、固い軟らかいも大切な「信号」です。沈むより浮くほうがベターだとも教えてもらいました。理由は聞き損ねましたけど、本当らしいです。このことは雑

誌か新聞にも書いてありました。どうやら、以下のように要約できそうです。

* 「出る」ものに「あらわれる」ものを、「見る＝知覚する」ことが大切である。

これって、自分でもできる、いや、家でなら自分でしかできない、医療の基本の一つではないでしょうか。

世界の衛生状態が悪い地域では、現在でも、「出る」ものに「あらわれる」ものだけでなく、「いる」ものを「見る＝知覚する」ことが大切だと耳にします。回虫（カイチュウ）とかギョウチュウのことです。この国でも、そうした線虫たちを撲滅できたわけではないので、油断はできません。そのたぐいの虫や菌は（きわめてテキトーな表現でごめんなさい）、ヒトには適度に必要らしいと聞いた覚えがありますが、詳しいことは忘れしました。

そう思うと、いろいろなことを教えてくれる、うんちって、愛（いと）おしく、健気（けなげ）な存在ではないでしょうか。

「生きる」という言葉が「息・息をする」と語源的につながっているらしいということ思い出しましょう。息（いき）んで（＝気張って）出しただけのことはあります。ごくろうさま。ありがとう。さようなら。また会う日まで。そんなふうに声を掛けてやりたくなります。

実際、その日の気分で、そんな言葉を口にして、水で流してお別れする時もあります。ほぼ毎日（※人によっては、不定期に）出あって、別れる、自分の一部。それが、うんちです。

というわけで、うんちに対して、鼻をつまむのではなく、花を持たせてやりたいのです。繰り返します。

* 「出る」の中心的なイメージ（コア・イメージ）は、うんちをすることである。

ご理解をいただければ、嬉しいです。

あっ、忘れるところでした。もう一つ、うんちに花を持たせてやりたい大切な理由があるんです。決定打みたいなものです。どうやら、赤ちゃんや幼児は、うんちにとっても愛着を感じているみたいなんです。

フロイトが、赤ちゃんがお乳と乳房や哺乳瓶の乳首に依存し愛着する時期を口唇期、その次を肛門期と名付けたのを、うさん臭く思っていたのですが、あながち出まかせとも言えないなあ、と感じています。

クレヨンしんちゃんの、うんちやお尻に対する愛着と執着なんて、幼児の気持ちをよく観察した結果みたいで、あなどれないです。大人が、ばばっちい（※広辞苑によりますと「ばば」にはうんちの意味があるとのこと）とか、ばっちいと怒鳴りつけて、「しつけ＝押し付け＝教育」をしなければ、きっと赤ちゃんは、ずっとうんちと戯れていますよ。それほど、うんちが好きらしいのです。

ところで、フロイトには、シリアス（＝serious ≡ silly ass）なのか、おふざけなのか、決断（けつだん）（≡穴断）に苦しむほどのお尻への執着がありますね。

ユダヤ教およびキリスト教の影響や、狩猟民族・騎馬民族の血を引く中央ヨーロッパの風土が関係しているのでしょうか？ それとも、ユニバーサルなものなのでしょうか？ それだけでなく、何かフロイト自身の幼児期のトラウマみたいなものも感じませんか？ 「シグちゃん、そんなところ触っちゃいけません。ママがお仕置きしてあげます」。「わーん」なんて具合に。

*

では、まとめに入ります。

言葉とうんちと人間は似ています。まず、三者とも「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」しています。また、三者とも、穴から出て、世界と出あい、いつか消えていく運命にあります。切ないです。

とはいうものの、うんちと人間は、土や水に戻り、新たな生命へとつながっていくこともあるでしょう。そう思うと救われます。

では、言葉はどうでしょう？

話し言葉のほとんどは、消える。一部は、録音されたり文字化され、書き言葉になる。記憶に残るという「ロマンチック＝気休めの＝与太話的」な言い方もできるでしょう。

書き言葉のほとんどは、破棄される（実際には、破棄されるのは文字ではなく、紙やディスクなどの文字を記録する「媒体＝メディア」ですけど）。一部は、保管される。これもまた、記憶に残るという「ロマンチック＝気休めの＝与太話的」な言い方もできるでしょう。いずれにせよ、何らかの物になりそうです。たとえば、新聞・古雑誌・フロッピーディスク・フラッシュメモリーなどになり、「リサイクル＝リユース＝輪廻」される。あるいは、焼却されるか、腐敗する。パンタ・レイ。

宇宙のどこかに言葉の墓場があって、そこに人間がワープロで打ち損ねた言葉がぶか

ぶか浮かんでいる。

確か、そのような意味のことを、かつて村上春樹氏が書いていらっような記憶があります。うろ覚えですので、勘違いかもしれません。でも、美しく哀しいイメージなので、よく思い起こします。

*

でも、そんな切ないイメージで話は終わらないようです。言葉は、人間に働きかけます。うんと息ませます。行動を起こさせます。そのせいで、人間はこの惑星のありとあらゆるところで、わがもの顔でうんちとおしっこをしまくっています。マーキングというやつです。その結果として、この惑星をめちゃくちゃにし、めちゃくちゃにしつつあり、これからもめちゃくちゃにしていくだろう、とも言えそうです。永遠に、というわけにはいかないようですけど。

つまるところ、言葉もうんちも人間もつながっているようです。ここまでくると、その大いなる連鎖においては、言葉もうんちも人間も、「わけ=分け=訳」が分からない、「めちゃくちゃ」=「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」状態になっています。

なぜでしょう？ 脳内異変が起こったらしい人間がしゃしゃり出てきて、うんちを出しまくり（息み=頑張り&マーキングをし）、言葉を出しまくっているからです。

すべては「出た～」の結果とも言えそうです。

*

以下は、前回の駄文から一節を引用し加筆したものです。

言葉もうんち人間も、穴から出て、きわめて不安定な状態をさ迷っているのです。念のためお断りしますが、いい悪いとか、正しい正しくないの問題ではありません。そうになっているという「話=フィクション=与太話」として受け取ってください。

ちなみに、すべての言説は、「話=フィクション=与太話」としてしか存在し得ないのです。言葉という代理を使っている代償です。言葉を用いる以上、人間は言葉と「戯れる=もてあそぶ=もてあそばれる」しかないのです。言葉を「コントロールする=支配する=整合性を持たせる=論理的に操作する=使いこなす」のは無理なのです。

それくらい、「あるものの代わりに『あるもの以外のもの』を用いる」という代理の仕組みは、あなどれないし、誤魔化しがきかなくて、しつこい。そう考えたほうが、人間にとっては「潔い=誠実な=身の程をわきまえた」態度であるとも言えそうです。

*

今回をもちまして、「言葉とうんちと人間」というタイトルの駄文＝与太話はおしまいにいたします。

09.11.13 代理だけの世界（1）

◆代理だけの世界（1）

2009-11-13 19:31:55 | さくぶん

* 「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。つまり、代用する。

今書いた、あきれるほどシンプルなフレーズを、さらに短くすると、次のように言えそうです。

*代理の仕組み

以上のフレーズを出発点にして、思うところを書いてみようと思います。

「代理の仕組み」は、この惑星に生息する多種多様な生物に、「知覚」および「認識」と呼ばれる「仕組み＝メカニズム＝システム」という形でそなわっているようです。

当然のことながら、ヒトという種もその中に含まれます。ただし、ヒトの場合には、かつてのしがない尻尾のないサルが、ホモ・サピエンスという尊称を自らに与えるまでに、どういうわけかなっちゃったという経緯があります。

「どういうわけか」については、脳内で異変が起きたらしいという「説＝物語＝フィクション＝与太話」があるそうです。「ズレた」「本能が壊れた」とも、「変奏＝変装＝変相＝『変そうだが＝変みたい』」されているのを見かけた覚えがあります。

脳が肥大化したとも言えそうです。つまり、情報処理能力が飛躍的に高まったという

ことのように。その結果として、言語、貨幣に代表されるヒト同士を「空間的に＝物理的に＝距離的に＝地理的に＝あちこちへ」にも、また「時間的に＝歴史的に＝代々と」、
「情報＝データ」を伝えるという「仕組み＝メカニズム＝システム」が可能となり、実際にそうならなかったみたいです。

*

ヒトにそなわっている知覚器官で、ヒトは「自分の周り＝世界＝森羅万象＝宇宙」の「断片＝情報＝データ」を「信号」として受信し、つまり信号化する。次に、確かシナプスとかいう「糸＝線＝伝導媒体＝道みたいなもの＝管みたいなもの」を通して、脳へと「送り込む＝伝達する＝伝える」らしい。

脳は、伝わってきた「信号」を「処理」するみたいです。「処理」という言葉は、曖昧と言えるほどテキトーなイメージを持っています。「適当にみつろくろてくれ」とか「善処します」なんて言い方に通じるテキトーさを感じます。

「テキトーさ＝いかがわしさ＝胡散（うさん）臭さ」が、「珍重される＝信奉者が現れる＝『いわしの頭も信心から』を地で行く」ことも確かです。宗教やスピリチュアルや自己啓発に、曖昧さを伴うテキトーさが共通するのは、さもありませんという印象をいただきます。

脳に伝えられた「信号」が「処理」される。

今述べた「言い方＝言説＝フレーズ」に対して、「なるほど」と空返事と大差ない感心の言葉を返す人もいるでしょう。「含蓄がある」とか、「奥が深い」とか、「難解である」という印象批評的な思いをいただく人もいるでしょう。脳の研究者でない限りは、それくらいの言葉を吐くか、イメージを持つのか普通だと思われま

いわゆる脳の研究者が、その「言い方＝言説＝フレーズ」をどれくらいの「理解度＝確信＝思い込み＝はったり」を持って受け止めるかも、はなはだ疑問です。

素人の中に、「脳に伝えられた『信号』が『処理』される」というフレーズが、ほとんど「ナンセンス＝無意味＝不条理＝馬鹿らしい＝何も言っていないに等しい」と言っても構わないくらい「曖昧なこと＝分かっていないこと＝解明されていないこと」だと、薄々感じている人たちがたくさんいても不思議ではないと思われま

なぜなら、「脳に伝えられた『信号』が『処理』される」ということを文字通り取るなら、いわゆる「認識する」とか「思考する」とか「思う」とか「考える」という、誰もが日常的に体験している状態を指していると考えられるからです。

専門家も素人も関係ありません。年齢も関係ありません。誰もが、「脳に伝えられた『信号』が『処理』される」を体感しつつあると言えそうです。

*

上で述べた、

* 「体感しつつある」

ということが、

* 「無意識に体感しつつある」

であろうと、

* 「意識的に体感しつつある」

であろうと、

* 意識の代理が、たとえば言葉である

かぎり、

* 「代理」を口にしたり、耳にしたところで、その「内容」は分からない

か、

* かりうじて、ちょっぴり分かった気になれるだけ

な状況だと思われま

ヒトという種は、その

* かりうじて、ちょっぴり分かった気になれるだけという状態を常態にしている

と、かりうじて、ちょっぴり分かった気がします。

でも、「気がする」だけですから、たぶん、ちょっぴりどころか、ほぼ全然分かっていないの

とはいうものの、その

* かるうじて、ちょっぴり分かった気になれるだけ

で、ヒトは日常生活を送るのに支障はないと思われます。ただし、日常生活ではなく、たとえば学者として学究生活を送っているヒトたちについては知りません。

*

単純に考えましよう。

* ヒトは知覚し認識する。

何を？――

自分の周りを。

どんなふうに？――

詳しいことは知りません。ただ、代理として、みたいです。

代理って何？――

たとえば、饅頭の中身ではなくて饅頭の皮だということです。具体的には、言葉やお金が、典型的な「饅頭の皮」です。

皮の中身は分からないってこと？――

たぶん、分からないと思います。

皮だけってこと？――

そうみたいです。

うそー。――

同感です。

*

どうやら、饅頭の中身には絶対にたどり着けないようです。皮だけで満足するしかないみたいです。もちろん、これは比喩です。お忘れなく。

*

少しややこしく考えましょう。

ヒトは「代理」しか「知覚＝認識＝思考＝体感＝理解＝習得＝学習＝記述＝伝達」できない。

何の代理？――

分かりません。「『何か』」の代わりに「『何かではないもの』」を用いる。つまり、「代用する」＝「代理の仕組み」を採用している限り、分からないようになっているからです。

「意味されるもの」と「意味するもの」とかいう話を聞いたんですけど。――

それは聞いた記憶があります。その理屈を考えた人に質問してください。信じがたい話だとしか申せません。

じゃあ、「『何か』」の代わりに「『何かではないもの』」を用いる。つまり、「代用する」の「何か」って何？――

ヒトには、「絶対に分からないもの」「絶対に直接的に出あったり、触れたり、知覚したり、悟ったり、まして認識したりできないもの」とでも申しますか。

ペシミスティックですね。――

はあ、まあ。

夢も希望もないじゃないですか？――

はあ、まあ。

そんなんじゃ、元気出ませんよ。頑張れませんよ。――

そうでもないですよ。居直るとか、はったりをきかすとか、都合の悪いことは忘れるとか、自己催眠をかけるとか、妄想するとか、幻想を見るとか、幻想を信じるとか、幻覚に陥るとか、すれば元気も出ますし、頑張ることもできるみたいです。

でも、夢も希望もないより、ましじゃないですか。――

そうお思いになる方が、圧倒的に多いようです。さもないと、ヒトは「生きて＝息で」
いけません。

*

ちなみに、ここに書かれている言葉たちも「代理」です。「代理」のお世話になって、
この駄文＝与太話は書かれているとも言えます。

ヒトは「代理」なしには生きていくことができないわけですから、「代理」の「効用＝
良い面＝メリット＝方便＝使い道＝利用の仕方」について考えるというスタンスをとっ
てみましょう。

そうしたスタンスを「代理至上主義」とでも名付けたいと、ふと思いました、すぐ
に馬鹿馬鹿しいとふと思いましたので、やめておきます。

なぜ、「代理至上主義」という名称が馬鹿馬鹿しいと思ってしまったのか。そんなこと
を考えてしまいました。

一、「代理至上主義」はヒトの常態ではないか。あえて名付けるほどのことでもない。
そんな気がします。

二、「代理至上主義」を自覚しているかいらないか。これは、イエスとノーではっきり分
けられるものではないと思います。絶対的なイエスと絶対的なノーの間には、グラデー
ションがあると思われれます。そのグラデーションという帯の中をあっちへこっちへと千
鳥足でブレ続けている。それが、ヒトの常態というべきではないか、という感じがしま
す。

三、「代理至上主義」とは、ひょっとすると「禁句＝タブー＝それをいっちゃおしまい」
ではないでしょうか。

以上、三点が頭に浮かびましたが、読み直してみると、「代理至上主義」とは馬鹿馬鹿
しいどころか、口にするのはばかれる恐ろしい言葉ではないかと思いました。

*

「代理至上主義」という言葉はさておいて、「代理」の「効用＝良い面＝メリット＝方便＝

使い道＝利用の仕方」について考えるというスタンスを実践してみましょう。

で、ふと思ったのですが、以下のような「代理」の利用の仕方がありそうです。

A) 「代理至上主義」

B) 「代理」の「効用＝良い面＝メリット＝方便＝使い道＝利用の仕方」について考えるというスタンス

このようにA)とB)を並べた場合、A)はB)の、そして逆にB)はA)の「代理」ということができるのではないのでしょうか。

同じく次のようにも言えそうです。

X) 代理の仕組み

Y) 「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。つまり、代用する。

このようにX)とY)を並べた場合、X)はY)の、そして逆にY)はX)の「代理」ということができるのではないのでしょうか。

以上の二つの例は、「言葉＝フレーズ＝代理」同士が「代理し合っている」とでも言えそうな状況です。言い換えると、「代理が代理し合っている」状況となりそうです。

ただし、いずれにせよ、A)、B)、X)、Y)という各代理が「何の」代理であるかは依然として不明なまま、という「付帯条件＝付帯状況」が付きまといまいます。

話を中断します。

*

以上の「代理」の利用の仕方を読み返していて、さらにふと思ったことがあります。

* 「説＝物語＝フィクション＝与太話」

このフレーズは、さきほど書いた文章の一部を引用したものです。

「＝」で結ばれた四つの語は、それぞれ「代理」の関係にあると言えるのではないのでしょうか。

この「駄文＝与太話」では。やたら「＝」を用います。これは、センテンスなり文章の流れを固定化するのを避けるために故意にやっている「おまじない＝儀式＝癖＝惰性」みたいなものです。書いている本人は戦略だと考えているのですが、どうやら「全然効き目のない戦略＝独りよがり＝独善＝愚行＝単なるアホ」だとも薄々意識しております。「薄々」になっているところが「惰性＝アホ」たるゆえんであります。

次のような例もありましたので、引用します。

＊「知覚＝認識＝思考＝体感＝理解＝習得＝学習＝記述＝伝達」

本来「＝」とは、数学で使われている等号と呼ばれている符号なのですが、数学とは全然関係なく使っております。

フランスという国のある種の文系の学問領域で、やたら数学や自然科学の符号を使っていることに対し、理系の学者のうちで血の気の多い人たちがかんかんに怒ったという話を、聞いたか読んだかした覚えがあります。

その血の気の多い人の中でも、やたらねちっこい性格の人たちが、いかに理系様のご符号が誤用されているかを、自分の専門の研究をおっぼり出してまでして、わざわざ「悪態＝議論」や「悪態＝論文」や「悪態＝本」という形で、世に訴えようとしたらしいのです。

この「悪態＝駄文＝与太話」とある意味で似ていて、ほほえましく思いました。

で、その感想なのですが、どうやら、例の血の気の多い理系様たちは、「自分の周り＝世界＝森羅万象＝宇宙」を対象に「研究」とやらをしているあまり、「自分の周り＝世界＝森羅万象＝宇宙」が代理であることを失念しているか、すっとぼけているようなのです。

一方、批判された文系の方々も、自分たちが学問をする以上使用せずにはいられない言葉や符号が「代理」であることを失念しているか、すっとぼけているようなのです。

うる覚えの話を思い出しているだけなので、たった今書きましたことは、「悪態＝思い込み＝勘違い＝誤解＝曲解＝駄文＝与太話」以外の何ものでもありませんことを、ご承知願います。

*

話を変えます。

* 「知覚＝認識＝思考＝体感＝理解＝習得＝学習＝記述＝伝達」

ただ今引用したフレーズは、「説＝物語＝フィクション＝与太話」とはちょっと違って
います。本当は、次のように記述したかったのです。

* 「知覚＝認識＝思考＝体感＝理解＝／ or 習得＝学習 or 記述 or 伝達」

でも、このように書くのが面倒なので、やめただけです。基本的には、次のような意
味で、ある程度厳密に書き分けたいのです。

* 「＝」＝つまり＝および

* 「or」＝あるいは

でも、最近、「つまり」「および」「あるいは」「または」というつながりの言葉の境い目
が、自分の中できわめて「曖昧＝テキトー＝懐疑的＝『こんな分類、嘘ちゃうか？』的」
になってきたために、面倒臭さと「ま、いっか」の相乗作用で、ええい、もう「＝」でつ
なげてしまおう、という態度と記述になっているという事情があります。

それくらい、「真面目に＝不真面目」に「代理」一般および「代理」の典型例である言
葉について考えております。本気でマジなお話です。

*

* 「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。つまり、代用する。

* 代理の仕組み

とにかく、この「仕組み」は、どうあがいてもビクともしない感じなのです。

09.11.14 代理だけの世界 (2)

◆代理だけの世界 (2)

2009-11-14 12:50:44 | さくぶん

* 「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。つまり、代用する。

* 代理の仕組み

相変わらず、上述のフレーズについての与太話です。

*

まず、当然のことを確認しておきますと、この駄文は言葉、正確に言えば話し言葉、もっと正確に言えば文字で書かれています。

今、ある操作をいたしました。

* 言葉⇒話し言葉⇒文字

このように、「言い換え＝書き換え＝転換＝変換＝心変わり＝裏切り＝翻訳（※翻訳者は裏切り者だとかいうことわざが西洋にあるそうです）＝気まぐれ」をしました。こうした操作を「代理の入れ替え」ととりあえず呼ぶこともできそうです。

やたら「＝」を使って、言葉をつなぐのも、一種の「代理の入れ替え」でしょう。

この操作について、考えてみます。

この操作について考える場合にも、「代理」を使い、「代理の入れ替え」を使わざるを得ないところが、もどかしいし、悔しいとも言えるし、ちょっと「見方を変えれば＝気分転換をすれば」、そのもどかしさと悔しさが快感に転じるなんて、「楽しい＝おもしろい＝倒錯した＝興味深い＝馬鹿みたいな」ことも起こります。

*痛いけど気持ちいい。痛いから気持ちいい。

そんなことを体感なさったことがおありではないでしょうか。それとちょっと似てませんか？

とにかく、ヒトとして生きている限り、「代理」と「代理の仕組み」を「免れることはできない＝避けられない＝なしではいられない＝依存している＝中毒状態にある＝常態化している」みたいなのです。

というか、そういう「前提＝思い込み＝妄想＝とちくるい」に基づいて、「駄文を書いています＝恥をかいています＝汗をかいています（あっ、これは嘘です）＝顎の下辺りを搔いています（これは、考え事をしている時の癖です）」。

*

*代理が何を代理するのは、不明である。

そういうわけですので、さきほどの「言葉⇒話し言葉⇒文字」という言い換えの操作は、あくまでも「代理の入れ替え」であり、その三者が「代理をし合っている」と言っても、その場合の「代理し合う」という言い方は、『何か』の代わりに『何かではないもの』を用いる、つまり、代用する」という「代理の仕組み」における「代理」とは「ニュアンス＝意味＝イメージ」が異なるみたいなのです。

ややこしくなってきたので簡単に言います。

「言葉⇒話し言葉⇒文字」という言い換えは、いわば「代理ごっこ」であり、「代理が何を代理しているかの解明」ではないということです。

お分かりいただけただけでしょうか。

「代理が何を代理しているかの解明」は、「代理の仕組み」を採用し実行している限り、不可能なのです。一方で、「代理ごっこ」は人の「常＝常態＝自然体＝ヒトであれば大人も赤ちゃんもやっていること」です。二者の差は大きいというか、質的に異なるものだという気がします。

*

話を戻します。

まず、当然のことを確認しておきますと、この駄文は言葉、正確に言えば話し言葉、

もっと正確に言えば文字で書かれています。つまり、代理を使って代理について論じようとしています。でも、代理が何を代理しているかは分からない仕組みになっているという前提で、話を進めています。

これは、「ものごとを解き明かす＝究明する＝分かる＝発見する＝真理に到達する＝雲が消えて晴れていく＝はっきりくっきり見えてくる」という「運動＝志向＝指向＝嗜好＝施行＝思考＝試行＝至幸＝齒垢＝はくそ」とは、ほど遠いと言わざるを得ません。

「分かんない」をめぐって、堂々巡りをする。そんな言い方もできるでしょう。

どうして、そんな馬鹿みたいなことを、あえてやっているのでしょうか？ 馬鹿みたいなことをしているのは、「馬鹿＝愚鈍＝愚かで鈍い＝アホ」だからです。アホがアホの確認のためにアホをやっている。アホの、アホによる、アホのための、アホ。なかなか言えていると思います。マジで思います。

ところで、馬鹿だの、愚鈍だの、アホだの、差別語と取られかねない、罵倒をしたり悪態をつくさいに用いる、誠に品のない言葉を使っていることを、お許し願います。

ついでにお許し願いたいことがございます。この駄文は、確かに罵倒であり、悪態であります。また、馬鹿だの、愚鈍だの、アホだのと呼んでいる対象は、この駄文を書いている者を含むヒトという種であります。重ねて、ここで深くお詫び申し上げます。

*

わたしは、おまえとは違って、馬鹿でも愚鈍でもアホでもないぞ。人間様だぞ。ホモ・サピエンス＝英知人だぞ。

そうおっしゃる方がいらっしゃるの、承知しております。お山の大将、いや人間様、つまり年がら年中発情しているエッチ人、いや英知人の中で、多数決を行ったとするなら、圧倒的大差をもって、ヒトが馬鹿でも愚鈍でもアホでもないという「説＝言葉のかたまり＝代理の塊＝フィクション＝物語＝神話＝お話＝語り＝騙り＝ペテン」が「正しい＝理にかなっている＝真実である＝事実である＝当たり前だのクラッカー」とされることも承知しております。

というわけで、この駄文は文字通り駄文であり、文字通り与太話であり、文字通りガセであり、文字通りでたらめであり、文字通り出まかせであります。

「文字通り」＝「言葉通り」＝「代理通り」そうでございます。異存はまったくありません。あるはずがございません。なにしろ、「代理通り」なのですから。

*

さて、この「駄文＝与太話＝ガセ＝でたらめ＝出まかせ」が「駄文＝与太話＝ガセ＝でたらめ＝出まかせ」であるという「スタンス＝おたんこなす」がはっきりしたところで、話を進めさせていただきます。

すべてのヒトによる言葉、もっと正確に言うなら、書き言葉も含め、短いものから長いものまで全部含めての言葉は、「与太＝ガセ＝でたらめ＝出まかせ」です。なぜなら、この駄文は「与太＝ガセ＝でたらめ＝出まかせ」だからに他なりません。そういう「約束事＝ルール＝文法」に従って、この駄文は書かれているという意味です。

繰り返します。

すべてのヒトによる言葉、もっと正確に言うなら、書き言葉も含め、短いものから長いものまで全部含めての言葉は、「与太＝ガセ＝でたらめ＝出まかせ」です。

大切な部分を、簡単に言うと次のようになります。

*あらゆる言葉はでたらめである。

ちょっと説明的に言うと次のようになります。

*あらゆる広義の言葉つまり代理はでたらめである。

代理だけの世界とは、必然的にそうした様相を呈することになります。

くどいですが、申し添えます。この駄文は「与太＝ガセ＝でたらめ＝出まかせ」に他ならないという「約束事＝ルール＝文法」に従ってのお話です。誤解なきよう、お願い申し上げます。

ただし、

*「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。つまり、代用する。

*代理の仕組み

以上の前提に立たない場合は、上述の「代理だけの世界」の様相を免れることができます。そのほうが、精神衛生の面で良いことは言うまでもありません。

つまり、

次のようなスタンスを取るのです。

*代理の正統性=正当性を信じる。

*「代理の代理による代理のための代理」をモットーとし、さらに実行する。

以上二つのフレーズを読み返してみると、別に意識しなくても、ヒトが日々実行していることみたいですね。この駄文が文字通り駄文であることが証明されたようです。

*「代理の仕組み」は圧倒的に強いが、「代理そのもの」も強い。おそらく、後者のほうが強い。なぜなら、ヒト自体が代理と化しているからだ。

これが結論だと言えそうです。

ちなみに、こうなるのは、

*ヒトは「代理の仕組み」を否定できるが、「代理そのもの」が「いる・ある」ことは否定できない。

からでしょう。脳が脳を否定できないのと似ていませんか？ それは no-no なのです。あくまでも、「代理」としての「脳 = no」にとってだけの「話」なのですけど。

09.11.15 代理だけの世界 (3)

◆代理だけの世界 (3)

2009-11-15 16:58:56 | さくぶん

*「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。つまり、代用する。

*代理の仕組み

と言う場合には、「何か」が何であるかは保留されます。「未定＝不明＝分からない」と考えます。「分かり得ない＝分からない仕組みになっている」とも言えます。

「代理の独立」、「代理の自立」、「代理のひとり歩き」というフレーズも頭に浮かびますが、あまり使いたくありません。どうしてなのでしょう。たぶん、代理に主体性があるようなイメージが伴うからだと思われます。

それでは、あまりにもヒトがだらしなさすぎます。なにしろ、比喩的に言えば、ヒトの脳が代理を生んだのですから。「ちゃんと子育てしてよ」とか、「育児放棄、つまりネグレクトが立派な虐待だっていうこと、分かってんの」とか、「自分が出したうんちの後始末くらい、責任もってつけてよ」という感じです。

*

ちょっと言い換えてみましょう。

* 「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。つまり、代用する。

において、

A) ヒトは「何か」を「定める＝明らかにする＝分かる」ことはできない。

B) ヒトは「何か」を「定める＝明らかにする＝分かる」ことはできない仕組みになっている。

A) と B) というフレーズにおいては、ヒトの限界性が指摘されています。

C) 代理はヒトから独立している。

D) 代理はヒトから自立している。

E) 代理はヒトをさしおいてひとり歩きする。

C) と D) と E) においては、代理が前面に出て来て、ヒトが刺身のつま状態になっているイメージがあります。

*

「代理の独立」、「代理の自立」、「代理のひとり歩き」というフレーズに抵抗を感じるのは、あくまでも「ヒトがいて初めて代理がある」という状況が感じられないからだ、今思いました。そうなのです。「ヒトがいるから代理がある」のであって、その逆ではないのです。

とはいうものの、事態はもはや「代理があってヒトがいる」と言えるような気もします。ひょっとすると、ヒトが代理に「依存しきっている＝頼りきっている＝いわば中毒になっている＝なしではいなくなっている＝主導権を握られている＝使われている＝もてあそばれている」状態にあるのではないか。そう思えてきました。

*

話を戻します。

* 「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。つまり、代用する。

*代理の仕組み

と言う場合には、「何か」が何であるかは保留されます。「未定＝不明＝分からない」と考えます。「分かり得ない＝分からない仕組みになっている」とも言えます。

たとえば、「花・はな」という「実体＝ほんまもん＝現物＝物そのもの＝物自体＝現実にある物」の代わりに「花・はな」という文字と音（おん）、つまり言葉を「用いる＝代用する」というレベルの「話＝フィクション＝説＝約束事＝ルール＝与太話」ではないと言いたいのです。

*

分けると分かるかもしれないので、分けて考えてみましょう。

A) 「花・はな」という「実体＝ほんまもん＝現物＝物そのもの＝物自体＝現実にある物」

B) 「花・はな」という文字と音（おん）、つまり言葉

ここで問題にしている「代理の仕組み」においては、A) というものが何であるかは保留＝未定＝不明＝分からないという前提に立っています。とはいえ、この駄文は言葉で書かれているため、言葉を用いなければ、みなさんに読んでいただけないという事情があります。

というわけで、「やむを得ず＝仕方なく＝いやいや＝しぶしぶ＝事務的に＝官僚的に＝『ま、いっか』という感じで＝とりあえず」A)と記述していることを、ご承知願います。つまり、かなりテキトーなことをやっているという意味です。したがって、この文章を駄文だの与太話だのと繰り返し、罵倒し悪態をついている次第なのです。まさに駄文には違いないのですが、いわゆる謙遜で「駄文」とか「拙文」とか「節分」とか「豆まき」とかいうのとは違うと申し上げたいのです。

*

A)「花・はな」という「実体＝ほんまもん＝現物＝物そのもの＝物自体＝現実にある物」

B)「花・はな」という文字と音（おん）、つまり言葉

実を申しますと、このA)は「実体＝ほんまもん＝現物＝物そのもの＝物自体＝現実にある物」などではなく、「代理」なんです。それが「実体＝ほんまもん＝現物＝物そのもの＝物自体＝現実にある物」のような「面＝表面＝顔＝表情＝お化粧＝お面＝仮面」をつけて化けているのです。こんなインチキをいたしまして、申し訳ございません。だからこそ、この文は「駄文なんです＝与太なんです＝ガセなんです」と言い訳するしかなさそうです。

言い訳をさせていただきますと、インチキをしないことには、なかなかA)とB)の基本的な関係をイメージしていただけないのではないかと考えての措置だったのです。それくらい、A)とB)の基本的ではない関係は、イメージしにくいと思われます。

なにしろ、「ほんまもんに見えて、実は『代理＝偽物』」対「代理＝偽物」(※基本的ではない関係＝正確に記述した関係)というのは、ややこしいです。「ほんまもん」対「代理＝偽物」(※基本的な関係＝不正確だがシンプルに記述した関係)のほうが、ずっと分かりやすいですから。

この国のレストランなどの店頭で、ウィンドーに取められたイミテーションのメニューがありますね。あれと似ています。そっくりだけど偽物。そっくりだけど食べられない。でも、あまりにもよくできているために思わず食欲をそそられる。そんな感じです。

ですので、A)は「『実体＝ほんまもん＝現物＝物そのもの＝物自体＝現実にある物』であると『假定＝想定＝錯覚＝事実誤認』しているもの」というのが、最も正確な記述の仕方と言えます。でも、現実には、ヒトはA)が「実体＝ほんまもん＝現物＝物そのもの＝物自体＝現実にある物」だと意識的に(＝確信犯)、あるいは無意識のうちに(＝うっかり犯)「思い込んでいる」のが普通です。

いずれにせよ、「思い込み＝錯覚」であることは同じです。でも、その「思い込み＝錯覚」を責めるのは、個人的な「体感＝実感＝体験」からしても酷だと思います。ヒトである限り、「免れない＝避けられない」たぐいの「思い込み＝錯覚」である気がします。これを避けられたら、「ヒトではない＝ひとでなし」と言っても過言ではないでしょう。

*

というわけなのですが、そのリアルな「騙され感＝思い込み感＝自己暗示感＝体感＝うっかり感＝確信感」を大切にしたいという思いもあります。たとえて言えば、天動説は「正しくなく」て、地動説が「正しい」らしいけど、どう考えても体感的には、天動説が「正しく」て、地動説は「正しくない」気がする。そんな感じがしませんか？

そういう「体感」（あくまでも「体感」ですよ）をしないヒトがいたとすれば、ヒトとしてすごく「変な」ヒトにちがいません。科学者は、そのヒトの知覚機能を検査したり、実験する価値が十分にあると思います。得られるものが多いにちがいません。

もしかすると、『何か』の代わりに『何かではないもの』を用いる。つまり、代用する」という「代理の仕組み」以外の仕組みを備えた脳内および知覚器官での異変が、そのヒトに起こっているかもしれません。もっとも、脳の損傷や精神医学上の疾患と認められる症状を呈している方である可能性も高そうですけど。

*

したがって、A)『花・はな』という『実体＝ほんまもん＝現物＝物そのもの＝物自体＝現実にある物』が本当は代理であることは、心の隅に置いてください。

要領は、「本当は天ではなく地面のほう動いているらしい」と言い聞かせるのと同じです。

または、「テレビを見ていると、ほんまもんを見ている気持ちになるけど、あれは錯覚らしい。テレビに映っているのはコマ送りされた静止画像であり、その画像は画素から成り立っていてほんまもんじゃないし、テレビのスピーカーから流れてくる音は、再生された人工音であってほんまもんじゃないのだ」と自己催眠にかけるのと同じです。

素直に体感に身を任せつつ、「本当はそうじゃないんだよ」と言い聞かせるのです。そう言うだけでも、やはり難しいかもしれませんね。

でも、これって、本当に自己催眠や言い聞かせなののでしょうか？ そう言い切れないという思いが強くなってきました。ヒトにとっての常態に反する状態を言いかせるなんて、やっていいのでしょうか。でも、さきほどの地動説と天動説に似た自己催眠や言い聞か

せは、子どものうちから、学習や教育という形で行われています。さもなきゃ、理科のテストで○がもらえません。

一方で、体感に逆らった自己催眠や言い聞かせなんてする必要はない、という気がします。ヒトはほどよく抜けているほうが、地球と環境にやさしくなれるのではないのでしょうか。

図式化すると、「知覚（※いわゆる体感ですね）」対「知識（※いわゆる「事実とか真実」という名の『物語＝フィクション＝説』ですね）」という2項対立です。これって、よく考えると大問題ではないでしょうか。

*

ここで考え込むと、先に進めなくなりそうです。

「ま、いっか」主義でいきましょう。この駄文は、学術論文でもないし、駄文を書いている者は素人ですから。緻密で周到にいこうなんて、高望みをしたり見栄を張る必要は全然ありません。身の程をわきまえます。駄文、駄文、与太、与太、ガセ、ガセと、自己催眠を試み、言い聞かせます。

おかげさまで、すっきりしました。与太でいいんだ。ガセでいいんだ。そう居直ることができそうな気分になりました。一時は、マジに考えすぎ（※その割にはずいぶんズレていますけど）、常態を逸脱しかけつつある自分にはっとし、「はらはら＝ああ、やばい＝ああ、あやうい＝ああ、線を越えてしまいそう」（※これって結構、気持ち良いのです）もしましたけど、もう大丈夫みたいです。たぶん、ですけど。

大丈夫と思う時が大丈夫ではないことを、これまでに頻繁に経験してきましたので、「たぶん」という言葉が出てしまいました。お恥ずかしい限りです。

*

では、うじうじをやめて、すぱっといきます。

さて、以上、見てきましたように、

* 「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。つまり、代用する。

*代理の仕組み

は、

* 「花・はな」という「実体＝ほんまもん＝現物＝物そのもの＝物自体＝現実にある物」の代わりに「花・はな」という文字と音（おん）、つまり言葉を「用いる＝代用する」。

というレベルの「話＝フィクション＝説＝約束事＝ルール＝与太話」ではないのです。異なったレベルの「話＝フィクション＝説＝約束事＝ルール＝与太話」なのです。例の「死に平」と「死に平安」とか、「忌みされる MONO」と「忌みする MONO」とかの物語とは違うんです。

簡単に説明します。

* 「ほんまもんの花」とは、実は「代理の花」である。

* 「ほんまもんの花」をヒトは、見ることはできない。その匂いを嗅ぐことはできない。それを口にして舌で味わうことはできない。それが発している微音を聞き取ることはできない。それを指で触ることはできない。その存在を感じることはできない。

このようになります。「そんなことないよ」とか、「絶対に、そんなの嘘」とか、「アホちゃうか」とか、「もう、あんたにはついていけんわ、さいなら」とか、おっしゃる方がいらっしゃるのは重々承知しております。

*

理解していただけるかどうか心もとなくなりましたが、駄目押しに＝駄目もとで、もっと正直な気持ちを書きます。

* ヒトは「現実」を知覚できない。

*

ここで、この駄文で用いている「知覚」とか「五感」とか「第六感」という「言葉＝代理＝ほんまもんじゃないもの＝『何か』の代わりに『何かではないもの』を用いる。つまり、代用する」という「代理の仕組み」における「何かではないもの」について、説明させてください。

ややこしいそうなのですが、単純なことなのです。「ほんまもんの花」を例に取りましょう。

1) ヒトは「ほんまもんの花」の「一部」を、「情報A」として、知覚器官で「受信する」。

2) 1) で受信された情報Aは、「信号化され」、情報Bとなる。

3) 2) で信号化された情報A、つまり情報Bは、シナプスを通して脳に送り込まれ、脳で「処理され」、情報Cとなる。

4) 3) で処理された情報B、つまり情報Cは、脳内で「認識され」情報Dとなる。

1) から4) を要約すると、ヒトは「ほんまもんの花」を1) から4) のどの段階においても「情報」としてしかとらえることができない、となります。ポイントは、『『情報』としてしか』です。

1) で「ほんまもんの花」と書いたものが、単なる「ほんまもんの花」ではなく、『『ほんまもんの花』の『一部』』となっていることに注目してください。ポイントは、もちろん、「一部」です。

*

*ヒトは「現実」を知覚できない。

とは、

I) 「現実」は、ヒトの知覚を超えた存在であろう。

II) ヒトは「現実」の「一部」を「代理」として「知覚＝認識」しているのである。＝ヒトは「現実」の「一部」だけを、「代理」として「知覚＝認識」することしかできないのであろう。

という「推測＝妄想＝想像＝創造＝捏造＝お話＝与太話」として記述できそうです。

*

I) 「現実」は、ヒトの知覚を超えた存在であろう。

とは、ヒトは広義の言葉という代理でしか現実をとらえられないという意味です。なお、広義の言葉とは、話し言葉、書き言葉、手話、ホームサイン、身振り言語、記号、さまざまな素材と図法で描かれた絵、さまざまな機械を用いてデータ処理された画像、さまざまな機械を用いてデータ処理された数値や数式などを指します。言い換えると、ヒトが「周りのもの・こと・現象＝世界＝森羅万象＝宇宙」を「知覚＝認識」するさいに「媒体＝媒介＝なかだちするもの＝代理＝とって代わるもの」全般を指します。

II) ヒトは「現実」の「一部」を「代理」として「知覚＝認識」しているのであろう。

とは、ヒトは、たとえば「シクラメン」という植物を、

1) いくら「シクラメン」と「名付けた」ところで、「知った＝分かった＝知覚した＝認識した」ことにはならない、

2) 知覚器官と知覚機能、つまり五感を用いて「知った＝分かった＝知覚した＝認識した」と思い込んだとしても、実際には、その「全貌＝マクロからミクロのレベルにおいて知覚の対象となる総体」を一生を費やしても時間的にも空間的にも知覚できない、

3) ヒトの知覚器官と知覚機能、つまり五感とは絶対的なものではなく、たとえばこの惑星に生息する他の生物のそれと比較すれば、当然のことながら相対的なものでしかない。

4) ヒトが自らの知覚器官と知覚機能を道具や機械や計器と呼ばれるもので補って知覚したとしても、それによって得られたデータを、自前の知覚器官と知覚機能を用いて知覚するほかない、と言えそうです。

*

「ほんまもん＝実体＝現物＝物そのもの＝物自体＝現実にある物」とか、「現実＝事実＝真実＝本当＝正しい」とか、「知覚する＝認識する＝悟る＝理解する＝とらえる」という言葉が、いかにその「意味するもの・こと・現象・状態」とかけ離れた「的外れ＝世迷言＝迷妄＝錯覚＝幻想＝幻覚＝がちゃん＝ありゃ＝まさか＝うそー」であるかが、お分かりいただけるのではないかと思います。

とはいえ、ヒトは普通は不遜で傲慢で見栄っ張りですから、自らの「知覚能力＝認識能力」に備わっている「そこそこの」精度と有効性と信頼性の枠内にありながら、「そこそこの」を「かなりの」とか「そうとうな」とか「きわめて優れた」くらいのもんとして「知覚＝認識」しているようです。

例を挙げましょう。

月に仲間を送り込んだ。ノストラダムスの大予言に、内心はビビリながらも大チョンボとして一笑することができた。いわゆる 2000 年問題を、一応ほんまもんの問題として対処し乗り切った。この惑星の全生物を、何十回か殲滅（せんめつ）できるだけの核兵器を保有している。もうすぐコンピューターでユビキタスだす。痘瘡（とうそう）ウィルスを撲滅し、天然痘を成敗した。地球の温度を徐々に高めるといふ、半端じゃできないこ

とを実行中である。インターネットで、いろんな楽しいことをできるようにした。アインシュタインという天才らしきヒトを生んだみたい。これからは、バイオテクノロジー、量子、ナノテクの時代なのだ。

この駄文を書いている者もヒトの端くれですので、「たいしたものだ」と恐れ入っている（※「恐れ入る」を大きめの辞書で引いて、その多義性をかみしめていただければ幸いです）次第です。恐れ入谷の鬼子母神。

*

「うまくいっている＝うまくいっていない＝進歩している＝退行している＝絶好調＝かなりやばい＝偉業＝異形＝グー＝愚一」という具合に、ヒトのなすことは、言葉という代理を使うと何とでも言えます。また、それをどんなふうにも受け取ることができます。

*代理は、匿名的＝中性的＝非人称的＝ニュートラル＝のっぺらぼう＝タブラ・ラサである。

単純に言うなら、

*代理に責任はない。だいきり・いず・いのせんと。ノット・ギルティーである。

代理は、この惑星に生息する他の生物に比較して、極度に肥大化したヒトの脳の産物のはずです。どうやら、代理ちゃんは生んでくれた親に反抗する年齢に達したようです。反抗期＝犯行期。ヒトには、代理ちゃんの「親である＝親としての」資格があるのでしょうか？手に負えない事態になっていることにすら、気付いていないように思えてなりません。

*

ここで、冒頭の文章を以下に引用し、今回の駄文をおしまいにいたします。多数の文字を費やしたうえで、この駄文で訴えたかったことが、いくらかでも伝わりやすくなっていけば、幸いです。ここまで、読んでいただいた方に、心よりお礼申し上げます。

*

*「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。つまり、代用する。

*代理の仕組み

と言う場合には、「何か」が何であるかは保留されます。「未定＝不明＝分からない」と

考えます。「分かり得ない=分からない仕組みになっている」とも言えます。

「代理の独立」、「代理の自立」、「代理のひとり歩き」というフレーズも頭に浮かびますが、あまり使いたくありません。どうしてなのでしょう。たぶん、代理に主体性があるようなイメージが伴うからだと思われます。

それでは、あまりにもヒトがだらしなさすぎます。なにしろ、比喩的に言えば、ヒトの脳が代理を生んだのですから。「ちゃんと子育てしてよ」とか、「育児放棄、つまりネグレクトが立派な虐待だっていうこと、分かってんの」とか、「自分が出したうんちの後始末くらい、責任もってつけてよ」という感じです。

*

ちょっと言い換えてみましょう。

* 「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。つまり、代用する。

において、

A) ヒトは「何か」を「定める=明らかにする=分かる」ことはできない。

B) ヒトは「何か」を「定める=明らかにする=分かる」ことはできない仕組みになっている。

A) と B) というフレーズにおいては、ヒトの限界性が指摘されています。

C) 代理はヒトから独立している。

D) 代理はヒトから自立している。

E) 代理はヒトをさしおいてひとり歩きする。

C) と D) と E) においては、代理が前面に出て来て、ヒトが刺身のつま状態になっているイメージがあります。

*

「代理の独立」、「代理の自立」、「代理のひとり歩き」というフレーズに抵抗を覚えるのは、あくまでも「ヒトがいて初めて代理がある」という状況が感じられないからだ、今思いました。そうなのです。「ヒトがいるから代理がある」のであって、その逆ではないの

です。

とはいうものの、事態はもはや「代理があってヒトがいる」と言えるような気もします。ひょっとすると、ヒトが代理に「依存しきっている＝頼りきっている＝いわば中毒になっている＝なしではいらなくなっている＝主導権を握られている＝使われている＝もてあそばれている」状態にあるのではないか。そう思えてきました。

09.11.19 代理だけの世界（4）

◆代理だけの世界（4）

2009-11-19 16:51:00 | さくぶん

* 「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。つまり、代用する。

つまり、

*代理の仕組み

と呼んでいるもの・こと・状況・現象について考えているわけですが、前回は、

*ヒトは「現実」を知覚できない。

という指摘をしました。このフレーズにある「現実」とは、

A) 「自分の周り＝世界＝森羅万象＝宇宙」

とも、

B) 「実体＝ほんまもん＝現物＝物そのもの＝物自体＝現実にある物」

とも言えるように思います。A) がマクロ的、B) がミクロ的見方に立った言い方だと、もっともらしく考えることもできるでしょう。

で、前回のおさらいをしますと、

*ヒトは「現実」を知覚できない。

というネガティブな言い方は、

*ヒトは「現実」を知覚器官と脳において信号化したうえで、「代理＝信号＝情報」として認識する。

とポジティブに言い換えることができそうです。このフレーズなら、いくらか人間様の面子も保たれるし、元気が出そうな気もします。でも、これは単なるレトリックの問題です。

*ヒトは「現実」を知覚器官と脳において信号化したうえで、「代理＝信号＝情報」として認識するしかない。

と語尾をいじっただけで、またもやネガティブな響きを持ったフレーズになってしまいます。

何かを記述するさいには、「レトリック＝言い方＝プレゼンテーションの仕方＝ものは言いよう」次第で、そのフレーズなり語のイメージはがらりと変わります。また、同じフレーズでも、それを受け取る側のヒトによって、そのイメージは千差万別でしょう。

何を申し上げたいのかと言いますと、代理の一つである言葉というものは、「曲者である＝癖がある＝寝癖と同じく真っすぐにはならない＝素直ではない」だということです。もちろん、これはヒトとヒトの間で生じる問題であり、代理である言葉の属性ではありません。

*

ヒトとヒトとがコミュニケーションをする場合には、言葉の使用が圧倒的に多いと思われれます。言葉という代理自体は、「匿名的＝中性的＝非人称的＝ニュートラル＝のっぺらぼう＝タブラ・ラサ」なのですが、それを発する側および受け取る側のヒトたちは、その時の状況や気分、各人の性格や信条や考え方次第で、多種多様なイメージをいただき、多種多様な解釈をするようです。

比喩的に言うなら、言葉や代理一般は無色なのに対し、

*ヒトは十人十色であり、しかも一刻ごとに揺らぎ変化し不安定である。

という感じでしょうか。ややこしいですね。困ったものですね。言葉をめぐって、ヒトが混乱に陥ったり、ヒト同士が争ったりするのも無理はないと思います。

*

話を変えます。

前回の続きとして、今回は、

*「代理」は「信号」および「情報」である。

という見地から「お話＝与太話＝でまかせ」をしたいと思います。どうして、このフレーズが出てきたのかは、でまかせとしかお答えできません。

この駄文は、筋道を立てるとか、論理的とか、緻密などという美辞麗句とは無縁です。さりどて、勘とか直観とか直感とかいう言葉を使うのももったいないです。「でまかせ＝出るに任せる＝でたらめ＝さいころを振って出た目そのまま」くらいが妥当かと思いません。

さて、さきほどのレトリックの話を蒸し返すことにはなりますが、上記のフレーズは、

*「代理」は「信号」および「情報」でしかない。

とも言い換えることが可能です。ポジティブに取るかネガティブに取るかは、読むヒト次第です。また、同じヒトでもその時の気分次第でしょう。

ややこしくなりそうなので、とりあえず、

*「代理」は「信号」および「情報」である。

というフレーズで話を進めてみます。

単純化すると、

*代理＝信号＝情報（※「＝」と数学の等号とは関係がありません）

となりそうです。

で、「信号」という言葉を見ていて、以前、「ノイズ」ということについて考えていた

時期があったのを思い出しました。どう考えていたのかは、当ブログのブックマークにある「うつせみのうつお」という「お墓＝倉庫＝がらくたを収めたサイト＝駄文庫」を覗けば分かると思いますが、面倒なので、「ここで即席に」＝「でまかせに」考えてみます。【注：「うつせみのうつお」とは、過去の全ブログ記事を取めたウェブサイトでした。削除し、現在はありません。】

駄文は学術論文でも評論でもありませんので、定義や一貫性という窮屈な衣をまとう必要はありません。

ちなみに、「でまかせ」とは、この駄文ではポジティブ、いやニュートラルな意味で使われています。誰もがやっていることを、美辞麗句に言い換えることなく、すっぴんで言っているだけです。

話を戻します。

どうやら、信号や情報には、ノイズが付き物のようです。ノイズって何でしょう？ 個人的には、邪魔、乱舞、誤作動、不具合、ズレ、飛躍、攪乱、跋扈（ばっこ）、中断、停止、「ありや！？」、「こんなはずじゃなかった」、「ん？」といった一連の言葉やフレーズを連想します。

* 「実体＝ほんまもん＝現物＝物そのもの＝物自体＝現実にある物」⇒ 知覚・認識

とか、

* 知覚器官での受信⇒ 信号化⇒ シナプスを通じたの伝達⇒ 脳での処理

といった嘘くさい図式を用いるならば、その図式が示している過程のどこにおいても、ノイズは発生するだろうという気がします。

たとえば、ヒトの行動が原因であるか外的な要因によるものかを問わず、ヒトをめぐる環境は、事故、災難、事件、紛争、天変地異に満ちています。その結果、障害や欠損や不幸に見舞われるという事態が頻繁に起こるのは、みなさんご承知の通りです。

というわけで、

* 「代理」は、「ノイズ」を伴う「信号＝情報」である。

と記述するほうが、「事態＝状況」を「正確に論じている」＝「もっともらしく、でまかせを言っている」と言えるのではないかと思います。

*

上で「ノイズ」をめぐって「ああでもないこうでもない」＝「ああでもあるこうでもある」ごっこをしているうちに、以前「ノイズ」について考えていたのと同じころに、「経路」という言葉を使って、でまかせを書いていたなあ、と思い出しました。

「経路」も「うつせみのうつお」の中に収めてあるはずなのですが、「倉庫＝墓場」まで取りに行くのが面倒なので、ここで再度でまかせに考えてみます。確か、次のような与太話でした。

*ヒトは出来レースをやっている。

言い換えると、

*ヒトの脳の中には、「経路＝筋道＝回路＝線路＝シナリオ＝『こうなればああなる』＝『この場合にはこうする』＝ルール＝約束事＝プロセスの手順＝八百長の筋書き＝文法」が先天的に存在しているらしい。そうとしか考えられない行動を、ヒトはする。

たとえば、ヒトの赤ん坊であれば、五年から十年ほどで、いわゆる人種や民族といった差異に関係なく、ある特定の言語を習得させることができます。また、ある特定の生活様式を身に付けさせることができます。どうやら、そういうふうに「できている」＝「プログラム可能な仕組みが備わっている」＝「出来レースの素地がある」みたいなのです。

というわけで、

*「代理」は、「経路」に沿った、「ノイズ」を伴う「信号＝情報」である。

と記述するほうが、「正確に論じる」＝「もっともらしくでまかせを言う」ことができるのではないかと思います。

だから、たいていのヒトは、大人が手助けをしなくても、乳房およびその代用物からお乳を飲むのでしょう。また、少し大きくなれば、ちょっと練習をするだけで自転車に乗れるようになるのでしょう。

ちなみに、乳房もお乳も自転車もすべて「代理」です。知覚されたものであって、「実体＝ほんまもん＝現物＝物そのもの＝物自体＝現実にある物」ではないという意味です。

*

* 「代理」は、「経路」に沿った、「ノイズ」を伴う「信号=情報」である。

という長めのフレーズができたところで、このフレーズを前提に、

* 「代理」とは「情報」である。

と切りつめてみましょう。

こういう「切りつめる」という横着な方法を「一般化」とか「抽象化」とか言います。
とはいえ、そもそも、

* 「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。つまり、代用する。

つまり、

*代理の仕組み

というフレーズそのものが、

* 「一般化=抽象化」を「一般化=抽象化」したもの

と言えるわけで、何を今さらという感じのお話なのです。言葉は何とでも言えますから、

* 「代理の仕組み」とは「一般化=抽象化」である。

とか、

*代理とは「一般化=抽象化」された「一般化=抽象化」である。

とか、

*個々の代理は、「一般化=抽象化」された断片である。

という具合に、

もっともらしいフレーズを増産することが可能です。

*

今回、一番考えてみたかったのは、

* 「一般化＝抽象化」されたものである「代理」。その「代理」の特性を「一般化＝抽象化」するとどうなるか。

ということなのです。

そのさいに手続き上しなければならないのは、「一般化＝抽象化」という仕組みを言葉で記述することです。

またもや、既視感を覚えました。以前、「普遍性」ということについて考えていた時期がありました。「うつせみのうつお」にお参りにいかずに、ここで「ブリコラージュ＝手仕事＝やつつけ仕事＝『手持の物で手っ取り早く仕事を済ましちゃいましょう』」を試してみましょう。

最近百歳で天寿を全うされたブリコラージュという言葉の命名者にちなんでというわけではありません。単なる横着なのですけどー。そもそもブリコラージュとは、横着の「変種＝一種」なのではなかったかとも思っております。

で、「一般化＝抽象化」という仕組みについては、

* 複数あるいは多数の「代理」のある一部分に注目して、それと共通する部分を有する「代理」に同一の名前を付ける。

* 「一般化＝抽象化」という仕組み。

とりあえず、以上のようなフレーズにしておきます。

この二つのフレーズにおいて忘れてはならないのは、「代理」が既に「一般化＝抽象化」されたものであるということです。それに再度同じ処理を行っている点は、きわめて興味深いと思います。

* 「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。つまり、代用する。

つまり、

* 代理の仕組み

が、既に代用されているものである「代理」および「代理の仕組み」を、再度「代理」お

よび「代理の仕組み」という「代理」を用いて『代用している』＝『代理の仕組み』を用いている」と同じ「処理＝作業＝操作」をしています。

*

ややこしいですね。

不正確になるのを覚悟して、簡単に言うと、たとえば

1) ●年■月▲日★時▼分＝秒に、あるヒトによって「発信された＝記述された＝言われた＝書かれた＝知覚・認識された」「代理A」は、●年■月▲日★時▼分＝+1秒に、あるヒトによって「記述された＝言われた＝書かれた＝知覚・認識された」「代理A+1」とは、異なる。

また、

2) ●年■月▲日★時▼分＝秒に、あるヒトによって「受信された＝記述された＝言われた＝書かれた＝知覚・認識された」「代理A」は、●年■月▲日★時▼分＝+1秒に、あるヒトによって「記述された＝言われた＝書かれた＝知覚・認識された」「代理A+1」とは、異なる。

ということです。【※上記の二フレーズの違いは「発信された」か、「受信された」かです。】

1) だけでも、話を済ますことができますが、つい2)まで書いてしまいました。

*

1) だけを問題にした場合には、

*ヒトは刻々と「揺らいでいる＝変化している＝ぶれている＝不安定な状況にある」。

と、時間に重点を置いた形で、ヒトの「多面性＝多重性＝多層性」を強調することができます。これは、ヒトがある時点である地点にしか存在できないと想定するなら、空間に重点を置いていることにもなります。

ここで確認しておきたいのは、「代理」や「代理の仕組み」は「匿名的＝中性的＝ニュートラル」なものであり、「代理」を用いるヒトを問題にしているという点です。ヒトなしに「代理」も「代理の仕組み」も成り立ちません。繰り返しますが、問題になっているのはヒトです。

*

ややこしいですが、あえて、1)と2)の違いを問題にした場合について説明します。

*ヒトは「代理」を「発信する」

と、

*ヒトは「代理」を「受信する」

においては、「主語＝主体」であるヒトが問題ではなく、「代理」を「発信する」か「受信する」という「方向性」に注目しています。言い換えると、

*「発信する＝出る・出す」:「代理」が、「実体＝ほんまもん＝現物＝物そのもの＝物自体＝現実にある物」＝「自分の周り＝世界＝森羅万象＝宇宙」に働きかけ、何らかの「影響＝運動＝変化＝変質」を生じさせる。

であり、

*「受信する＝出ていない・出していない」:「代理」は、「実体＝ほんまもん＝現物＝物そのもの＝物自体＝現実にある物」＝「自分の周り＝世界＝森羅万象＝宇宙」に働きかけてはおらず、何らかの「影響＝運動＝変化＝変質」を生じさせていない。

となります。ヒトが「代理」を「発信する」か「受信する」かにおいては、その結果のみが問題になっています。ヒトの「意思＝意志」には左右されません。代理の「働きかけ」＝『影響＝運動＝変化＝変質』の『生起＝発生』に注目します。

*主導権が、ヒトから代理に「移っている＝映っている＝写っている＝伝染っている」。

という「事態＝状況」が問題視されています。これは、二十一世紀では、きわめて恐ろしい「事態＝状況」となっています。それを「指摘したくて＝訴えたくて」、この駄文を書きました。

「代理」は刻々と「影響＝運動＝変化＝変質」しつつあるように思われます。時の推移は、「代理」の推移でもあります。

当ブログで、少し前に「言葉とうんちと人間」という駄文を書きましたが、どうやら、

うんちは出てしまったみたいです。出そうとして息んで出したのか、つい漏れてしまったのかは問題ではありません。出てしまったことを直視しましょう。

いったん出てしまったものは、さ迷い続けます。静止することなく、何らかの運動を起します。その運動がどんなものであるか。これを看過することも、失念することも、すっとぼけることもできない「事態＝状況」なのではないでしょうか。

*

今回の駄文の迷走ぶりを見てやってください。「代理」＝「言葉」がまさに「でまかせ」を演じてくれました。ちなみに、これは再演です。代理にとって初演はありえません。再現＝再現前でもあります。代理においては、現前はありえません。

あくまでも、「代わり・かわり」であり、「再び・ふたたび」なのです。「代わり・かわり」と「再び・ふたたび」が二者間での演技ではなく、複数あるいは多数の「あいだ・あわい」での「出来事＝でる・くる・こと」であることは、言うまでもありません。わざわざ *représentation* などという言葉の借りなくとも、「かわり・かわる」「ふたたび・ふた・ふたつ」「あいだ・あわい・あいま・あい・あう」という「代理」で、ことの次第を演じてもらうことができるみたいです。

このように、「代理」とは出るに任せるしかないのです。出してみないことには、どうなるのかは分からないようです。主導権は、残念ながら、ヒトにはないみたいです。

ということで、今回の駄文の駄文ぶりの言い訳とさせていただきたいと存じます。

わきつれて だいににしては あどをうち

09.11.27 1年前の記事を読んで

* ブログタイトル：「うつせみのあなたに」 2009-11-27～2009-11-29

【※ 初めて書いたブログ記事「今日は誕生日」（2008-12-19 19:52:24 | Weblog）から順を追って再録しながら、それに現在の心境と視点からコメントを加える。そんなコンセプト

トと計画で始めたブログでしたが、まさに三日坊主で挫折してしまいました。たった三日間でしたが、ほぼ1年前を振り返ってコメントを書いているうちに、悲しさと空しさが募ってきました。こんなにしんどいものとは思いませんでした。なしくずしの死という事態を直視し、言葉にすることはつらくてできません。自業自得。いい勉強になりました。】

◆1年前の記事を読んで

2009-11-27 15:29:30 | さくぶん

<今日は誕生日>は、2008年12月19日に書かれたものです。

【注：<今日は誕生日>は、この記事の後に再録してあります。】

*

ほぼ一年前の初めてのブログ記事を読み直してみると、抑うつ状態が改善されていないことに気づきます。無職の身である点も、変わっていません。

でも、ブログを書くようになって、張りのある生活が送れるようになったのは確かです。それまでは、食事や入浴といった基本的な日課以外に、自分から何かやろうという気になるものがありませんでした。

*

初めてのブログのタイトルは「ネガティブに生きる」を選びました。個人的には、「頑張らない」とだいたい同じ意味です。

うつとどうやって共存していったらいいのか。

当時は、全然分かりませんでした。処方されている薬に頼るだけでなく、具体的な行動として一歩踏み出したい。そんな気持ちから、ブログを始めました。張り切って肩に力が入ると、うつによくない。そんな警戒心があったため、軽い乗りで始めました。

*

>ネガティブとポジティブは反意語のようでありながら、実際にはかなり重なりあっている部分がある。

>言葉というものは、いい加減なものだから、こんなことは珍しくない。「嫌い」と「好き」、「温かい」と「冷たい」、さらには「善」と「悪」、「正しい」と「間違っている」に

至るまで、その線引きが難しいのは日常的に誰もが経験していることではないか。

以上の〈今日は誕生日〉からの引用部分に、その先に展開されていくテーマの芽が見られます。こういうことについて、考えたり、こだわることは日常的に昔からやっていたことです。ただ、考えていることを文章にし、不特定多数の人たちに向けてネット上で公開するというのは、初めての経験であり、思いもつかなかったことでした。

普段ぼけーっとしながら考えていることと、書くことが結びついた。そんなふうにも言えそうです。

*

ある人がブログをやっていて、今年の夏あたりから、それをずっと読んでいました。で、年の暮れになり、急に自分でもやってみようと思いついたのです。

仕事をしていたころには、頻繁にパソコンを使い、インターネットやメールもずいぶん利用していたのですが、ブログは他人事だと考えていました。

あの日、せっかくブログを開設したのだからと、「人気ブログランキング」と「にほんブログ村」にも、登録してみました。

登録の手続きのさいに、ブログが大きな媒体になっていることを知りました。ランキングサイトに記載されているカテゴリーやサブカテゴリーを見て、びっくりしました。たくさんの人たちがさまざまなテーマを柱にして文章を定期的に公表しているさまに、圧倒されました。

あの日から自分がブログにのめり込むようになるとは、夢にも思っていませんでした。記念すべき日でした。

以下に、その日の記事を引用します。

◆

◆今日は誕生日

2008-12-19 19:52:24 | Weblog

万歳！朝起きたら、肩凝りと頭痛が治っていた。

昨日は最悪だった。家の中の問題が原因でストレスが生じたせいか、昼過ぎあたりから猛烈な肩の凝りを感じ始めた。そのうち頭痛がしてきたため横になってじっとしていたが、ひどくなる一方で処置なし。悪寒がして風邪っぽくなるし、例の「死にたい」「消えてしまいたい」という気持ちが鈍く全身を貫く。そんなときは、寝ているのがいちばん。

そのうち、夜になる。何とか軽めの食事をとり、やっとの思いで風呂に入り、医者が処方してくれている薬をいつもより1錠多めに飲んで寝入った。

それが効いたのか、よく眠れた。目覚ましの音を聞いて、恐る恐る体にご機嫌伺いをすると、肩凝りと頭痛が嘘のように去っていた。

まあ、そんなわけできょうは久しぶりにいい朝を迎える。朝食を終えてからはさっそくパソコンに向かい、検索エンジンで各社のブログの比較サイトをはしごする。

goo が初心者向け、とのコメントがいくつかある。で、ここを選んだというわけ。

前からブログを始めたいと思っていたが、ようやく開けた。そう言えば、きのう、横になってうんうん唸りながらも、ブログを始めたいなあ、という考えが何度か頭の中をよぎった。

この苦しみを、誰かに伝えたい。というか、何でもいいから、とにかく発信したい！って感じかな。

さて、タイトルにあるとおり、このブログのテーマは「うつとの闘い」、いや、「うつとの付き合い」というべきか。サブテーマは「ネガティブに生きる」。

うつなために、ポジティブに生きられない。頑張れない。だから、ネガティブに生きることでうつと闘う、または共存する。そんな日々を送っている自分が考えていることを、このブログに書いてみたい。

ネガティブに生きると言っても、ネガティブとポジティブは反意語のようでありながら、実際にはかなり重なりあっている部分がある。「頑張らない」が実は「頑張る」という表現の言い換えである場合が、いい例だ。

言葉というものは、いい加減なものだから、こんなことは珍しくない。「嫌い」と「好き」、「温かい」と「冷たい」、さらには「善」と「悪」、「正しい」と「間違っている」に至るまで、その線引きが難しいのは日常的に誰もが経験していることではないか。

ああ、疲れた。きょうはこの辺にしておこう。ネコを呼んで、えさをあげなくては。

09.11.28 今、考えていること

◆今、考えていること

2009-11-28 10:46:10 | さくぶん

<地図は現地ではない>は、2008年12月20日に書かれたものです。

【注：<地図は現地ではない>は、この記事の後に載せてあります。】

再読していて思い出したことがあります。間借りさせていただいている goo ブログには「絵文字」が豊富に用意してあるので、ブログを始めたころには、やたらたくさん使っていました。

どうしても使わなければならない。そんな強迫観念にとらわれ、いろいろなところに絵文字を貼りつけていました。再録してある文章は、テキスト形式でバックアップをとったものなので、絵文字は残っていません。

絵文字集には猫のさまざまな表情が並んでいる列があり、それが気に入ってその時の気分で表情を選んでペタペタ貼って喜んでいました。そのうちに、1本の記事が長くなっていき、文字数制限に引っ掛かるようになるにつれて、絵文字も減っていきました。

詳しいことは分からないのですが、絵文字もデジタル化されたデータですね。パソコン上のディスプレイに映し出される文字と比べると、案外容量を食うみたいだと気がついたので。

本当のところは知りませんが、そうらしいと思うようになり、絵文字の使用を自粛するようになりました。代わりに、■や◆や*を使い始めました。

*

話を変えます。

*「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。

ということについて、このところずっと考えています。

ヒトおよびこの惑星に生息する多種多様な生物にとって、基本的な仕組みではないか
と思っています。

*知覚（知覚機能）

という言葉に置き換えることも可能でしょう。さらに、

*認識

あるいは、特にヒトの場合には、

*意識

と言い換えてもいいような気がします。

ここでこだわっているのは、特にヒトの知覚（知覚機能）と認識です。素人なので詳
しいことは知りませんが、他の生物に比べ、ヒトの場合には脳が極度に肥大し、またそ
の働きが複雑化しているようです。

意識とは、主にヒトに関して用いられる言葉のような気がします。

*

ところで、たった今書いた上の*と*に囲まれた文章を、もう一度ちらりと見てくだ
さい。その前の*と*に囲まれた文章と、書き方というかレイアウトが違ってきます。

さきほど、次第に記事が長くなっていったと書きました。当ブログのブックマークに
ある「うつせみのうつお」というサイトをお訪ねいただき、最後のほうの記事をご覧
になるとお分かりいただけると思います。

*

初めてのブログを開設して間もない数日間、書き慣れていないために記事は短かっ
たのですが、だんだん長くなっていきました。内容もややこしくなっていきました。

そのうち、文章が長いと読みにくいのではないかと配慮をするようになり、改行ごとに絵文字を添えたり、段落間に絵文字を挿入したりして、あれこれ工夫してみました。

紆余曲折をへて、上の*と*に囲まれた文章のような体裁に行き着きました。行き着いたと言っても、「とりあえず」ですけど。

ただし、センテンスを分断した、すかすかのレイアウトを採用するのは、ややこしいテーマで書く時です。今書いているような内容だと、こんな感じの改行の多い文章になり、〈地図は現地ではない〉と大差ありません。

このように、文体やレイアウトや書き方という面でも、ブログを書くことで、いろいろな「実験」をすることができました。

*

話を戻します。

*ルプレザンタシオン、表象（表象作用）、象徴、代理、再現前（再現前化）、再演

といった一連の言葉があります。そうした言葉を扱う、

*表象文化論

という分野があるそうですが、具体的に何をやっているのかは知りません。

表象文化論という言葉を見聞きすると、さきほど書いた、

*「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。

と近いことにこだわっているという気がします。実際にはどうなのでしょう。尋ねる相手がいないので、分かりません。

自分が学生時代に授業で読まされたり、あるいは自主的に読んでいた本や雑誌に書いてあったことの延長上に、今日の表象文化論と呼ばれるものがあるような気がします。

どうなのでしょう。

たとえばネット検索をするという方法もありそうですが、面倒なのでやっていません。もともと勉強は苦手なのです。勉強とは、調べる、検証する、丹念に読む、といっ

た作業のことです。

*

ものを読むのが億劫でなりません。注意力が散漫で、読むことに集中できません。

抑うつ状態が恒常化しているため、お薬を処方してもらっています。お薬を飲むと抑うつ状態はいくぶんか軽減されますが、頭がぼーっとして考えることのさまたげになります。

他人がどう考えているかとか、どう考えていたかとか、何を書いたとかについては、もうどうでもいいという心境になっています。そうした傾向は、幼いころからあった気がします。

通知表に、「他人の話を受けない」、「自分ひとりだけで、なんでもしようとする」、「協調性に欠ける」といった意味の項目があった覚えがあります。たいてい、そこにチェックが入っていたような記憶があります。担任の教師が自筆で書いたコメントにも、似たような記述があった気がします。

*

考えることが好きです。

もの考えることくらいしか楽しみがないので、お薬で空しさを誤魔化すことはなるべく避けたい。そんなわけで、このところ、お薬は夕食後と就寝前だけに飲んでいきます。

ブログの記事を書く場合にも、薬の影響を受けていない（＝血中に残留している薬物成分の濃度が低い）と思われる時を選んでいきます。

とはいえ、たぶんに自覚的な判断しかできませんので、らりって書いている可能性も高いです。もともとぼーっとしている性質なので、薬のせいではぼーっとしているのか、そうではなくぼーっとしているのかの見極めが難しい時があります。もちろん、「これは（薬が）かなり効いてるぞ」と実感する時もあります。

文章に表れるお薬の影響については、ここで、あらかじめお断りしておきます。ご理解いただければ幸いです。

*

もう一つの大切な楽しみを忘れていました。眠ることです。

眠ることが好きです。夢を見るのも楽しいです。

八時間は眠るように心がけています。ただ、お薬がないと眠れません。眠れないつらさと苦しみをかかえている方々が多いと聞きます。薬物という異物の力を借りているとはいえ、一日のうちの三分の一を睡眠に費やすことができるだけでも幸せだと考えるべきなのでしょう。

ゆめうつつ 異物でねむり うつせみへ



◆地図は現地ではない

2008-12-20 18:59:36 | Weblog

きのうも書いたことなんだけど、言葉というやつ、言語といってもいいけど、これまで自分は言葉に振りまわされて生きてきたような気がする。

大学でも、文学と哲学との間みたいところでウロウロしていた。そのころ、身近にいた誰かが「地図は現地ではない」(＝「言葉は物ではない」)とか何とか力説していて、「あっそうだ。そのとおりだ。こりゃ、ひょっとして大問題じゃないか」と密かに納得してしまった。

それ以来かな。自分が言葉に妙にこだわる人間だと思ふようになったのは。

別に、言葉遣いや「美しい日本語」とやらに、うるさいっていうのとは違う。どちらかという、方言や、いわゆる「若者コトバ」や、または不正確と言われている言葉遣いが存在することを積極的に肯定するほうだ。

言葉にこだわるというのは、太古にヒトが言語を使うようになってしまったことが、とてつもないポジティブとネガティブの「ごったまぜ」状況を生み出してしまったのではないか——という思いというか、感慨というか、憤りというか、とにかくガツーンときてしまったわけで、それが今も自分の中で尾を引いている。

卒論に「世界には男根はない」(※前後関係を詳しく書かないと誤解される表現なのだけ)という意味のことを書いて、それっきり言葉と真剣に向きあうのは止めようと決

意した（※あの頃は今に比べれば元気もあったし「純粹」だった）。

で、一時は活字のデザイナーになろうとか、書道の師範にでもなって小学生相手に書道塾でもやろう、などと考えていた。今振り返ってみると、当時は必死になって「言葉の意味と文字とを切り離そう」としていたのではないかという気がする。文字から意味を消し去るとも言えることなんだけれども、具体的には「書道」のイメージだ。緊張しながら筆で文字を書いている時には、その文字の意味が頭から消えてしまう。文字の形だけに神経が集中する。そんな感じ。

「言語を去勢しよう」と必死になっていた。そう言っても、いいかもしれない。

*

きょうの記事をここまで読み直してみると、かなり支離滅裂な文章を書いたものだと思う。

ミシェル・フーコーとか、赤塚不二夫とか、ロラン・バルトとか、ジル・ドゥルーズとか、ジャック・デリダとか、サルトルとか、ヴィトゲンシュタインとか、ゲーデルとか、道元とか、の書物から引用しないと、ちょっと言葉が足りなさすぎると思うけど、今はもう、そんな本は手元にない。

でも、理解してほしい。こうやってブログに書いているわけだから、他人に自分の思いを伝えたいと願っているのは確かだ。

どうしてうつと言語とが自分の中でつながっているのかを、このブログにつづってみたい。少しずつ整理しながら、気長に構えて、徐々に書いていこうと思う。

ネコが邪魔をし始めたし、自分も疲れたので、この辺でネコに遊んでもらうことにします。

09.11.29 社会復帰はあきらめました

◆社会復帰はあきらめました

2009-11-29 11:12:09 | さくぶん

<消えてしまいたい指数>は、2008年12月21日に書かれたものです。

【注：<消えてしまいたい指数>は、この記事の後に載せてあります。】

読み返してみて、状況がまったく変わっていないのがく然としました。

>どうせ社会復帰は無理に決まっている。自分の好きなことだけやって生きていこう。親が亡くなり（※いい歳をして親の年金で食べている身です）、預金を取り崩したら（※すでに急速に減り始めています）、野垂れ死にするだけ――。

<消えてしまいたい指数>に、以上の文章がありますが、親の年金で食べている点は変わりません。預金については自分名義のものは、取り崩してしまいました。すっからかんです。現在は、親の名義の預金に手をつけています。

やばいです。かなりやばいです。

*

ついこの間、社会復帰のために、以前にしていた仕事を再開しようと思い立ちました。仕事を紹介してくれる会社に連絡をとろうとしてメールの下書きまで書いたのですが、送信しなくてよかったです。

メールを出そうとしたとたん、抑うつ状態が急激に悪化しました。

仕事を再開するために、ちょっと前からある程度の準備というかお勉強をしていて、「これなら、仕事を請け負っても大丈夫かな」くらいの気持ちにまでなっていたのですが、駄目でした。

やる気が起きない。だめだ。こわい。せつない。むなしい。かなしい。きえてしまいたい。

そうした思いが、どっと押しよせてきました。仕事の再開に向けて準備をしているうちに、自分にプレッシャーをかけていたのかもしれませんが。圧力鍋が不具合で破裂するように、どかーんと来ました。

ぶっちゃけた話、社会復帰はあきらめました。となると、行く行くは野垂れ死に、行き倒れ、孤独死、孤立死――というところでしょうか。

最近、財布の中身を見るたびに、この金額だと何日間食べていけるだろうか、と頭の

中で計算します。

食は細いです。スイーツ類への執着もありません。「なくなる＝きえる」間際まで、考えるか、眠っていられば最高なのですけど。

さらに贅沢を言わせていただくと、痛いのは嫌ですね。短時間なら何とか我慢しますが。

やばいことを書いて、ごめんなさい。悪気はないのです。本音を書いたまで、なので。気分を害された方には、お詫び申し上げます。

*

話を変えます。

きのうの記事でも書きましたが、相変わらず、

*「何」かの代わりに「何かではないもの」を用いる。

について考え続けているわけですが、そのきっかけがブログだったので。

長い間眠らせていた子を起してしまった。干しておいた藁（わら）に種火を投げ込んでしまった。比喩的に言えば、そんな感じです。眠っていた子が起きちゃいました。藁がくすぶり、やがて燃え始めました。

昨年の暮れに初めてブログを開設し、それ以来、かなりの量の文章を書きました。

結局のところ、その大半が、

*「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。

をテーマとしたものなのです。

>自分のなかでは、「地図は現地ではない」とは「言葉は物（森羅万象くらい広い意味で）ではない」「お金は物ではない」「王冠は王様ではない（＝総理の椅子は総理ではない）」「テレビの画像は被写体そのものではない（＝エッチ画像に映っている〇〇〇は〇〇〇そのものではない）」……というのと同じで、ないないづくしの代名詞みたいなものとして理解しているのだけどー。

以上は、＜消えてしまいたい指数＞からの引用です。これはまさに、

* 「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。

の「変奏＝バリエーション＝言い換え＝変相＝変装」です。

* 金太郎飴

や、

* 笑点の内輪受けギャグ

あるいは、

* パーソナルワンパターンギャグ

みたいなものです。

* 進歩がない。

という言い方をする人もいるでしょう。

ただ、

* 「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。

という、いわば

* 代理の仕組み

と呼ぶべきものを相手にする場合には、進歩や成熟や成長はないと思われます。あるとすれば、「変装＝変奏」や金太郎飴やむいてもむいても芯の出でこないラッキョウのたぐいだけでしよう。

そういうふうになっている＝できている」みたいでしよう。

この点についての詳しいことは、いずれ書きます。

*

当ブログの左側にある「ブックマーク」をご覧ください。「うつせみのうつお」という

タイトルのウェブサイトにも、過去の記事をバックアップしたものを収めてあります。万一、ご興味のある方がいらっしゃいましたら、どうか訪ねてみてください。【注：「うつせみのうつお」というウェブサイトは削除・閉鎖したため、現在はありません。過去の記事を再録しつつあるこのサイトが、「うつせみのうつお」の復元だと言えるかもしれません。】

抑うつ状態をやわらげるために気晴らしをしよう。当初は、そんなつもりでブログ記事を書いていたのですが、だんだんのめり込んでいき、自分を追いつめるところまで何度かいきました。

熱中する。度を過ぎる。燃え尽きる。中断してブログを削除・閉鎖する。少しして、性懲りもなく再開する。その繰り返しでした。

でも、もしもそれで生き延びることができたのなら、役に立ったというべきなのでしょう。感謝すべきなのでしょう。

で、今回、また新しくブログを開設した次第です。

*

ところで、上で述べました「うつせみのうつお」は、時系列に記事が並んでいます。巻物のような形で、自分の考えていたことを眺められるので、おもしろいです。ブログの欠点は、長い文章を巻物のように、古い順にスクロールして眺められないことです。

そんなわけで、ブログを開設してある程度記事が溜まってくると、へこんだ時に削除・閉鎖し、「うつせみのうつお」という「倉庫」あるいは「記事のお墓」を作ります。そして、そこにバックアップしてある「データ＝記事たち」を「収める＝納める」のです。

これが一種の儀式になっています。

書いた記事たちは、巻物状に連なったものとして「納骨」しておいておきたいと思っています。

一般的なブログのバックナンバーは、カテゴリー別あるいは月別に分類された「ファイル＝箱」内に保存してあります。「ファイル＝箱」をクリックすると、新しい順に記事をスクロールして眺められます。

その仕組みになじめないのです。「ファイル＝箱」より巻物、新しい順より古い順のほうが、個人的には好きです。

「うつせみのうつお」は、「詳細もくじ」を除くと、全部で六ページになります。巻物と考えれば六巻という感じです。あれくらいの量だと、各巻の記事数をもっと多くして全部で三巻くらいにまとめたいたのですが、そうしようとするとうエラーが出ます。間借りしているサイトでは、技術的に無理みたいです。データの容量が大きすぎるのでしょうか。しかたなく、小分けしています。

*

>いつも敬遠しつつ、怖いもの見たさにときどき本屋で立ち読みして、そのうちにイヤな気分になっていつも後悔する自己啓発書のコーナー。

<消えてしまいたい指数>に、以上のようなくだりがあります。

抑うつ状態を改善するためには、薬物療法のほかに心理学を利用した療法があります。宗教やスピリチュアルと呼ばれているものに頼る方法もあるでしょう。

本屋さんの自己啓発書のコーナーにも、「バリバリ」や「ぎらぎら」から「まったり」や「ぼけーっ」まで手を替え品を替え、さまざまな「調理法」で「やる気や元気が出る」とうたったキャッチフレーズのついた本が並んでいます。

苦手です。自分には合いません。

そんなふうですから、読んでも効果があるとは思えません。以前、仕事をしていたころに、やむなくその種の本をたくさん読まなければならない機会がありましたが、あほらしくてたまりませんでした。まだ、お薬の方がましというか、自分には合っています。

*

自己啓発書やスピリチュアル関連の本を読んでいて、なるほど思ったことが二つあります。

- 1) 深呼吸のさいに、意識的にゆっくりと大きく息を吐き出すと楽になる。
- 2) 苦しみやつらさを他人のせいにならず、自分自身がそういう感情を選択しているのだと言い聞かせると楽になる。

この二つは、ときどき利用しています。

1) の場合には、宇宙だの、森羅万象だの、神仏のたぐいなどと関連づけることはしません。趣味や道楽や冗談ならいいでしょう。お金儲けのためなら、それはそれで仕方ない

でしょう。でも、自分にとって切実な問題と取り組むさいに、大風呂敷を広げたり、たわごとをぬかすのは嫌です。ストレッチやラジオ体操と同じで、たぶん生理的なものだと思います。セロトニンとかの話や理屈は忘れました。

2) は、やってみたら効果があったので素直にやっています。言い聞かせること、つまり言葉を使うとか考えることは、「ごまかし＝自己催眠＝錯覚＝すり替え＝語り＝騙り＝異化＝こじつけ」であり、「気休め＝自己保身＝心の衛生」にも役立てることができずから、これも、

* 「何」かの代わりに「何かではないもの」を用いる。

という、いわば

*代理の仕組み

の「一種＝一つの活用法」だと屁理屈をつけています。

*

>そこ（「地図は現地ではない」というフレーズ）からどうして癒やしや元気の素（もと）が出てくるのかなあ？ どうつながるんだろう？

については、上の2) について書いたことが、答えになっているような気がします。

なにしろ、

*代理の仕組み

は、化け物ですから。

◆

◆消えてしまいたい指数

2008-12-21 13:17:40 | Weblog

きのうは、朝から体調も良く、「消えてしまいたい指数」がかなり低かったので、久しぶりに職業訓練のための通信教育の教材に取り組んだ。

何かをし始めたらぶっ通しでやってしまうのが、自分の悪い癖。休まずに続けているとそのうち、ダウンするのは分かっているのだけど、ついやってしまう。案の定、8時間目でイヤな気分になった。肩もパンパンに凝っている（※これって、自分にとってはヤバイっていう予兆なんです）。

こんなことをやっていると何になる。どうせ社会復帰は無理に決まっている。この程度の技能を身に付けたところで、仕事になるのか？ ついこの間、ひどい抑うつ状態の時に、自分の好きなことだけやって生きていこう。親が亡くなり（※いい年をして親の年金で食べている身です）、預金を取り崩したら（※すでに急速に減り始めています）、野垂れ死にするだけ——と腹をくくったばかりではないか。

そう思い始めて、「消えてしまいたい指数」がどんどん高くなりそうな気配を感じたので、エイヤツとばかりに思いきって勉強を止めて立ち上がった。無理をすると本当にヤバイことになる。

デスクを離れ自室を出ようとして、ふと振り返ったとき、デスクにしがみついている自分の姿を見たような気がしたが、もちろん幻だろう。

相当、疲れていたんだ——。

で、少し横になって休んでから、ブログを書いて、ネコに遊んでもらって、ご飯を食べて、薬を飲んで、寝た。

*

以上がきのうの話。

きょうは、まあまあの調子。「消えてしまいたい指数」は50前後かな。

ところで、きのうここで引用した「地図は現地ではない」というのは、一般意味論という分野から、いつの間にか他の領域にまで越境して使われているのを最近知って、いささか意外な感じがした。

いつも敬遠しつつ怖いもの見たさに、ときどき本屋で立ち読みして、そのうちにイヤな気分になっていつも後悔する自己啓発書のコーナーに並んでいる、おびただしい数の本たちの中にも、「地図は現地ではない」が引用されていることがあるらしい。

グーグルで「地図は現地ではない」をキーワードに検索すると、コーチングやセラピー関連のサイトの紹介文がどさどさと出てくる。そういうのを目にすると、頭の中で赤信

号が点滅するので、数行の紹介文だけを読み、サイト自体にはクリックして入らないようにしている。だから、あの言葉がどういうコンテキストで使われているのかは知らない。

自分の中では、「地図は現地ではない」とは、「言葉は物（＝森羅万象くらい広い意味）ではない」「お金は物ではない」「王冠は王様ではない（＝総理の椅子は総理ではない）」「テレビの画像は被写体そのものではない」「エッチ画像に映っている〇〇〇は〇〇〇そのものではない」……というのと同じで、ないないづくしの代名詞みたいなものとして理解しているのだけど――。

そこからどうして癒やしや元気の素（もと）が出てくるのかなあ？ どうつながるんだろう？

いつか、心の余裕のあるときに、調べてみよう。

このブログも三日目。文章を書くのは疲れる。

これから昼食をとって、ネコを探しに、勇気を奮って家から外に出てみよう。ネガティブに、大き目のマスクをして、ニット帽を眉のあたりまで下げてかぶって、なるべく視線を下に向けながら。

09.11.30 代理だけ

◆代理だけ【2009-11-30 に書いたブログ不投稿記事】

<言葉に振りまわされる毎日>は、2008年12月22日に書かれたものです。

【注：<言葉に振りまわされる毎日>は、この記事の後に載せてあります。】

お金がない。それなのに働きもせず、言葉についてあれこれ考えている。

再読してみると、そうした状況は現在も変わりません。去年に比べれば、事態がより深

刻になっているのは確かです。来年はどうなっているでしょう。親は生きていますでしょうか。亡くなっていれば、当然のことながら年金は入って来ないわけです……。

*

話を変えます。

> (突然ですが、文体を変えます。「だ・た・である調」で書くのがしんどくなってきましたので。)

<言葉に振りまわされる毎日>の中の、上の一節に目が留まりました。

ブログを始めたころには、「だ・た・である調」で書いていました。それがしんどくなって、「です・ます調」に変えました。どうしてなんでしょう。たぶん、書いていて気が休まるからだと思います。

個人的な感想を言いますと、語尾の調子を変えるだけで、書く姿勢も変わってきます。このブログでは、読んでくださっている方々に話しかけるつもりで書いています。

ただし、「言葉=言語」や、

*「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。

という、いわば、

*代理の仕組み

について論じる場合には乱れます。*が頭についた部分は「だ・た・である調」であったり、体言止めだったりします。

でも、声を出して読んでいただくとお分かりになるかもしれませんが、あれでも話しかけるような気持ちで書いているのです。

ただ、ややこしい内容が「べた」で書いてあると読みにくいと思い、センテンスを分断し改行します。強調したい言葉やフレーズの頭に*をかぶせて、そこだけを拾い読みすれば、全体の意味がほぼ取れるように工夫しているつもりなんですけど、どうですか？

*

「だ・た・である調」で書かれた他人さまの文章を読んでいて、心地よい気分になる時と、読む気が失せてくる場合があります。

後者の場合とは、テーマや内容のせいではなく、書き手の「姿勢＝立場＝スタンス」で高圧的なものを感じ、読み続けることができなくなるという意味です。

いわゆる「目線」です。やっぱり上から見られる感じは、読んでいてあまりいい気持ちがありません。中には、そうではない人もいます。世の中には、思いっきり叱ってほしいと願っている人が、案外多いのではないかと感じます。

*

話しかける。伝える。報告する。教える。論ず。叱る。罵倒する。悪態をつく。命令する。指示する。説教をする。説得する。お願いする。懇願する。物語る。つぶやく。愚痴る。訴える。

文章には、以上挙げた要素が部分的に散りばめられている気がします。もっとも、そのうちのどれかの要素が特に強いということはあるでしょう。

さきほど述べた「目線」とからめると、「上から目線で、懇願する」とか、「下から目線で命令する」なんて芸当もできそうです。事業仕分けをめぐる、N賞をもらった人たちをボスが集めて「お金ちょうだい」と懇願する。

あれは、N賞という虎の威を借りなきゃできない芸当です。高度1万2千メートルくらいのファーストクラスの座席から、N賞受賞者以外の全国民を見下さなければできない顔芸だと感じました。あのプレゼンは、実に「政治的な＝きな臭い＝鉄面皮な＝見苦しい＝冗談は顔だけにしてくれ」ショーでした。

すると今度は、五輪のメダリストたちが、各競技の協会のボスたちからせつつかれて、金屏風を背景に同様の会見をする。「お金ちょうだい」＝「金よこせ」って。

あれって卑怯です。そんな派手な＝すごんだパフォーマンスができない目線の人たちが圧倒的多数なのに。賞やメダルという代理＝虎の威の強さを実感します。

ところで、以上の悪態は、何目線からついているのでしょうか？ せいぜい高度165センチメートルほどからの目線だと思われます。

いずれにせよ、お金、欲しいですね。最強の代理＝表象ですもの。

*

話を変えます。

* 「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。

というフレーズにある

* 「何か」

と

* 「何かではないもの」

というのは、便宜的なものです。つまり、間に合わせであり、テキトーなものだという意味です。

ちょっと遊んでみます。

1) Aの代わりにBを用いる。: このように「変奏する=変装する=言い換える」と、Bのところに、C、D、E・・・が来るような感じがしないでもないです。つまり、「代わりになるもの=代理」が一つだけではなくて、まだまだたくさんあるというイメージをいだかせてくれます。

2) 「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。: 出だしの「何か」が括弧でくくられているのに注目してください。「何か」には、何かがありそうだ。「何か」とは、特定できない何かではないだろうか。そんな深読みをする人がいるかもしれません。

3) 「何か」の代わりに、「その『何か』ではないもの」を用いる。: 2) とよく見比べてください。ちょっとした違いがあるだけです。でも、かなり神経症的な言葉遣いと個人的には思います。言葉を相手にするなら、これくらいこだわりのある記述をしてもいいのではないかという気がします。

4) ■の代わりに▲を用いる。: 「言葉=言語」を広義のものとしてとらえている姿勢がうかがわれませんか。広義の言葉とは、狭義の言葉である話し言葉と書き言葉以外に、手話、ホームサイン（※たとえば家庭内で使われている手話）、記号、符号、信号、アイコン、点字、指字、仕草、表情、合図、身振り言語=ボディー・ランゲージ、音声、視覚芸術、音楽などです。

5) 「何か」の代わりに、「その『何か』ではないもの」を使う。: 「用いる」という抽象

的な=曖昧な=「ぴんと来ない」言葉ではなく、日常的によく使われている「使う」という語を選んでいきます。「使う」対「使われる」という「主従関係=主導権の在りか」にこだわっているのではないか。そんな印象を個人的に受けます。

6)「何か」の「代わりに=代理として」、「その『何か』ではないもの」を「用いる=使う=使用する」。：こういう記述の仕方が好きです。フレーズの「意味= sense =方向」を固定させまいとするスタンスを言葉に演じさせるという、「戦略=企み=遊び=戯れ=演技=演戯」に対する「偏愛=こだわり=神経症=あやうさ=やばさ=タバサ」を感じます。

7)「何か」の「かわりに・代わりに・変わりに・替わりに・換わりに」、「その『何か』ではないもの」を「用いる=使う=使用する」。：このブログで、よく出てくる記述です。フレーズの「意味= sense =方向」を固定させまいとするスタンスに加えて、大和言葉系の言葉の持つ「多義性=多層性=絡み合い=輻輳(ふくそう)=交通=出あい=出愛」を言葉に演じさせている点に注目してください。こうした意味の絡み合いにおいては、「転ずる」「訛る」「誤る」といった「アクシデント=事故=偶然」を許容する、言葉の「自然さ=当然さ=具体性=物質性」があります。「正しい」対「正しくない」という「2項対立=嘘っぱち」は重視されません。

*

以上のように、

*「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。

という、いわば、

*代理の仕組み

は、「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃしたもの」であると同時に、きわめてシンプルな仕組みなのです。

整合性対矛盾とか、複雑対単純とか、真偽とか、正誤とかいう「世迷言=戯言=戯事=言葉の綾=『わかるはずのないこと』=『ヒトが判断できない仕組みになっていること』」を飲み込んでしまう、ブラックホールみたいなものだと比喩的に言うこともできそうです。

間違っても、ごちゃごちゃを単なるごちゃごちゃ、シンプルを単なるシンプルと混同しないようにしましょう。これも言葉の綾です。ヒトは言葉の綾を免れることはできません。言語に代表されるあらゆる表象は、ヒトが考えている以上に=以下に欠陥品なの

です。

どんな言葉やフレーズにも、納得なんかしちや駄目です。全部、「世迷言＝戯言＝戯事＝言葉の綾＝『わかるはずのないこと』＝『ヒトが判断できない仕組みになっていること』」だと思ひましょう。観念しまししょう。

事態は「知覚＝感知＝認識＝意識」においても同じです。「悟る＝覚醒する＝真理にいたる＝宇宙と一体化する」なんて、商品のキャッチコピーと同じです。信じて、それで「気持が良ければ＝満足するなら」信じましよう。精神衛生のために。でも、ぶっちゃけた話、それ以上だと本気で考えるのはあきらめませんか。

ヒトがこれ以上「勘違いすること＝誤認すること＝傲慢になること」をやめない、この星はとんでもないことになってしまいそうです。

*

えっつ？ そういうお前の使っているもの自体が言葉＝表象じゃないか、ですか？ ほら、そういうことなんです。そういう議論＝水掛け論＝お遊び＝じゃれあい＝「使えねーよ」になるんです。言葉って、どうしようもないほどテキトーなものでしょ？ 欠陥品でしょ？ 何とでも言えるんです。

だから、結局は「声のでかい者＝口のうまい者＝腕力のある者＝お金のたくさんある者」が大きな顔をしてのさばるのです。蛇足ですが、生き物の中ではヒト、ヒトの中では一部のヒトのことです。

誠に遺憾に存じます。

*

個人的なことですが、

こんなことを書いては、社会復帰は絶対に無理ですよ。

誠に遺憾に存じます。

*

いずれにせよ、

* 「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。

から逃れることはできません。

ヒトにとって知覚＝感知＝認識＝意識できるのは、

*代理だけ

なのです。たぶん、ですけど。



◆言葉に振りまわされる毎日

2008-12-22 11:43:39 | Weblog

きょうの「消えてしまいたい指数」は70～80くらい。肩が凝る。さっき、何かに書いてあった呼吸法を試してみたが、気分がぜんぜん改善しない。でも、ブログを書こうという気力はある。ブログを始めた効用は確かにあるみたいだ。

数ある、うつ症状判断のひとつに、「新聞が読めるかどうか」という項目を挙げているものがある。今朝も新聞を読む気にはなれなかった。朝食をとりながら、背後にあるテレビから流れてくるニュース番組の音声で世の中の動きを少しだけ知った。

景気が悪い。お金がない。お金を刷る。どんどん刷る。

うちもお金がどんどん減っていく。でも、お金は刷れない。

さて、きょうの本題。

遠い遠い昔、ヒトは言葉を持ってしまった。以来、言葉に振りまわされる日々を送っている。そんなネガティブな言い方をせず、言葉を活用しながらの日々を送っている、とポジティブにも言えるだろう。何とでも言えるのが、これまた言葉の特性だ。

【突然ですが、文体を変えます。「だ・た・である調」で書くのが、しんどくなってきましたので。】

さっきの話の続きですが、人間をやっていると、言葉に振りまわされる、つまり言葉が原因の行き違いやコミュニケーション上のトラブルには事欠かないですよ？ 困った

もんです。ニュースを聞いていても、とどのつまりは言葉が原因です。

失言といったそのものズバリの問題から、ケータイがらみのさまざまな事件（※ケータイは言葉のやり取りが基本というか、それしかないです、画像を除けば）、嘘や情報操作が引き起こした犯罪、「言った」「言わない」の争い、「売り言葉に買い言葉」……。そうした言葉と密接なかかわりを持ったニュースが、メディアを通して「言葉として」伝わってきます。

『そんな、あたり前じゃん。あんた、暇だね』——そんな、言葉が聞こえてきます。幻聴かな？

そ、そうですね。そう言われるのは承知のうえで、こんなことをくくだと書いています。は、はい、確かに暇です。ただ、言葉と無縁になろうとすれば、それは人間を止めることになるくらいの大問題なんで、気になって仕方ないんです。

*

すべては言葉。同時に、すべては無。

行き着くところまで来ちゃいました。それを言っちゃあ、おしまいだ、というわけです。はい。

「言語つつうのは、なんだね。〇〇君、頭のいい人間が取り組むべき問題だな。さもないと、行き詰まってしまう。言語に深入りすると、出口がないからよー」

と、かつて諭してくれたある大学教授の言葉を思い出しました。卒論のテーマを選ぼうとしていた時のことでした。『お前みたいな、頭の悪いやつは、間違っても言語に体当たりするような論文を書くなよ』っていう忠告だったと理解しています。

あれから長い年月がたちました。

センセイ、ごめんなさい。〇〇めは、自分の頭の悪さを省（かえり）みず、親のすねをかじりながら、相変わらず言葉にこだわっております。はい。

言葉に振りまわされる生活——これは人間である限り、誰もが受け入れなければならない定めです。

とはいっても、言葉自体には責任はなくて、言葉を使っている人間の側に責任があるんですけど、言葉が一人歩きするというのが始末に終えないので困ります。非常に困った問題です。要するに、たちが悪いんです、言葉というものは。使い勝手も悪いし、と

てつもなく恐ろしいものです。

【ネコの鳴き声がするんで中座し様子を見て来たあと、今まで書いたところを読み返してみました。】

顎（あご）を人さし指でさすりながら（※これ、癖なんです）読んでいるうちに、「表象」という便利な言葉があったことを思い出しました。そうそう、自分がこだわり続けているものをひっくるめて言う「表象」なんです。この「表象」というやつですが、きのうもちょっと触れましたように、言葉だけでなく、記号とか、お金とか、映像とか、行動とか——とにかく何でもありなんです。何でも、「表象」になり得るのです。

「表象文化論」とかいう言葉で教育課程を運営している大学がありますが、あれは名案ですね。何でもくくって束ねてしまえるんですもん。「あつたま、いいー」って感じで、つくづく感心します。言語の問題は、ああいう頭のいい人たちが、ちゃんと考えてくれているんですね。

頭痛が激しくなってきました。そばにいるネコがあまりにも気持ち良さそうに眠っているんで、ちょっと添い寝をさせてもらおうかと思います。

09.12.XX こんなことを書きました（その16）

◆「こんなことを書きました（その16）」

今回は、2009-09-04 + 2009-11-11~2009-11-29 + α & 2009-12-01~2009-12-11 に書かれた記事のダイジェストです。「こんなことを書きました（その15）」（2009-08-23~2009-09-01 + α ）の続きです。短い解説と、キーワードやキーフレーズが書いてあります。

※以下は、「うつせみのあなたに」というタイトルのブログに掲載した記事です。2009-09-04 以来、更新をしていませんでした。

*「お墓参り」2009-09-04:「恵」というハンドルネームを使って、小説とエッセイを中心にした「小品集」2009-09-04~2009-11-14 を開設したのと同じ日に、性懲りもなく、または新規に開設した「うつせみのあなたに」2009-09-04~2009-11-19 というタイトルのブログの第一弾です。これより前に作って潰した「うつせみのあなたに・・・」2009-08-11~2009-09-01 の続編みたいな感じです。「げん・現-3-」【ブログ不投稿】と同じ内容です。「不投稿(=不登校)記事」を、無理やり「投稿=登校」させたことが見え見えの元気の無い内容です。

*「言葉とうんちと人間(言葉編)」2009-11-11:「小品集」2009-09-04~2009-11-14 を削除・閉鎖する3日前に書いています。かつて書いた記事を寄せ集めて加筆したものです。バラバラだったものをテーマ別に編集したと言えなくもないですが、要するに二番煎じのパッチワークです。なぜ、「言葉とうんちと人間」なのかに対しては、次のように要約できます。人間とはごちゃごちゃぐちゃぐちゃの「主体」、言葉とは人間から出た抽象的な「こと・事・言・客体」であるごちゃごちゃぐちゃぐちゃ、うんちとは人間から出た具体的な「もの・物・物質・客体」としてのごちゃごちゃぐちゃぐちゃである。キーワードは、「阿吽・あーん・aum・om」「生死」「あくび」「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」「出る」「何か」「音(おん)」「自分」「他者・世界」です。直接書かなかったキーワードは、「ジャン・ピアジェ」「レフ・ヴィゴツキー」「ジャック・ラカン」です。

*「言葉とうんちと人間(うんち編)」2009-11-12:言葉とうんちが、それぞれ口と肛門という穴から出てくるものであるという単純な話から、論を展開していきます。言葉とうんちが「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」である以外に、どんな似た点があるかをめちやくちゃこじつけています。めちやくちゃながらも、本気で論じています。本気で「与太話」を語るという「戦略=企み」に意識的になっています。間接・直接的に、発達心理学の諸説やモデルに対して批判をしています。キーワードは、「出る」「あらわれる」「ぶかぶか・浮遊・運動」「宙ぶらりん・偶然性」「いきむ・いき・息・生き」「赤ちゃん」「うんちへの偏愛」「いないいないばあ」「自他未分化」「他者・世界」「離れる・隔たる」です。直接書かなかったキーワードは、「フロイト」「ジャン・ピアジェ」「レフ・ヴィゴツキー」「ジャック・ラカン」です。

*「言葉とうんちと人間(人間編)」2009-11-12:同日に掲載したシリーズの最終回です。「出た」と「出した」と「あらわれた」と「起こった」と「出合った」の違いにこだわり、ヒトにおけるフィクション創出という大きな問題に迫ろうと努めています。そのさいに「演じる」と「見る」という動作・仕草・行為が重要なカギとなっていると指摘しています。最後は、話をまとめるような振りをしながら、まとめてしまわないように気を配っています。「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」が、まとまるわけがありません。せいぜい、かきまわすくらいしかできません。キーワードは、「離れる」「距離感の演出」「知覚」「作る・捏造する」「分かる・分ける・てなづける・知る・名付ける」「いないいないばあ」「疑似体験」「生死」「快・不快」「膛(陰門)」「出合う・出合い」「愛」「息・呼吸」「フロイ

ト」。キーフレーズは、「あるものの代わりに『あるもの以外のもの』を用いる」です。

*「代理だけの世界 (1)」2009-11-13 : 「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。つまり、代用する、という「代理の仕組み」に徹底的にこだわろうとするシリーズの初回です。まず、知覚、情報、信号、データ処理という言葉を用いながら、「代理の仕組み」を説明しようと努めています。その説明が、あくまでも「説」であり、フィクションでしかあり得ないことを読者に訴えています。こうしたスタンスが不毛やペシミズムに至るしかない点にも触れています。一方で、ヒトとして生きる限り、そうした事態を避ける方便を身に付ける必要がある点にも触れています。権威主義的ないわゆる「科学」やいわゆる「理論」に対する不信感と嫌悪感を、やんわりと述べています。キーワードは「脳」です。直接書かなかったキーワードは、「脳科学」「情報理論」「科学哲学」「ソーカル事件」「アラン・ソーカル」です。

*「代理だけの世界 (2)」2009-11-14 : 「代理の仕組み」を「記述」という面から説明しようとして努めています。「代理ごっこ」という語を用いて、ヒトが言葉に主導権を取られて、うろろうとさ迷うしかない絶望的な状況をつづっています。同時に、その絶望を希望として受けとめるしかないヒトという生き物の習性について、やけっぱち気味に言及しています。いや、悪態と罵倒というべきでしょうか。キーワードは、「言い換え・代理の入れ替え」「愚鈍」「正しい」「真実」「与太話」「ガセ」「でたらめ」「出まかせ」です。キーフレーズは、「あらゆる広義の言葉つまり代理はでたらめである」です。

*「代理だけの世界 (3)」2009-11-15 : 「代理の仕組み」があくまでもヒトの生み出した体系である一方で、ヒトの手から離れて作動する体系でもあることについて、さまざまな例や比喻やレトリックを用いて論じています。キーワードとキーフレーズは、「代理の独立・代理の自立・代理のひとり歩き」「代理があってヒトがいる」「代理は、匿名的＝中性的＝非人称的＝ニュートラル＝のっぺらぼう＝タブラ・ラサである」「代理に責任はない」「ヒトが代理に『依存しきっている＝頼りきっている＝いわば中毒になっている＝なしではいらなくなっている＝主導権を握られている＝使われている＝もてあそばれている』」です。直接書かなかったキーワードは、「ソシュール」「ステファヌ・マラルメ」「宮川淳」です。

*「代理だけの世界 (4)」2009-11-19 : 「代理の仕組み」について、これまでさまざまなブログで述べたことの集大成です。自己輸血＝自己引用しながら、「言葉＝語」の「織物＝テキスト」をつくりながら、そこにつづられた言葉たちに言葉の「でたらめ・出まかせ」ぶりを再演させようという、以前にも試みた言葉の饗宴を繰り広げようとして努めています。まさに饗宴＝狂演＝狂宴状態です。読者が、深く考えることなく、あきれ顔で読み飛ばしてくれることを前提に書いたようなあっけらかんとした「あきらめ」が感じられます。直接書かなかったキーワードは、「ステファヌ・マラルメ」「ジャック・ラカン」「蓮實重彦」「高山宏」です。

* ブログタイトル：「うつせみのあなたに」 2009-11-27～2009-11-29

【※ 初めて書いたブログ記事「今日は誕生日」(2008-12-19 19:52:24 | Weblog) から順を追って再録しながら、それに現在の心境と視点からコメントを加える。そんなコンセプトと計画で始めたブログでしたが、まさに三日坊主で挫折してしまいました。たった三日間でしたが、ほぼ1年前を振り返ってコメントを書いているうちに、悲しさと空しさが募ってきました。こんなにしんどいものとは思いませんでした。なしくずしの死という事態を直視し、言葉にすることはつらくてできません。自業自得。いい勉強になりました。】

* 「1年前の記事を読んで」 2009-11-27：初めてブログを書いた日の心境の回想と、その日に書いた「今日は誕生日」2008-12-19 というタイトルの記事を再読した感想を述べています。キーワードは、「ネガティブに生きる」「ポジティブとネガティブ」「反意語」「人気ブログランキング」「にほんブログ村」です。直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦」「高山宏」です。

* 「今、考えていること」 2009-11-28：「地図は現地ではない」2008-12-20 の読後感を述べたあと、ブログの「初心者」だったころの文体を引用し、その後の文体の変遷について触れています。次に、今、考えていることについて語っています。また、抑うつ状態を緩和するために服用している薬による副作用が、文章を書きにくくするという点について、読者に理解を求めています。キーワードは、「絵文字」「(1回の投稿記事の)文字数制限」「(ブログの)文体」「レイアウト」「改行」「(文章上の)実験」「ルプレザンタシオン・表象(表象作用)・象徴・代理・再現前(再現前化)・再演」「表象文化論」です。

* 「社会復帰はあきらめました」 2009-11-29：「消えてしまいたい指数」2008-12-21 を再読し、生活面での危機的な事態が変わっていないことを再認識し、落ち込んでいます。現状を打開するために社会復帰を目指そう、という気持ちを失っていると告白しています。泣き言です。また、自分が同じテーマをえんえんと繰り返しながら変奏し、あるいは二番煎じを行い、頻繁にブログをつくり潰し、また新しくつくるという馬鹿げた行為をしていることに嫌気がさしている心境をつづっています。キーワードとキーワードは、「親の年金」「預金の取り崩し」「野垂れ死に」「孤独死・孤立死」「地図は現地ではない」「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる」「パーソナルワンパターンギャグ」「進歩がない」「金太郎飴」「うつせみのうつお」「自己啓発書」です。

* 「代理だけ」【2009-11-30 に書いたブログ不投稿記事】：「言葉に振りまわされる毎日」2008-12-22 を再読し、現在の心境を述べたこの記事は、結局、投稿せずに終わりました。ブログも、つぶしました。つまり、削除・閉鎖しました。文体と目線について語っていません。この記事を書いた数日前にニュースで報道されていた、事業仕分けに関する不愉快な出来事にも言及しています。「いずれにせよ、お金、欲しいですね。」という一文が切実に感じられます。「代理の仕組み」にこだわり続けている自分を評して、「こんなことを書いては、社会復帰は絶対に無理ですよ。」と嘆いています。キーワードとキーフ

レーズは、「だ・た・である調」「です・ます調」「ノーベル賞受賞者」「スパコン」「独立行政法人理化学研究所所長」「野依良治」「オリンピック・メダリスト」「記者会見」「虎の威=としての賞とメダルという代理」「整合性対矛盾」「複雑対単純」「真偽」「正誤」「ヒトが判断できない仕組みになっていること」「ヒトにとって知覚=感知=認識=意識できるのは、代理だけ」です。直接書かなかったキーワードは、「縄張り行動」「マーキング行動」「エソロジー」です。

※ブログタイトル「うつせみのあなたに」2009-12-01~2009-12-11

※初めて書いたブログ記事「今日は誕生日」（2008-12-19）から順を追って再録するだけの「二番煎じ」特化ブログを計画し実行しつつありましたが、うつのだん底に見舞われて、これも頓挫しました。過去の記事をコピーするだけなので、1日に5本のペースで続けていましたが、こうした単純作業もできないほど厭世的な気分になりました。最後に、再録したのは「人面管から人面壁へ」（2009-02-10）でした。

以上です。

第 2 部 09.12.02～09.12.XX

09.12.02 でまかせ・いず・む

◆でまかせ・いず・む

2009-12-02 17:01:31 | でまかせ

ことばについて考える。これは、さまざまな立場でたくさんの人たちがおこなっているでしょう。ここでは自らのやり方でやってみようと思います。どんなやり方なのかは、ここにつづられていくことばをお読みくだされば、だんだんとおわかりになることでしょう。

*ことばについて考えること

が好きです。ことばについて考えたり、調べたり、まとめることをお仕事になさり、ご飯をいただいている方々もいらっしゃいます。素人の身としては、うらやましいかぎりです。

でも、どのようなお仕事にも、それなりの苦しみやつらさがあるはずで。自らの思いを通すことができない。やむを得ず、折れたり、曲げたり、偽る。時には、したくないことをしなければならぬ。なりわいとするからには、ひとりではできないようですから、いたし方ありません。

ここでは、ことばについて思いをめぐらし、ことばとしてつづるときには、

*出るにまかせる

という心がまえで臨みたいと思っています。いわゆる、

*でまかせ

です。



わけあって、いわゆる「頑張る」ことができません。いわゆる「論理的思考」という作業が苦手です。他人様の書いたものを読むのも苦手です。でも、考えることは好きです。書くことも好きです。

人が死ぬ間際までできることって何でしょう。意識があれば、考えるとか、思いにふけるとか、夢に近い状態で迷うことではないでしょうか。できれば、そうしていたいと思います。そう願っています。

これからさき、なぐさみに、ことばをつづっていこうと思います。せっぱつまった今、何ができるかと考えたあげく、好きなことをやるのがいちばんいいと思うようになりました。

死ぬ前に何をやっておきたいかと言えば、考えたことをつづることです。そして、たとえばこうしてブログという形で、誰かに自分の考えたことを伝えることです。

ブログを始めたのは、昨年の12月19日でした。以後、のめり込んでいます。どんなふうののめりこんできたのかは、当ブログの左側にある「ブックマーク」にある「うつせみのうつお」というウェブサイトをお訪ねください。過去のブログ記事が収めてあります。【注：「うつせみのうつお」は削除・閉鎖し、現在はありません。】



いわゆる友達と呼べる人がいません。過去1カ月をふりかえてみても、家族以外に言葉をかわした人はいません。そんな状態がずっと続いています。こういう生活は苦ではありません。複数の他人様と接するほうがつらいです。

この生活で満足しています。



抑うつ状態と体調不良が常態化し、就労は無理のようです。そもそも、働く気持ちがないのかもしれない。

老いた親の世話をし、自分の病とつきあいながら、日々を送っています。ただ、介護を手伝ってくれる人がいるので助かります。

話が暗くなり、抑うつがひどくなりそうなので、この話題はここでやめておきます。



話を戻します。

言葉について考えるのが好きです。冒頭の文章に、もう一度ちらりと目を通してみてください。何かお気づきになられた点がありませんか。それ以後の文章に比べて、ひらがなが多いですね。

意識して、そのように書いたからです。もう一つ、それと関連してお気づきになったことはないでしょうか。できるだけ、

*やまとことば

を用いて書いてみました。どうして、そんなことをしたのかは後に触れます。



このところ考えているのは、翻訳という作業です。翻訳をかなり広い意味でとらえています。「翻訳=言い換え=置き換え=伝える=知らせる=言葉にする=何かの代わりに何か以外のものを用いる」という感じです。それだけの意味を担わせているわけですから、「翻訳」と括弧でくくったほうがいいかとも思います。

*「翻訳」

という言葉は、

*ある言語で書かれた文章の内容を、別の言語に文章として「置き換える」

という意味で用いられています。これが

*話し言葉

だと、

*通訳

という言葉が使われていますね。

英和辞典と和英辞典で「翻訳する・通訳する・translate・interpret」という言葉を調べてみました。「翻訳する・translate」のほうが意味が広く、また、「翻訳する・translate」

に「通訳する・interpret」が含まれる場合もあるような印象を受けました。あくまでも、個人的な印象ですけど。

また、いわゆる「通訳する」という作業を、「通訳する・interpret」という言葉を使わなくても言い表すことができるという感じもします。ほかに言い方があるという意味です。つまり、「通訳する・interpret」という語は、「翻訳する・translate」ほど使われないのではないかと思われま



辞書的な意味はさておき、ここでは「翻訳」を頻繁に使おうと思っています。括弧付きの場合には、「翻訳＝言い換え＝置き換え＝伝える＝知らせる＝言葉にする＝何かの代わりに何か以外のものを用いる」というぐらいの広い意味を持たせて使ってみます。



話を戻します。

冒頭の文章で、わざわざ

*やまとことば系の言葉

でつづったのには、わけがあります。

さきほど紹介した「うつせみのうつお」をご覧になるとお分かりになると思いますが、この約1年間、言葉についていろいろ考え、そしてそれをブログ記事として投稿するさいに使ってきたのが、日本語でした。

当たり前ですよ。日本語を母語とする者が「言葉＝言語」について考え、それを記述するさいに、日本語を用いるのは当然です。というか、それしか方法は思いつきません。

たとえば「わかる・分かる・解る・判る・別る」とか「わかる・分ける・別ける」という具合に、大和言葉系の言葉に漢字を当てはめてみるという作業をし、その意味を考えてみたりしました。

また、「分別（ふんべつ）・理解・判読・解釈」とか「分別（ぶんべつ）・分類・区別・識別」とか漢語（漢語系の言葉）を漢和辞典や国語辞典を使って集めてみたりもしました。

日本語にあると言われる、漢語と和語の二重構造について思いをめぐらすのは、なかなかスリリングな体験でした。



日本語で「言葉＝言語」一般について考えるという、「矛盾した＝杜撰（ずさん）な＝テキトーな＝いかにも素人らしい＝でたらめな」ことをやってきました。学者が学術論文を書くのではないとはいえ、あまりにもテキトーでお恥ずかしい限りです。

言い訳＝弁解をさせていただきますと、

*「言葉＝言語」なんて「真剣に＝緻密に＝周到に＝筋道を立てて＝論理的に＝明快に＝整合性を重んじて」取り組むほどのものではない。

という根強い「言葉＝言語」への不信感をいただいています。「言葉＝言語」は、

*ぐちゃぐちゃごちゃごちゃだ

とか、

*とりとめがない

とか、

*欠陥品である

というイメージを持っているという意味です。



以上のイメージは言葉だけでなく、

*何かの代わりに何か以外のものを用いる

という、いわば、

*代理の仕組み

を基本とする、

*広い意味での「表象」

と呼ばれるものすべてに備わっている属性だと思っています。広い意味での「表象」とは、

*狭義の言葉である話し言葉と書き言葉を始め、手話、ホームサイン（※たとえば家庭内で使われている手話）、記号、符号、信号、アイコン、点字、指点字、仕草、表情、合図、身振り言語＝ボディー・ランゲージ、音声、視覚芸術、音楽など

です。



ここでお断りしておきたいのは、

*ぐちゃぐちゃごちゃごちゃだ

とか、

*とりとめがない

とか、

*欠陥品である

という、「表象に備わっている属性＝表象に対していただいている個人的なイメージ」は、

*表象自体に備わっているのではなく、ヒトと表象との関係性である

ということです。

*関係性

という「もの・こと・状態」は一筋縄では論じることが、イメージすることもできない、まさに、

*ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ

していて、

*とりとめがない

属性をもっているように思われます。

今、

*「属性」とか「もの・こと・状態」というわけの分からない言葉およびイメージ

を使いましたが、これは

*ヒトの知覚・認識・体感・直観

と呼ばれている、これまた「わけの分からない＝未だ解明されていない＝これからも解明されることもない＝胡散（うさん）くさい」ものによって

*とらえる対象

であるということなので、この「お話＝説＝フィクション＝作り話」はますます怪しく思えてきます。



というわけで、話は飛躍しますが、このブログでは、

*でまかせしゅぎ

で言葉について考えたり、さまざまな思いをめぐらしたり、その結果を言葉としてつづっていくつもりです。

*でまかせしゅぎ

とは、

*「世界＝宇宙＝森羅万象」（※ヒトにとっては絶対にとらえられないものです）

に備わっていると想像＝妄想される

*圧倒的な偶然性（※言葉は欠陥品ですから、偶然性を整合性とか必然性と言い換えることも可能です。実際、そう言い換えているヒトたちがたくさんいるようです）

に「身を任せる＝身をゆだねる＝一緒に揺れるように努める＝一緒にぶれるように努める＝『参りました』と言う＝降参する＝白旗を掲げる＝ワンちゃんやにゃんこのように腹を上にして寝転がる」という意味です。

*でまかせしゅぎ

とは、

*でまかせいずむ＝でまかせ・いず・む＝出任せ・出づ・夢＝でまかせ・イズ・霧＝でまかせ is 無

なのです。

でまかせしゅぎにおいては、

*「正しい」対「正しくない」とか、整合性対矛盾とか、真偽とか、正誤といった世迷言

にはこだわりません。それでいて、

*本気で、できるだけ正確であろうとする

のです（※正気かどうかはわかりませんが本気です）。それを矛盾であり世迷言と感ずるかどうかは、そのヒト次第です。流行（はやり）の言葉を使うなら、

*誰にも観測できない

のです（※何て「陳腐な＝ステレオタイプ化された＝思考停止的な＝何も言っていないに等しい＝単なるレトリックでしかない」言い方なのでしょう、反省）。



そんな感じのブログです。よろしければ、またお訪ねください。お待ちしております。

ブログ開設者の抑うつ状態および体調の良い時のみに、更新させていただきますので、どうかご理解とご了承をお願い申し上げます。

次回は、「翻訳」についてさらに思うところを書く予定です。

09.12.03 もてあそばれるしかない

◆もてあそばれるしかない

2009-12-03 15:28:54 | でまかせ

まず、前回のまとめをさせてください。

このブログでは、

*「表象」

を広い意味でとっています。

*狭義の言葉である話し言葉と書き言葉を始め、手話、ホームサイン（※たとえば家庭内で使われている手話）、記号、符号、信号、アイコン、点字、指点字、仕草、表情、合図、身振り言語＝ボディー・ランゲージ、音声、絵、映像（静止画像・動画）、視覚芸術、音楽など

を指しています。

また、

*「翻訳」

を、

*「言い換える＝置き換える＝伝える＝知らせる＝言葉にする＝何かの代わりに何か以外のものを用いる」

くらいの意味で使っています。

そうした言葉遣いにそって、

*ヒトがどのように「表象」を「翻訳」しているか

について考え、記述してみたいと思っています。



あくまでも、「我流＝自己流＝自分流＝勝手流＝でまかせ主義」で、

*「正しい」対「正しくない」、整合性対矛盾、真偽、正誤といった世迷言にはこだわらない。

方針でいきます。したがって、既存の学問や、誰々が何と言ったとか書いたとかいうお話とは、関係なく考え、言葉をつづっていきます。

今、ここにある手持ちのものや、おぼろげながら覚えていることだけを頼りに、揺れて＝ブレながら書いていきます。ですから、固有名詞や、何らかの定義されたギョーカイ用語が出てくることは、あまりないと思います。

また、

*できるだけ正確を期すために矛盾をおかす、という矛盾を実践していく。

ことになるだろうと思います。



*固有名詞

とか

*専門用語＝学術用語＝ジャーゴン

が苦手です。というか、知りません。

たとえば、「フェルディナン・ド・ソシュール」という固有名詞を、見聞きしたことはあります。「シニフィエ」とか「シニフィアン」という用語も、見たり聞いたことはあります。

でも、「あなたはフェルディナン・ド・ソシュールを知っていますか？」とか、「シニフィエを知っていますか？」と尋ねられた場合、「はい」とは答えられません。

「フェルディナン・ド・ソシュールって、知っていますか？」

「はい。シニフィエとシニフィアンなんて言っていた言語学者ですよ。確か、構造主義のきっかけを作ったとか」

「そうですね。よくご存知ですね」

なんていう、紋切り型の会話が成立するというレベルのお話なら別です。そうした会話をやれと言われれば、やれないことはないと思います。けど、これだと、「いい天気ですね」「本当に」と変わらないじゃないですか。

人間関係を円滑にするという効用はありそうですけど。



「〇〇〇の説によると、㊦㊦㊦は△△△だから、☆☆☆もまた□□□ということになります」

といったフレーズも頻繁に見聞きます。各3個ずつ並べた記号の部分には、固有名詞や専門用語が入ることが多いのですが、個人的には、そのたぐいのお話＝戯言には興味をそられません。楽しくもありません。

ネコとじゃれあっているほうが、ずっとスリリングです。

*絶対的他者との遭遇

の気配を感じます。



ここで矛盾します。

「〇〇〇の説によると、㊦㊦㊦は△△△だから、☆☆☆もまた□□□ということになります」

といったフレーズも、さきほど挙げた紋切り型の会話も、言葉です。広義の「表象」です。そうした言葉の断片やフレーズ自体には、

*絶対的他者

の気配を感じます。

*「表象」とは、ヒトが自然物に手を加えたり組み合わせることによって作ったり、頭の中ででっちあげたり、自然物を加工したり、あるいはヒトが自然物に「意味」や「属性」を与えて喜んでいるものだ。

と言えそうなのですが、同時に、

*「表象」は、ヒトとは離れて存在するものだ。

とも考えられるようなのです。

仮に、この現時点でヒトがこの惑星から突如として消え去ったとします。それでも、多くの「表象」は残るでしょう。記録されていない話し言葉や音声は別ですけど。

たとえば、文字やいわゆる芸術作品やヒトが道具として用いたものたちは、残るにちがいありません。

ヒトが作ったものではない、あるいは道具として使ったり、何らかの「価値＝用途＝意味＝属性」を与えることのなかったもの、たとえば、ヒトが見向きもしなかった石ころと同様に残るでしょう。

そうしたヒトとの関係性を絶たれた、あるいは、関係性とは無縁のものを、

*絶対的他者

と、ここでは呼んでいます。

*ヒトは、絶対的他者の気配しか感じられない。

し、

*ヒトは、絶対的他者と遭遇したと思ひ込むことしかできない。

と考えられます。以上の2フレーズを、

*ヒトは、絶対的他者を「表象＝代理」としてしかとらえられない。

と言い換えることもできそうです。



前回にも触れましたが、

*ヒトと「表象」つまり絶対的他者との「関係性」(※特に「関係性」という言葉に注目してください)

という「曖昧模糊としたもの＝わけの分からないもの＝たぶん、いや絶対にガセ＝でたらめ＝でまかせ」にこだわってみたいと思います。

その「関係性」と「戯れる＝遊ぶ＝遊ばれる＝もてあそばれる」鍵となるのが、

*「翻訳」

という「考え方＝説＝お話＝作り話＝フィクション＝でたらめ＝でまかせ」なのです。



ここでは、

*ヒトの言うこと為すことのすべては、「でたらめ＝世迷言＝でまかせ」である。

という「考え方＝説＝お話＝作り話＝フィクション＝でたらめ＝でまかせ」から出発します。

以上の主張に対して、「そんなことはない」と否定する「考え＝希望＝願い＝信仰＝暗黙の了解＝掟＝『そんなことはないって言ったら、絶対はないの!』」は、ヒトの世に満ちています。

*人間様としてのプライド

が許さないのです。この駄文を書いている者もヒトの端くれですから、その気持ちはよく分かります。腹を立てるのも、もっともだと思います。

とはいえ、圧倒的多数を占める、ありふれた「考え＝希望＝願い＝信仰＝暗黙の了解＝掟＝『そんなことはないって言ったら、絶対はないの!』」とはズレた、上述の「考え方＝説＝お話＝作り話＝フィクション＝でたらめ＝でまかせ」の立場をあえてとります。

「あえて＝わざと＝企みをもって＝戦略的に」、「少数派＝はみっこ＝へそ曲がり＝偏屈者＝天邪鬼」の立場をとります。

実は、どっちの立場をとっても、同じことなのです。戯言という点では変わりません。要は、「好み＝スタンス＝おたんこな一す」の問題です。ここでは、好きなように考え好きなように書く。それだけのことです。



ヒトがどのような「立場＝スタンス＝考え方＝でまかせ」を前提にしようと、

*いわゆる「宇宙＝世界＝森羅万象」という戯言（※ヒトが「表象」としてとらえているものという意味です。その「表象」が指し示している「何か」ではありません、どうか、あり得ません）

は、びくともしません。それが「びくともする」と思い込んでいる＝信じているヒトもいるにちがひありません。

ちなみに、この駄文をお読みになっているあなたはどうか？

*ヒトのとり立場しだいで「宇宙＝世界＝森羅万象」はびくともしない。

とは、お思いにならないほうですか？

*ヒトの考え方しだいで「宇宙＝世界＝森羅万象」は変わる。

という「考え方＝自己催眠法＝精神衛生にとっていいこと＝メンタルヘルス上プラスになること＝気休め＝ある種の処世術＝自己啓発のステレオタイプの一つ＝『ああ気持ちいい』＝『何だか元気が出てきた』』があるみたいです。

それはそれで、もっともだと思います。異議はありません。それで気が休まり、癒やされ、元気が出て、幸せな気分になるヒトがいるらしいことは見聞きしてきました。

ただし、残念ですが、ここでやろうとしているのは、そういうたぐいの処世術や癒やしではありません。



上で述べたことは、個人の好みの問題であり、どの見方をとるかは、各人の自由です。

どちらの立場をとるにせよ、できれば自分から選びたいというのが、この駄文を書いている者の願いです。

さまざまな、宗教、カルト、心理学、精神医学、スピリチュアルなどと呼ばれている分野に関連した、おびただしい数の新旧の集団、組織、団体、流派、学派、派閥があり、そしてそれぞれにファンクラブがあり、追随者たちがいます。

ファシズム、全体主義、個人崇拜、集団活動、徒党を組むこと、群れることが苦手な者にとっては、

*今ここにある、手持のものと、おぼろげながら記憶していることを頼りに、ひとり我流で考える。

ことだけが、自分に残された唯一のなぐさみであり、たのしみなのです。

恫喝、勧誘、洗脳、強制、掟、脅迫、ルール、しきたり、思考停止、何となく、みんながやっているから——は苦手です。



忘れていましたが、

*眠ること

も何ものにも変えがたいたのしみです。これも、基本的にひとりでやるものです。寝ることではありません。「眠ること＝眠りに入ること」です。念のため書き添えます。

蛇足ですが、

*眠ること

がきわめて長く続くと、

*なくなること＝亡くなること＝無くなること

になります（無意識が長く続く昏睡状態や植物状態とは区別しての話です）。当然のことながらまだ体験したことはありませんが、たのしみです。

眠りから緩やかに永眠に移行できれば最高なのですが、虫がよすぎますね。反省。

凍死という手段が可能な冬は、個人的には危うい季節なのです。やばい話をしてしまいました。ごめんなさい。



話を戻します。

ここでは、

*ヒトの言うこと為すことのすべては、「でたらめ=世迷言=でまかせ」である。

という「考え方=説=お話=作り話=フィクション=でたらめ=でまかせ」を前提に、

*「表象」の働き

言い換えると、

*何かの代わりに何か以外のものを用いる

という、

*代理の仕組み

とも呼べるものについて、

*「翻訳」

という「言葉を使って=言葉にもてあそばれて」いきたいと思います。というか、むしろ、

*ヒトは言葉にもてあそばれるしかない

とかねてから感じています。言葉を使うとか使いこなすなんて、できっこありません。使うと思ひ込むことなら、できそうですけど。

これは、言葉に限らず、表象全般についても言えそうだと思います。

*もてあそばれるしかない

とは、表象とヒトとの「関係性」の一つとして、

*ヒトは表象に対して主導権を握ってはいない。

事態だと言えるような気がします。

*主従関係でいうと、表象が主であり、ヒトが従に当たる。

という意味です。その逆ではありません。



今後の見通しは次のようになると思われます。

*言語という世界に散在する体系の数だけあると推測される、ヒトが知覚・認識・意識・捏造（ねつぞう）・行為している「表象＝代理＝でたらめ」を、他の「表象＝代理＝でたらめ」に「翻訳」という行動について考える。

あるいは、

*この惑星に生息するヒトの数だけあると推測される、各ヒトが知覚・認識・意識・捏造・行為している「表象＝代理＝でたらめ」を、他の「表象＝代理＝でたらめ」に「翻訳」という行動について考える。

または、

*世界に生息する各ヒトが刻々と変化する＝移り変わるさいに、知覚・認識・意識・捏造・行為すると推測される「表象＝代理＝でたらめ」を、他の「表象＝代理＝でたらめ」に「翻訳」という行動について考える。

ややこしいですね。うんと単純化します。

*ある「でたらめ」を他の「でたらめ」に「翻訳」することについて考える。

あるいは、

*ある「でたらめ」を他の「でたらめ」に「翻訳」するさいに生じる「ズレ」について考える。

です。



話が総論になってしまい、申し訳ありません。

焦らず、ぼちぼちいこうと思います。

次回は、以上の「でたらめ」と「翻訳」と「ズレ」について、具体的に書いてみる予定です。

09.12.04 わかるはわかるか

◆わかるはわかるか

2009-12-04 15:19:42 | でまかせ

総論が続いたので、今回は具体的に、

* 「表象」を「翻訳」する作業

に入りたいと思います。前回の最後のほうで紹介いたしました、うんと単純化した図式を引用します。

* ある「でたらめ」を他の「でたらめ」に「翻訳」することについて考える。

あるいは、

* ある「でたらめ」を他の「でたらめ」に「翻訳」するさいに生じる「ズレ」について考える。

以上の2つです。

ここでいう「でたらめ」とは、「表象一般」のことです。このブログでは、

*狭義の言葉である話し言葉と書き言葉を始め、手話、ホームサイン（※たとえば家庭内で使われている手話）、記号、符号、信号、アイコン、点字、指点字、仕草、表情、合図、身振り言語＝ボディー・ランゲージ、音声、絵、映像（静止画像・動画）、視覚芸術、音楽など

を指します。



上記の「表象」は、

*何かの代わりに何か以外のものを用いる。

という、

*代理の仕組み

を基本としていますから、「でたらめ＝不正確＝何かそのものではない＝代理でしかない」ということになります。「でたらめ」とは、それくらいの意味です。他意はございません（どういう意味じゃ）。

*「翻訳」

とは、

*「言い換える＝置き換える＝伝える＝知らせる＝言葉にする＝何かの代わりに何か以外のものを用いる」

ほどの意味だと考えてください。



お断りしておきますが、このブログでやっているのは、素人の「お遊び＝でまかせ＝でたらめ」です。学問でも研究でもなく、一部の人たちから「楽間」と呼ばれているものにちょっとだけ似ています。

この駄文をお読みになるさいには、どうかその点を誤解なさらないよう、あるいは、書いてあることの馬鹿らしさにご立腹なさらないようお願い申し上げます。とりわけ、

* 厳密さ、緻密さ、論理性、整合性、一貫性、明確さに欠ける

などと、「ないものねだり」をなさらないでくだされば、幸いです。無い袖は振れません。

とはいえ、みなさまがお笑いになるのを承知のうえで、あえて申しますと、

* 正確さ

を心がけております。でたらめやでまかせを論じ、そして記述するには、「正確さ」が必要だと信じております（※ただし、ここでの「正確さ」には、いわゆる「矛盾」、いわゆる「荒唐無稽」、いわゆる「でまかせせ・でたらめ」が含まれます。でたらめやでまかせを論じるには、でたらめやでまかせが必要です）。

また、せっかくブログという媒体を通じて不特定多数の人たちに向けてせつせと記事を書いているのですから、文章はわかりやすくしたいと心がけてもおります。具体的には、

* 中学3年生くらいから読めるほどの、わかりやすさ

を意識しています（※ただし、わかりやすさは、必然的にわかりにくさを含んでいます）。

なぜ、「中学3年生くらいから」なのかと申しますと、高校入試の国語の長文問題で取り上げられている「現代文」を目にする機会が最近あったからです。割とこみいったことが書いてあり、「そうなのか。今の中学3年生は、こんなにややこしい文章を読まされているのか」と感心した次第です。

要約すると、このブログでは、

* でたらめについて、正確でわかりやすく出まかせに論じる。

ということです。

本気です。正気とは申しませんが、本気です。アホがアホなりに正確さとわかりやすさを心がけている。そんな感じです。



さて、

まず、「素朴な＝ナイーブな＝おめでたい＝問題設定からして変な」疑問を箇条書きにします。

1) ヒトという種(しゅ)を決定する要素には、どんなものがあるのか。やはり、DNAレベルで判断するのだろうか。

2) いわゆる人種や民族に関係なく、ヒトを生後からある一定の年齢まで、ある母語で育てると、その母語を身につけることができるのは、なぜか。

3) ヒトが各集団によって異なる言語を話すのは、どうしてなのだろう。なぜ、ヒトという種に共通した言語が備わっていないのか。

4) 異なる言語を用いるさまざまなヒトの集団同士が、太古よりコミュニケーションを成立させてきたが、それは具体的にどのような形で行われてきたのだろうか。

5) 翻訳や通訳という作業を成立させる条件や要素は何か。

6) ある言語集団と別の言語集団との間に、いわゆる理解は成立するのだろうか。

7) 同じ言語を話す個人間で、いわゆる理解は成立するのか。

7つの疑問を読み返してみましたが、本当に「馬鹿みたいな＝こんなことを不思議に思うなんて変な＝そんなことを考えなくても生きていけるよ的＝そんなことに頭を悩ませているから抑うつ状態が悪化するのだ的」疑問ですね。



以上を、粗雑な形でまとめると、

A) ヒトとヒトは分かり合えるのか。

B) なぜ、ヒトは同じ言葉を話さないのか。

となります。

小学生の高学年くらいから、漠然とそんな疑問をいただいていた。それが高じて、中学3年生ころから高校生時代にかけて、NHKのラジオとテレビの語学講座全部を視聴

するという、無茶をしていた時期もありました。

複数の「言葉＝語」および「言葉＝言語」が存在することが不思議でならず、いったいどうなっているのかが気になって仕方なかったのです。今も、そんな思いを引きずっています。ただし、複数の言語を学ぶ気力は失せました。



具体的な作業に移ります。

このほぼ1年間に、言葉＝言語について、いろいろ考えたり調べたことを文字＝活字として記録してきました。当ブログの左側にある「ブックマーク」にある「うつせみのうつお」というウェブサイトにも、そうした記事たちが収録されています。【注：「うつせみのうつお」は削除・閉鎖し、現在はありません。】

それを資料としながら、

*わかる・しる・さとる・とらえる・まなぶ・ならう・みにつける……

*理解する・了解する・知覚する・察知する・認識する・認知する・会得する・学習する・習得する……

*【以下は日本で広く用いられている手話です。】右手を開き胸の上当てそのまま下ろし、胸のつかえが下りるような動作をする（「分かる」や「知る」に相当する）・口に何かを放り込み、飲み込むような動作をする（「理解・理解する」に相当する）・右手の指でこめかみ辺りをさす（「感じる・覚える」に相当する）・右手を開いて上から側頭部へと下ろし、握った状態でくっつける（「覚える・習う」に相当する）・右手の人差し指を正面のやや上方から顔に向けて2度ほど指す（「教わる・習う」に相当する）・両手を顔面の前で並べて2度ほど軽く振り、本を読む動作をする（「勉強する」に相当する）【※「右手」は「利き手」と置き換えてもよさそうです。】

* understand、appreciate、know、see、tell、get、find、recognize、comprehend、learn ……

*【以下は米国で広く用いられている手話です。】自分に向けて握った右手を軽く側頭部につけ、人差し指を2度立てる（understandに相当する）・自分に向けて開いた右手を側頭部を持っていき、何度か軽く叩く（knowに相当する）・左手を相手に向けて開き、右手の指で側頭部をさし、その指を開いた左の手のひらにくっつける（recognizeに相当する）・右手を握り顔の斜め下に持って行き、握りこぶしを少し挙げて人差し指を突き出す（comprehendに相当する）・左手を胸の下あたりで上向きに開き、右手を開いて左の手

のひらから何かをつかみ取り額へ持って行きくっつける動作をする (learn に相当する)
【※「右手」は「利き手」と置き換えてもよさそうです。】

といった、意味的に近接していると思われる一連の「言葉＝語＝単語」の意味やコアイメージやニュアンスや使い方や語源などについて、観察していきたいと思います。

こういう「作業＝手仕事＝やっつけ仕事＝ブリコラージュ＝一銭にもならない内職＝道楽」が好きなのです。

とはいえ、これはとても面倒で複雑な作業になりそうです。まともに取り組めば、抑うつ状態と体調が悪化することは目に見えています。



そうなると困ります。

楽と横着をするためには、いくつかの方法が考えられます。

のめり込まずに、そこそこにやる。少しずつやる。テキトーにやる。気の向くままにやる。細かいことにはこだわらない。「うつせみのうつお」に収録されている記事から、以前に行った作業の個所をコピーしまくり、さらにパッチワークしまくる。

素人ですから、それくらいの「のんびり＝手抜きをした」やり方で、作業を進めるのがいいと思っています。



どうでしょう。

みなさんの中で、ご興味のある方がいらっしゃれば、自分なりの方法で、似たようなことをやってみてみませんか。おもしろいですよ。

たくさん本を買って読んだりしないで、手持のものと自分の頭だけを頼りに、しこしここと安上がりにやるのがコツです。



前にも書きましたが、「言葉＝言語」や「言葉＝語＝単語」について考え、考えたことを記述する場合には、ふつうは

* 母語に頼り、母語を使って

作業をします。

ところで、たった今書いた文では、

* 母語は日本語だ

という前提になっていますが、これって、すごく曖昧でテキトーで粗雑な言い方だと思いにりませんか。

* 母語って何？ 日本語って何？ 言葉を使うって、どういうふうにするの？ 考えるって、本当に言葉でやっていることなの？

このような疑問が次々と湧いてきます。気になります。つい、こだわってしまいます。それが誠実な態度ではないでしょうか。でも、その誠実さに素直に従うと、かなり危うい=やばいことになりそうです。

下手をすると、イっちゃいますよ。イっちゃうのはいいとしても、戻れなくなってしまふ可能性も高そうです。どうせ、イっちゃってるんだから、とことんイけ——なんて幻聴みたいな声が聞こえてきます。

マジでヤバいです。

ですので、テキトーにやります。ただでさえ、ビョーキの身ですから、これ以上無理はしないほうがいいと思います。



ところで、

さきほど手話を取り上げましたが、手話というのは言語です。体系化された文法も品詞もあるそうです。国や属する集団によって異なるとも聞きました。手話言語学という研究分野もあるらしいです。

数年前に、2年続けてNHKの手話講座を受講したことがあります。身体障害者手帳を持つ中途難聴者であり、しかも聴力が年々低下しつつあるので、手話を習っておこうと思ったのです。いつかは、中途失聴者として、手話のお世話になる時が来るでしょう。

手話を習い始めて知ったのですが。手話を母語としている人が、この国にも万単位でいるそうです。詳しいことは、ウィキペディアで検索なさってください。驚くような事実がたくさん書かれています。

*ある日本語の単語が、たとえば日本で広く使われている手話において、どのような手と指の動作と、手と指以外の動きによって表されているか。

それだけでも、興味深いのに、たとえば米国、あるいはフィンランドで広く使われている手話だと、どのように表現されるのだろうか、などと考えていくと気が遠くなりそうになります。

ちなみに米国とフィンランドは、手話に対して国家が非常に寛容で進歩的な態度をとっているそうです。その点において、日本はかなりな後進国らしいです。

恥ずかしいというより、悲しいです。

■

しんどくなってきたので、続きは次回に回させていただきます。

今考えているというか気になって仕方がないことを、少しだけ書いてみます。

■

気になっているのは、

*わかるはわかるか

ということなのです。2通りの解釈ができそうです。

1) 「わかる」という、「表象＝代理」としての「こと・言葉・イメージ・行為」は、ヒトに「分かる＝理解する」ことができるのか。

2) 今ここで文字としてつづっている「わかる」という、「表象＝代理」としての「こと・言葉・イメージ・行為」は、「わかる」という「表象＝代理」としての「言葉＝語」として、この国で一般的に了解され、広く流通しているとされる、「表象＝代理」としての「こと・言葉・イメージ・行為」とほぼ同じものなのか。

です。

その2点が、さっぱり分からないのです。疑問なのです。だから、調べたり、考えてみたいのです。

調べ、考えたところで、たぶん、いや、きっと分からないだろうという気がします。でも、取り組んでみようと思います。

*楽しいのは、結果でなくてプロセスですから。

比喩的に言うなら、ドライブ（車での旅行ではなく、あくまでも運転することです）が楽しいのは、運転というプロセスであり、行き先ではないのです。ドライブが終れば、「あーあ、疲れた」とか「あー、楽しかった（※過去形であることに注意してください）」で終るのがふつうでしょう。



このブログでは、そもそも

*正解のある問題

に取り組んでいるわけではありません。なにしろ、

*「わかる」は「でたらめ」だ。

から出発しているのです。それを前提にしているのです。出発点と終着点は、どうでもいいと言えます。

いささか大仰で構えた言い方になりますが、

*ヒトにおける、知の醍醐味は、きっかけや終点ではなく過程である。

と思っています。だからこそ、

*ヒトの知は、「でたらめ＝でまかせ＝作りごと＝うそ」であって構わない。

とも思います。なにしろ、ヒトが相手にしているのは、表象＝代理ですもの。それが身分相応ではないでしょうか。



話を戻します。

*「わかる・分かる（・理解する）」と「わかる・分ける（・分類する）」が語源的に結びついている。

ということは、割とよく知られていますね。ずばり、その種のことをタイトルやテーマにした本が出版されていると、先日の新聞広告か書評で知りました。

でも、これは日本語で考えた場合の「わかる」です。

その「わかる」を、

*意味の近い他の日本語の複数の単語（大和言葉系、漢語系の両方を含めて）と比較してみる。

とか、

*日本で広く用いられている手話の、ほぼ同じ意味の単語と比べてみる。

あるいは、

*英語など異言語の、ほぼ同じ意味の複数の単語と照らし合わせてみる。

そうした作業をしてみたいのですが、出発点が、

*「わかる・分かる（・理解する）」と「わかる・分ける（・分類する）」

という日本語なのです。これは、

*「枠組み＝しがらみ＝限界＝刷り込まれたイメージ＝日本語を母語とする限り免れない視点」

だと考えられます。

この「枠＝限界」を強く意識するとしないとでは、比較という作業の仕方がかなり違ってくるはずですよ。

言うのは簡単ですが、すごく大変でしんどくて、ややこしいことだと思われま



ちょっと、つらくなってきました。

書くのは、この辺でやめて、続きは次回に回そうと思います。

では、失礼いたします。

09.12.05 翻訳の可能性と不可能性

◆翻訳の可能性と不可能性

2009-12-05 13:49:33 | でまかせ

ほぼ1年前にブログを開設した以降、「わかる」という「表象＝代理＝でたらめ＝恣意(しい)的なもの」としての「言葉＝語」について、調べたり考えたりした時期がありました。

で、当ブログの左側にある「ブックマーク」の「うつせみのうつお」という過去のブログ記事を集めたサイトを、覗いてみました。ありました。【注:「うつせみのうつお」というサイトは削除・閉鎖し、現在はありません。今ご覧になっているサイトの目次で、以下の記事を探すことができます。】

「かわる(1)」(2009-03-26)～「かわる(10)」(2009-03-29)という連載です。

なぜ、タイトルが「わかる」ではなく「かわる」なのかは、

*「わかる」という「言葉＝語」は、「表象＝代理＝でたらめ＝恣意的なもの」である。

からにほかなりません。上記の連載をお読みいただければ、その

*でたらめぶり

がお分かりになると思います。



上記の連載から必要な部分をコピーペーストしながら、

* 「わかる」とはどういうことなのか。

を、以下にまとめてみます。前回に引き続き、くどく念を押しておきますが、「わかる」というのは、日本語という「枠=限界」の中での「イメージ・意味・表象・代理」です。

その意味では、

* 他の言語に「翻訳不可能」

なのです。つまり、

* 日本語の「わかる」と全く同じ語義を備えた語は、他言語には存在しない。

ということです。

とはいえ、

* 「翻訳の不可能性」は、「翻訳の可能性」でもある。

点を忘れてはなりません。つまり、

* 「わかる」と部分的に重なる語義を備えた語

は、他言語に存在するでしょう。



要は、

* どの程度の「精度=重なる部分の大きさ」を期待するか。

です。その期待度によって、可能か不可能化の判断が分かります。

* 「ま、いっか」と、つぶやく = 翻訳が可能かどうかなど大した問題ではないと考える

か、

* 「こんなはずはない」と、腹を立てる = 翻訳は可能だと信じたくてたまらない気持ちをかかえて悶々とする

か、

* 「これでいいのだ」と、居直る = 翻訳は可能だとあっさりと思いつむ

か、

* 「こんなものでしょう」と、つぶやく = 厳密な翻訳は不可能だという見方で妥協する

くらいのスタンスが考えられます。



どういふわけか、尻尾のないおサルさんの中でも体毛の薄い、特にうだつが上がらない種(しゅ)が、言語を獲得してしまった。同時に、肥大化した脳を持ってしまった。そして、ヒトとなった。という、「お話=説=でまかせ=フィクション=作り話=神話」があるみたいです。

素人のまた聞きであり、聞き間違いや思い違いの可能性も高いので、このブログでは、とりあえずそういう与太話があるという前提で話を進めると、理解してください。

で、不思議でならないのは、その

* 言語がヒトの集団によってばらばらである。

ことです。それなのに、

* 言語を習得するために必要な「経路=回路=道筋」が、ヒトに共通して備わっている。

らしいのです。

* ヒトであればどの人種や民族の赤ちゃんであっても、ある言語を用いてある年齢まで育てると、その言語を母語として習得する。

ようなのです。

*外部（＝世界の諸言語）はばらばらなのに、内部（＝たぶん脳）には一本筋が通っている。

という感じです。これが不思議でなりません。



*翻訳とは、「ばらばら」を「一本の筋」を頼りに「つなげる＝こじつける」ことである。

と言えそうです。

うる覚えで恐縮ですが、ヒトの言語の「多様性＝ばらばらぶり」の一つに、

*膠着語（こうちゃくご）、屈折語、孤立語という分け方

があるそうです。

簡単な例を挙げます。

*「わたしはあなたを愛している。」

における、

*「は」「を」みたいなものが、語と語を接着剤のようにつないでいるのが、膠着語。日本語、朝鮮語、モンゴル語、トルコ語、フィンランド語、ハンガリー語、タミル語、スワヒリ語など。

であり、

*「I love you.」

における、

*「I, my, me, mine」「love, loves, loved, loving」「you, your, you, yours」みたいに語を「屈折＝要するに変化」させて文を作るのが、屈折語。英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、アラビア語など。

であり、

* 「我愛你。」

におけるように、

* 「我」「愛」「你」は孤立していて変化せず、その語順で文の意味が変わるのが、孤立語。中国語、チベット語、ベトナム語、ラオス語、タイ語、マレー語、サモア語など。

だと記憶しています。間違っていたら、ごめんなさい。「正しい」ことをお知りになりたい方は、どうかお勉強なさってください。

いずれにせよ、不思議です。どうして、言語にそんな違いがあるのでしょうか。また、どうして、

* 「わたしはあなたを愛している。」 = 「 I love you. 」 = 「我愛你。」

という具合に翻訳できるのでしょうか。



ここで、

* ほらほら、言語が違ってても、翻訳は可能じゃないか。

と、おっしゃる方がいらっしゃっても不思議ではありません。でも、事はそれほど単純ではなさそうなのです。

上で挙げた3つの例は、日本語と英語と中国語の書き言葉としての「センテンス＝文」でした。

ふつう、(1)「ちゃんとしたセンテンス」や、(2)「ほぼちゃんとしたセンテンス」や、(3)「ちゃんとしていないセンテンス」や、(4)「めちゃくちゃちゃんとしていないセンテンス」を、ヒトは話し言葉として発したり、書き言葉として記述します。

日本語で言えば、

(1) 「わたしはあなたを愛している。」

(2) 「わたし、あなたが好き。」「あなたのこと、愛してる。」

(3) 「愛してる。」「好きです。」「好きだよ。」「好きやねん。」「好き。」

(4)「あのう……。」、「えーっと、ねえー。」、「はあ、はあ。」、「(ちゅうーっ)【擬声語です】」、「(がばっ)【擬態語です】」

というところでしょうか。こんな具合に、(1)を除いた形で用いられているのが、現実ではないでしょうか。

もちろん、これは日本語の話です。英語の「I love you.」だと、一応、そのままの形を保ちつつ、発声の仕方によって、(2)や(3)や(4)になり得る気がします。

今思い出しましたが、米国のある映画で、自分を捨てて去っていく男性に対し女性が、

* 「I love you.」

と叫ぶ場面がありました。その時の、字幕が

* 「捨てないで！」か「行かないで！」

だったような記憶があります。確かに、あのシーンでは、

* 「わたし、あなたが好きー！」

も、

* 「好きよー！」

も、そぐわないと思います。



要するに、言葉は、

* 発信される、および受信されるさいの外的なTPO

や、

* 発信者、そして受信者の、その時の気分や内なる事情

によって、「左右される＝揺れる＝ブレる＝不安定である＝でたらめである＝恣意的であ

る＝テキトーである＝どうにでも取れる＝どのようにも観測できる」と言えそうです。

言葉に「まわりつく＝こびりつく」、そうした要素は、翻訳不可能とも言えますし、器用な人ならそれを丹念にくみ取って、もっともらしく訳すだろうという意味では翻訳可能と言えるでしょう。

ただし、すごく器用な「名訳者＝迷訳者＝迷役者」がもっともらしく訳した場合には、「意識」、「訳しすぎ」、「超訳」とか、ひいては「誤訳」だのといった「クレームがつく＝非難される＝悪態をつかれる」ことがあります。



上で挙げた例は、

* 「文＝センテンス」

でした。

センテンスを構成している

* 単語

のレベルで考えてみると、これまた実にごちゃごちゃしていて、「翻訳は可能だ」なんて、とてもじゃないけど思えないのです。

たとえば、

* うみ・海（・濃）【ほぼ「umi」という発音になります。】

* sea（・see）【ほぼ「スィー」みたいな発音になりますね。】

* mer（・mère）【これはフランス語ですが、ほぼ「メール」みたいな発音になります。ちなみに mère は「母」という意味の名詞でもあり、「純粋な」という意味の形容詞でもあります。】

「うみ・海」の語義を国語辞典で調べ、sea を大きめの英和辞典で引き、mer にどんな意味や用法があるかを仏和辞典で確認してみるとおもしろいです。

海は海だろ、日本でも、アメリカでも、ニュージーランドでも、インドでも、フラン

スでも、カナダでも、タヒチでも同じじゃん。

といった単純な話ではないみたいです。

*言語というレベルでも、海は「海」ではない

し、

*言語を用いる各人という個人的なレベルでも、海は「海」ではない

し、また、

*同じ人でも、刻々と海は「海1」「海2」「海3」……という具合に「ズレて=ブレて=移り変わって」いく

のではないのでしょうか。

簡単な例を挙げますと、さきほどの

*うみ・海（・濃）

* sea（・see）

* mer（・mère）

みたいに、同音の語が、まるでノイズのように「海」を「侵して=犯して=冒して」くるのです。

複雑な例を挙げますと、たとえば、この駄文を書いている者の個人的な「印象=イメージ」では、

*うみ・海（・濃・産み・生み・うに・グミ・怖い・臭い・気持ち悪い・世界地図・青……）

という具合に、さまざまなノイズがまとわりついていたり、頭に浮かんだりします。

自己分析してみます。

海から隔たった環境で育った。初めて海に近づいた時にその臭いに吐き気を催した。海で水浴びをしていて溺れかけたことがある。海と縁がないために海がさまざまな色を

持つことを体感する機会がなかった。部屋の壁に貼られた世界地図の青の部分だけで海を考えていた。

「海」に相当するフランス語が「mer」であり、「mere（母）」と同音だと知ったとき、「産み＝生み」を連想し、それが頭を離れない。中途難聴者なので、「うみ」が「うに」や「グミ」に聞こえることがある。水浴びは別として、今でも泳ぐことができず、プール、大浴場、川、池、沼、海など多量の水がある場所が怖い。

そんな幼いころから現在に至る体験があって、

*個人的な「海」のイメージ

ができ上がったのではないかと想像しています。このイメージを全く同じ形で共有しているヒトは、日本にも、世界にもいないと思います。

人生いろいろ。ヒトそれぞれです。多数のヒトたちが共同の幻想をいだくなんて、それこそ幻想です。私的＝詩的幻想です。



話は飛びますが、

シソーカとか言われている吉本なんかさんが、言語の発生にからめて、かつて「うみ」についてお書きになっていたらしいのですが、すごく「単純な＝ずさんな＝テキトーな＝能天気な」お話だったと、また聞きをした記憶があります。

その吉本なんかさんのシソーって、ひょっとして「でまかせしゅぎ」と近いものなのではないかと思っています。よく知らないというか、ほぼ全然知らないヒトなのですが、親近感を覚えます。

それはさておき、みなさんにお訪ねしたいのですが、

あなたにとっての「海」って、どんなものですか？

*他人に伝えられるものでも、分かってもらえるものでもない。

そんな気がしませんか。



以上のように考えていますので、

* 「言い換える＝置き換える＝伝える＝知らせる＝言葉にする＝何かの代わりに何か以外のものを用いる」

という意味での

* 「翻訳」

は、

* 不可能

だというほうに傾いています。これを「翻訳」すると、

* 異言語間の翻訳は大いなる妥協でしかない。

とか、

* 個人レベルで、ヒトとヒトとは分かり合えない。

となります（※「翻訳」は不可能だという意味のことを書いた後に、「翻訳」をやっている。これが、「でまかせしゅぎ」です。どうぞ、よろしく）。



ところで、

* 世界一のベストセラーは、バイブル＝聖書だ。

と聞いたことがあります。実際、あれほど多数の言語に翻訳された書物はないのではないのでしょうか。しかも、

* 何語で書かれて＝訳されていても聖典だ。

ということらしいのです。

* 聖典としての翻訳を絶対に認めないクルアーン（コーラン）

とは、考え方が対照的ですね。

で、バイブルですが、たとえば砂漠やらくだや天使は、それに相当する言葉やものがない言語では、どう訳されているのでしょうか。疑問です。きわめてテキトーな＝でまかせしゅぎ的な匂いがします。



それで思い出しましたが、

*タヒチ島では、わけあって、フランス語が広く話されているようですが、雪や四季に当たる語をタヒチの人たちは日常生活で使うことがあるのでしょうか。

先の戦争中に、わけあって、南太平洋の島々で日本語で教育を受けた子どもたちがたくさんいたらしいのですが、雪や四季に当たる語をどのように受け入れたのでしょうか。



今回も、前置きと余談ばかりになってしまいました。

*日本語という「枠＝限界」の中での「イメージ・意味・表象・代理・でたらめ・恣意的なもの」としての、「わかる」

についての「考察＝与太話＝でまかせ」は、次回にこそ行いたいと思います。

09.12.06 わかるという枠

◆わかるという枠

2009-12-06 14:54:52 | でまかせ

この数日間、前置きが長くなって本題に入れられない事態が続いていましたので、今回はのっけから、資料のコピーペーストをします。資料とは、当ブログの親サイトである「う

つせみのうつお」という過去の記事の「倉庫＝お墓」です。【注：「うつせみのうつお」というサイトは削除・閉鎖して、現在はありません。みなさんがお読みになっているこのエッセイ集が、新しい「うつせみのうつお」になりつつあります。】



* 「わかる」という日本語を「枠＝制約＝限界」として考えてみる。

ことから始めましょう。なぜ「枠＝制約＝限界」なのかというと、国語辞典を引くと分かるように、

* 「語義＝意味」が「限定されている。

からです。一方、

* 「枠＝制約＝限界」は、「可能性＝広がり＝望み」でもある。

とも言えます。

* ネガティブはポジティブであり、ポジティブはネガティブである。

という具合に、両者は裏腹の関係にあるのが普通です。要するに、どう見るかの違いです。



「わかる」というひらがなで書かれた大和言葉系の語に、

* 送り仮名を付ける

と、その意味がいわば

* 分光

されます。分光とは、光をスペクトルに分けるという科学の分野で行われる作業です。もちろん、ここでは比喻です。

* 「わかる」にどんな「意味＝語義」があるかを体感する。

のに役立ちます。

* 「わかる」 = 「分かる」 = 「別る」 = 「解る」 = 「判る」

どうですか？ 何となく、少しだけ、分かったような気になりませんか？

* 漢字に助けられて、意味が分かれていることが分かる

のです。おもしろいですね。個人的には、こういうことが大好きです。ただし、表記の「正しさ」は無視しましょう。表記に「正しさ」なんてありません。「何となく＝結果的に＝一時的に」そうなっているだけです。



次に、上で用いた漢字に注目してみましょう。

* 「分」⇒ わける、バラバラにする、わきまえる、おのれを知る、わけて配る、デリバリー、というイメージ。たとえば、「分別（ぶんべつ）」「分解」「分離」「分裂」「野分（のわけ）」「分水嶺」「分析」「微分」「通分」「分類」「分家」「部分」「五分五分」「春分」「秋分」「身分」「分際」「区分」「分割」「分配」「分譲」「分担」……のように使われる。

* 「別」⇒ わかれる、バイバイ、さよなら、ちよっぴりさみしい、離れる、他とは違う、ゴーイング・マイウェイ、ああ何と薄情な、わかる、というイメージ。たとえば、「別離」「死別」「別居」「送別」「餞別」「特別」「格別」「別格」「区別」「分別（ぶんべつ）」「判別」「大別」「差別」「千差万別」「識別」「鑑別」「別荘」「別個」「別記」「個別」……のように使われる。

* 「解」⇒ とく、ほぐす、バラバラ、わかる、帯なんかをほどく、よかったね、ゆるゆる、自由にしてやる、バイバイ、余計なものを取り除く、脱がしちゃう、説明する、謎をとく、なっとく、わかる、どれどれ見せてごらん、なるほど、やっぱり、そうだったのか、というイメージ。たとえば、「解体」「分解」「解剖」「和解」「溶解」「融解」「解放」「解禁」「解散」「解雇」「解毒」「解熱」「解消」「解除」「解決」「理解」「誤解」「難解」「不可解」「氷解」「解明」「読解」「明解」「詳解」「図解」「解釈」「見解」「解説」「解析」「解答」……のように使われる。

* 「判」⇒ わかる、ガッテン、なるほど、われる、明らかになる、白黒をつける、暴露される、さばく、けちをつける、ポンと押す、印をつける、というイメージ。たとえば、「判断」「判別」「判定」「判明」「判読」「判決」「裁判」「判事」「公判」「審判」「判例」「批判」「談判」「評判」「判子」「血判」……のように使われる。

以上は、手元にある複数の漢和辞典を調べながら行った「素人のやっつけ仕事＝ブリコラージュ＝一銭にもならない内職」です。詳しいことがお知りになりたい方は、どうかお勉強なさってください。



上のように見てくると、「わかる」がわかってきます。でも、「わかる」はあくまでも「わかる」です。日本語の一つの「言葉＝語」です。このことを忘れないようにしましょう。

* 「わかる」は日本語の一つだ。

というのは、すごく当たり前に思えますが、すごく忘れやすいことでもあります。日本語が母語だと、空気みたいに感じてしまい、その空気存在を忘れてしまうのに似ています。でも、空気があること、空気のお世話になって「生きている＝息している」ことを忘れてはなりません。

* 「わかる」は日本語の一つだ。

を体感するためには、

* 「わかる」をズラしてみる。

方法があります。

* いわゆる「類語＝類義語」を探してみる。

のです。上のリストにもありましたね。たとえば、

* 分析する・分類する・区別する・判別する・識別する・解決する・理解する・解明する・
図解する・解釈する・読解する・解説する・判断する・判定する・判明する・判読する

なんて、いかにも「わかる」っぽい気がしませんか？ 個人的には

* 理解する

が、いちばんピンときます。



* 「わかる」をズラしてみる。

という意味は、以上のような作業をさします。でも、

*ズラす

のは、比較的簡単ですが、

*ズレ=違い=差=差異=際・きわ=間・あい・あいだ・あわい=隔たり=分かれ目=境い目=境界線=辺境=縁=ふちっこ=枠

について考えようとする、ややこしそうな感じがしませんか。

実は、今、

* 「ズレ」という言葉をズラす。

作業をしてみました。こういう、込み入ったことが好きなんです。部屋でひとりでぼけーっとしている時とか、眠りに入る前なんかによくやっています。

こういう考えごとをしながら、「永眠できたら=なくなることができたら=きえることができたなら」最高なんですけど。



話を戻します。

* 「わかる」と「理解する」の「ズレ=違い」は何か？

くらいに、簡単なフレーズでも、それに答えようとする、思わず「うーむ」とうなってしまう。

ややこしいですね。なぜ、ややこしいのでしょうか。

きっと

* 「枠」に突き当たっている。

からだと思います。

その

*「枠」

というのは、さきほどの、

*ズレ=違い=差=差異=際・さわ=間・あい・あいだ・あわい=隔たり=分かれ目=境い目=境界線=辺境=縁=ふちっこ=枠

という一連の「言葉=語=イメージ・意味・表象・代理・でたらめ・恣意的なもの」の総称だと考えてください。



*ヒトは、枠に「とらわれ=はめられ=しがみつき=おさまり=入り込み=寄りかかり=支えられ=組み込まれ」ている。

のが、常態です。そうしなければ、ヒトとして生きていけないという意味です。ほかの生物も、枠の中で生きています。それは

*環境に自らを合わせる。

という生物学的レベルの話だと思われまます。

*ヒトは、ほかの生物の生態とはズレて生息している。

あるいは、

*ヒトという生物=生体は、ほかの生物とはズレている。

または、

*ヒトの脳とその機能は、ほかの生物とはズレている。

ようですから、話はかなりややこしくなります。個人的に、特に注目しているのは、

*ヒトは、「言葉=語=言語」を始めとする、さまざまな「イメージ・意味・表象・代理・でたらめ・恣意的なもの」という枠の中で生きている。

らしいという点です。長いフレーズなので、切りつめましょう。

*ヒトは、表象＝代理という枠の中で生きている。



話を、

*「わかる」という枠

に戻します。さきほど「わかる」の類義語として、

*分析する・分類する・区別する・判別する・識別する・解決する・理解する・解明する・
図解する・解釈する・読解する・解説する・判断する・判定する・判明する・判読する

を挙げました。ほかに、どんなものがあるでしょう。できれば大和言葉系の言葉で「わかる」と重なる部分の多いものを知りたいです。

類語辞典を持っていなくても、複数の国語辞典で「わかる」を引くと、「わかる」とほぼ同じような意味の言葉が出てきます。それを利用してみました。

*わかる・はっきりする・あきらかになる・さとり・じぶんのものにする・しる・みとめる・
みさだめる・つかむ・とらえる・なそがきえる・わきまえる・かんじとる・さぐって
しる・うかがいしる・うなづく・ききいれる・おもいがつうじる・あじわう

以上のような言葉が目につきました。なるほど、という感じです。「わかる」と部分的に「重なる＝似ている＝かぶる」気がします。



今回は、さらに違った視点から、

*「わかる」という枠

に、無理を承知で揺さぶりをかけてみたいと思います。

09.12.07 わかるはわからない

◆わかるはわからない

2009-12-07 11:14:30 | でまかせ

今回は、これまでとは異なった視点から、

*「わかる」という枠

に、揺さぶりをかけてみます。



気分を変えて、複数の和英辞典で、「分かる」と「理解する」を引いてみましょう。

思い出しました。これって、前にやったことがあります。「わかるはわかるか」2009-12-04 という記事を書く時にやった作業です。

で、その記事を覗いてみたところ、使える部分が多そうなので、英語の単語に関する記述も含めてほかの箇所もそのまま、以下にコピーペーストしちゃいます。



*わかる・しる・さとる・とらえる・まなぶ・ならう・みにつける.....

*理解する・了解する・知覚する・察知する・認識する・認知する・会得する・学習する・習得する.....

*【以下は日本で広く用いられている手話です。】右手を開き胸の上に当てそのまま下ろし、胸のつかえが下りるような動作をする（「分かる」や「知る」に相当する）・口に何かを放り込み、飲み込むような動作をする（「理解・理解する」に相当する）・右手の指でこめかみ辺りをさす（「感じる・覚える」に相当する）・右手を開いて上から側頭部へと下ろし、握った状態でくっつける（「覚える・習う」に相当する）・右手の人差し指を正

面のやや上方から顔に向けて2度ほど指す（「教わる・習う」に相当する・両手を顔面の前で並べて2度ほど軽く振り、本を読む動作をする（「勉強する」に相当する）【※「右手」は「利き手」と置き換えてもよさそうです。】

* understand、appreciate、know、see、tell、get、find、recognize、comprehend、learn
.....

* 【以下は米国で広く用いられている手話です。】 自分に向けて握った右手を軽く側頭部につけ、人差し指を2度立てる（understand に相当する）・自分に向けて開いた右手を側頭部を持っていき、何度か軽く叩く（know に相当する）・左手を相手に向けて開き、右手の指で側頭部をさし、その指を開いた左手のひらにくっつける（recognize に相当する）・右手を握り顔の斜め下に持って行き、握りこぶしを少し挙げて人差し指を突き出す（comprehend に相当する）・左手を胸の下あたりで上向きに開き、右手を開いて左手のひらから何かをつかみ取り額へ持って行きくっつける動作をする（learn に相当する）【※「右手」は「利き手」と置き換えてもよさそうです。】

以上が引用です。



さきほどやろうとした作業を再開します。「分かる」と「理解する」に相当する英語の単語の語源を知りたかったのです。上記の英単語を、大きめの英和辞典を引いてみます。

* understand : 古英語で「...の間に立つ」が原義、(...の下に) + (立つ) →あることの近くにいる →あることについて知識を持つ【ジーニアス英和大辞典より】

* appreciate : 後期ラテン語で、(...に) + (価値をつける)【ジーニアス英和大辞典より】; 中世ラテン語で「尊重された、評価された」、後期ラテン語で「評価する」の過去分詞【ランダムハウス英和大辞典より】

* know : 古英語で「知る、知っている」、can は同根語【ジーニアス英和大辞典より】

* see : 古英語で「見る」【ジーニアス英和大辞典より】; ラテン語の「従う、追う」と関係があり、原義は「眼で追う」【ランダムハウス英和大辞典より】

* tell : 古英語で「数える、語る」【ジーニアス英和大辞典より】; 中世英語・古英語で「物語る」「数える」【ランダムハウス英和大辞典より】

* get : 古ノルド語で「手に入れる」【ジーニアス英和大辞典より】; 古ノルド語で「得

る」「生じさせる」【ランダムハウス英和大辞典より】

* find : 古英語で「見いだす」【ジーニアス英和大辞典より】

* recognize : ラテン語で「認める、思い出す」、(再び) + (知る、学ぶ)【ジーニアス英和大辞典より】

* comprehend : ラテン語で「手に入れる、理解する」、(完全に) + (つかむ)【ジーニアス英和大辞典より】

* learn : 古英語で「人の歩む道を導く」または「足跡をたどり経験を積む」が原義【ジーニアス英和大辞典より】; 中世英語・古英語「学ぶ、読む、思案する」、「拾い集める」。ドイツ語の「読む」と同語源【ランダムハウス英和大辞典より】

こんな感じです。なるほど、と感動してしまいました。辞書はすごいです。おそらく哲学書よりスリリングです。



* 「わかる」という枠を揺さぶる

のに、英語は適した言語だと思います。

* 大和言葉系と漢語系の二重構造のある日本語

と似ています。

* 英語の場合には、ゲルマン語系とラテン語系の二重構造がある。

そうです。つまり、

* ヨーロッパの言語における大きな二つの流れ

の両方を汲んでいる、と言えます。すごく大雑把な言い方で響響（ひんしゆく）を買うのを覚悟で申しますと、

* 英語は、フランス語（あるいはラテン系諸語）とドイツ語（あるいはゲルマン系諸語）を足して2で割ったような言語

または、

*英語は、フランス語（あるいはラテン系諸語）とドイツ語あるいはゲルマン系諸語）の中間に位置する言語

です。だから、

*英語には、日本語のように「語彙（ごい）が豊富＝単語の数がものすごく多い」

です。一方、フランス語なんて、日本語や英語に比べると単語の数はすごく少ないです。

というわけで、「わかる」に相当する複数の英単語の「意味＝イメージ＝語義」を調べれば、

*「わかる」のごちゃごちゃぐちゃぐちゃ具合を知る

のに、

*一石二鳥

だと言えます。



別のやり方で、さらに、

*「わかる」という枠

に、揺さぶりをかけてみましょう。前回、

*「わかる」＝「分かる」＝「別る」＝「解る」＝「判る」

というふうに、かたかなで表記された大和言葉の「わかる」に漢字を利用して、

*送り仮名を付ける

という作業をし、次に「分」＝「別」＝「解」＝「判」の4つの漢字の「イメージ＝意味＝語義」と用法を見てみました。今度は、漢和辞典を引いて、

*解字（かいじ）（＝漢字の成り立ちを分析すること）

という作業をしましょう。学研の「漢字源」と、旺文社の「新選漢和辞典」を参照して必要な個所だけを抜き出し、素人なりにまとめてみます。「正しいこと」をお望みの方は、どうかお勉強なさってください。



*分：「八（左右にわけ）＋刀」。「二つに切り分ける」という意味。「半」「班」（わけ）・「判」（わけ）・「八」（2で割れる数）・別とも縁が近い。

*別：冎（骨と肉をわけ）＋刀。「分解する」という意味。関節を刀でばらばらに分解するイメージ。

*解：「角＋刀＋牛」で、「刀でからだやつのをばらばらに分解する」という意味。「刀を用いて牛の肢体を解剖する。さきわけ」という意味。

*判：「牛＋八（わけ）。「牛のからだを両方にきりわけ」という意味。のちに「可否や白黒を区別し見わけ」の意味となった。「半」は「牛＋八」で、「牛」は「物（『牛』と『勿』の合字）」の代表で、「八」は「両方にわけ」という意味。【牛が物一般を表す代表だというのは、おもしろい発想ですね。それとも、これって誤解？】

以上の解字を見ていると、とにかく

*「わかる」は「わけ」

ということみたいです。何か血生臭いイメージをいただきます。「腑分け＝解剖」とか、スーパーなんかで時々やっているマグロの解体ショーを連想しちゃいませんか。



次に、さきほど挙げた

*わかる・しる・さとり・とらえる・まなぶ・ならう・みにつける……

という一連の言葉を見てみましょう。広辞苑を引いてまとめます。

*しる・知る・領る：「領る」は、「ある土地にあるものすべてを自分のものにする」の意味。要するに、「しる＝汁＝おしっこ」をかけたか、唾を付けて「これ、わたのものやでー」と宣言すること。なわばり行動やマーキングと同じ。

*さとり・悟る：さのようにとる→そのようにとる→そうかと納得する。【※これは、でまかせです。広辞苑に語源の説明がなかったので、でまかせをかましました。】

*とらえる・捕らえる・捉える：とりあう。取り敢う。取り合う。すっかり取る。だきしめる。これはわたしのものであると手で握って、誰にもあげないという感じ。とらえどころがないの逆。【※これも、でまかせです。】

*まなぶ・学ぶ・まねる・真似る：【※わかりやすいですね。】

*ならう・習う・慣らう・倣う：【※「習うより慣れよ」って言い方がありますよね。そうか、「なれる」も調べよう。】

*なれる・慣れる・馴れる・狎れる・熟れる：とにかく経験しろ。触れてみろ。場数をこなせ。試行錯誤しろ。そのうちできるさ、やってみろ。なじんでくる＝なれてしたしくなってくる。あれ、熟れちゃった。熟達しちゃった。

*みにつける・身に付ける・身に着ける：【※これも、わかりやすいですね。】

何だか、かなりテキトーになってきました。いい感じです。



このブログでやっていることを確認します。

*日本語という「枠＝限界」の中での「イメージ・意味・表象・代理・でたらめ・恣意的なもの」としての、「わかる」

についての「考察＝与太話＝でまかせ」です。

どうやら、軌道＝奇道からは外れていないもようです。ごちゃごちゃぐちゃぐちゃしてきました。



以上、「習うより慣れろ」式にいろいろやってきましたが、

*「わかる」という枠を揺さぶる

という「目的＝戦略＝企て＝いたずら＝お遊び＝おふざけ＝実は本気＝マジ」は、ある程度達成されたのではないのでしょうか。

*わかるがわかってきた

ではなく、

*わかるがわけわからなくなってきた=分かるが「訳=分け」分からなくなってきた

とお感じいただければ、本望です。

*「わかる」は「わからない」のがほんとう

なのです。「わかった」とお思いになったとすれば、おそらく錯覚です。失礼とは存じますが、思い違いをなさっているのでしょう。もっとも、これも、個人的な意見=でたらめ=でまかせですけど。

で、

*わかるはわからない

は二通りの意味に取れます。

1)「わかる」ということを「理解」することはできない。

2)「わかる」と「わからない」は同じことだ。

です。1)と2)の「違い=ズレ」が、お分かりになりますか？ これまでの経験から、

*「ズレ=違い=差=差異=際・きわ=間・あい・あいだ・あわい=隔たり=分かれ目=境い目=境界線=辺境=縁=ふちっこ=枠」には、深入りしないほうが賢明だ。

と思っています。どうでもいい。そう考えるのがいちばんです。でも、「イっちゃう=ヒトとしての一線を越えてしまう」のを覚悟で、いつか深入りしてみたい気持ちはあります。

*イっちゃって戻れなくなる。

かもしれません。ものすごく恐ろしい体験みたいです。



ちょっとだけ、イっちゃいましょう。たとえば、

*わかるはわかるわけない＝「わかる」は、「わかる」「わけない」＝「分かる」は、「分かる」「訳ない」＝「分かる」は、「分かる」「分けない」

とずらして、その「ズレ」を本気で考えてみるのです。心身ともに調子のいい時（※ビョーキの身ですが、それなりに調子がいいと感じる時があります）にやってみたいです。



話を戻します。

*わかるはわからない

は、

*「わかる」は「わからない」ように「できている＝なっている」

とも、言えそうです。それなのに、

*「わかる」は「わかる」

と思ひ込もうとするのがヒトなのです。ですから、

*「わかる」が「わかる」

と言うヒトがたくさんいても、全然おかしくはありません。

*当然

なのです。でも、こうした事態は、

*自然

ではありません。

*ヒトは自然に逆らって、うだつが上がらない尻尾のないおサルさんから「ヒト＝人間様」になった。

のですから、当然です。自然ではないけど「当然＝あたりまえ」です。

*「当然」は、ヒトに固有な属性だ。

と思われます。



*当然は必然に似ている。

とも言える気がします。

*当然は、「シナリオ＝筋＝筋道＝筋書き＝ストーリー＝物語＝フィクション＝作り話＝でたらめ」を「前提にしている＝暗に、つまり無意識に、あるいは故意に想定している」。

と思われます。

*自然には、「シナリオ＝筋＝筋道＝筋書き＝ストーリー＝物語＝フィクション＝作り話＝でたらめ」は存在しない。

と考えられます。

*圧倒的な偶然性が支配する場

だからです。

*「圧倒的な偶然性」には、「必然性＝整合性＝当然」も含まれている。

と言え、比喩を用いれば、

*ブラックホール

みたいな場なのです。何でも飲み込んでしまう。いったん、穴にはまったら決して戻って来れない。そんな感じでしょうか。

別の比喩で言うなら、

*当然が出来レースなら、自然は彷徨（ほうこう）だ

という感じですが。彷徨ですから、定まった方向はありません。ヒトは、翻弄（ほんろう）され、揺れ動き、千鳥足状態で、よろよろするしかありません。「どうやら、行き先は決まっているようだ。しめしめ」なんていう具合に、ヒトが安閑としていられるのは、自然ではなく当然の世界に生きているからです。

*「わかる」は、自然ではなく当然を「指向＝志向＝思考＝試行＝」する。

作業＝行為です。最近、

*量子

をめぐって、「これからは量子の時代だ」みたいなポピュラーサイエンス的言説が流通していますが、あれって典型的な出来レースです。目新しくも、衝撃的でもありません。

*ヒトはわかることしかわからない。

とか、

*ヒトには「わかる」ように「なっている＝できている」ことと、「わからない」ように「なっている＝できている」ことがある。

感じがします。



ちなみに、こうした、

*「〇〇する」あるいは「〇〇できる」ように「なっていること＝できていること」と、「なっていないこと＝できていないこと」

を、このブログでは、

*「経路」

と呼ぶこともあります。いずれにせよ、

量子をめぐる「言説＝物語＝フィクション＝戯言＝でたらめ」は、もちろん、わかるようになっていることしかありません。量子を、ヒト自らが自らに合わせて作った計器の力を借りて観測したところで、ヒトは自らの知覚（知覚機能）を通して認識するしかできません。

つまり、

*代理=表象としてしか、とらえられない

という意味です。これは量子という自然科学の領域の話にとどまらず、「悟り」、「覚醒」、「解脱」、「幻想」、「幻覚」、「透視」、「預言」と呼ばれる「言説=物語=フィクション=戯言=でたらめ」についても当てはまりそうです。



*自然=圧倒的な偶然性が支配する場=比喩的に言えばブラックホール

は、本来なら、こんな言葉遊びなどで語ることはできない「場」なのです。でも、「それをいっちゃおしまい」なので、ヒトの端くれである、この駄文を書いているアホめは、やむを得ず、とりあえず、あえて、

*ことわり=事割り=理=断りする

している次第です。



でまかせしゆぎに、結論とかまとめとかは、そぐわないのですが、言葉をつづっている以上、次回には、とりあえず、やむを得ず、とりあえず、あえて、「まとめもどきのがんもどき」を致したいと思います。

09.12.08 わかるはプロセス

◆わかるはプロセス

2009-12-08 13:12:31 | でまかせ

結論から書きます。

まず、記号バージョンです。

*大→小

つまり、

*●→・

あるいは、

*全体→部分

または、

*A→B、C、D、E、F……

です。

次に、「ことわり＝事割り＝理＝断り」バージョンです。

*わかる・つかむ・はこぶ・つくる・ゆれる・すてる・かたる

です。



以上が、

*「でたらめ」の一つである「わかる」を他の「でたらめ」に「翻訳」した結果

だと、とりあえず言えそうです。

説明を加えます。

ここでいう

*「でたらめ」とは、「表象一般」

のことです。このブログでは、「表象」という言葉で、

*狭義の言葉である話し言葉と書き言葉を始め、手話、ホームサイン（※たとえば家庭内で使われている手話）、記号、符号、信号、アイコン、点字、指字、仕草、表情、合図、身振り言語＝ボディー・ランゲージ、音声、絵、映像（静止画像・動画）、視覚芸術、音楽など

を指します。

*「表象」

は、

*何かの代わりに何か以外のものを用いる。

という、

*代理の仕組み

を基本としています。したがって、「でたらめ＝不正確＝何かそのものではない＝代理でしかない」ということになります。

また、

*「翻訳」

とは、

*「言い換える＝置き換える＝伝える＝知らせる＝言葉にする＝何かの代わりに何か以外のものを用いる」

ほどの意味です。



このところ、このブログでやっていた作業をまとめると以上ようになります。

とりあえず、まとめましたが、

*「わかる」が「わかった」「わけ」ではない。

ことに、注目してください。

* 「わかる」を「わけた」。

とは、言えそうです。簡単に言えば、

* 「わかる」をほかの表象に置き換えた。

だけです。それ以上でもそれ以下でもありません。

* 「わかる」とは脳内での出来事だ。

とも言えそうです。

* 自らの脳内の出来事が「わかる」

ことは、

* ヒトの脳には荷が重過ぎる

でしょう。このブログでは、

* ヒトには「わかる」ように「なっている＝できている」ことと、「わからない」ように「なっている＝できている」ことがある。

という前提で「話＝でまかせ＝でたらめ＝与太話」を進めています。

* 自らの脳内の出来事を「わかる」

ことは、後者の

* ヒトには「わからない」ように「なっている＝できている」

ことだという気がします。

ただし、

* ことわり＝事割り＝理＝断りする

つまり、

*言葉や記号という「表象＝代理＝でたらめ」に置き換える

ことならできます。それが、冒頭で挙げた

*記号バージョン

と、

*「ことわり＝事割り＝理＝断り」バージョン

です。



このブログを途中からお読みになっている方のために、状況の説明をさせてください。以下に、以前の記事「わかるはわかるか」2009-12-04 から、必要な部分を引用します。

調べ、考えたところで、たぶん、いや、きっと分からないだろうという気がします。でも、取り組んでみようと思います。

*楽しいのは、結果でなくてプロセスですから。

比喩的に言うなら、ドライブ（車での旅行ではなく、あくまでも運転することです）が楽しいのは、運転というプロセスであり、行き先ではないのです。ドライブが終れば、「あーあ、疲れた」とか「あー、楽しかった（※過去形であることに注意してください）」で終るのがふつうでしょう。

このブログでは、そもそも

*正解のある問題

に取り組んでいるわけではありません。なにしろ、

*「わかる」は「でたらめ」だ。

から出発しているのです。それを前提にしているのです。出発点と終着点は、どうでもいいと言えます。

いささか大仰で構えた言い方になりますが、

*ヒトにおける、知の醍醐味は、きっかけや終点ではなく過程である。

と思っています。だからこそ、

*ヒトの知は、「でたらめ＝でまかせ＝作りごと＝うそ」であって構わない。

とも思います。なにしろ、ヒトが相手にしているのは、表象＝代理ですもの。それが身分相応ではないでしょうか。

以上が引用です。



そんなわけですので、上記の結論やまとめもどきの文章よりは、そこに至るまでの、

*ああでもないこうでもない、ああでもありこうでもある

みたいなくだくだしたプロセスを、お時間があれば、ぜひ再読していただきたいのです。

*わかるとは行為である。

という点を強調したいと思っています。

ブログの場合だと、

*ディスプレイ上の「文字＝活字」を「読む」

という行為です。読んでいると、

*頭および体に何らかの「動き＝変化＝揺らぎ＝熱の発生」

が起きます。進行中の行為です。それです。それが「わかる」です。やむを得ず「わかる」という「言葉＝表象＝代理＝でたらめ」を用いていますが、あくまでも「行為＝動作」、あるいは「体内で生じる動き・変化」です。



比喻を出しましょう。

* 自転車に初めて乗る。

とか

* 初めて泳ぐ。

といった体験＝行為＝動作は、

* 記号バージョン

と、

* 「ことわり＝事割り＝理＝断り」バージョン

とは、基本的には無縁です。もちろん、図解や説明の書かれたハウツー本はあります。でも、そうした本なしに、自転車に乗ったり、泳げるようになるのがふつうでしょう。

* 暗黙知

という「怪しげな＝小賢しげな＝うさんくさい」言葉がありますが、言葉で知っているだけです。ここでは無視します。身分相応に、あくまでも、でまかせに徹します。



もう一つ強調したいのは、

* わかるはプロセスであって結果ではない。

という点です。日本語では、よく、

* 「わかった！」

と過去形＝完了形で言いますね。あれはヒトとしての「見栄＝驕（おご）り」、あるいは「勘違い＝うかつさ」だと思えます。

* 「わかった」＝過去・完了＝おしまい＝結果が出た＝結論＝「これで決まりだ」＝一件落着＝「めでたしめでたし」

という感じですね。

*「わかる」＝「わかりつつある」＝「わかるのじっこうちゅう」＝「わかるようでわからないけど一応わかるかな？」＝暫定＝臨時の措置＝中途半端＝進行形＝「○○かもね、たぶん」＝「次回に続く」＝「To be continued.」

というのが、正確な状況はないでしょうか。

現に、「わかった」はずのことが、どんどん修正されていったり、「うそー！」という感じで想定外の展開をたどることは、日常的に起こっています。また、各ヒトのそれまでの人生において、「わかった」はずのことが「はずれる＝ちょんぼとなる」ことは頻繁に起こっていて、誰もがそうした事態を何度も体験してきたはずです。

*「わかった」は早とちり

です。それくらい「でたらめ」なことだと覚悟しておくのが賢明かと思われれます。安心して、「わかった」なんて決めつけてはいけません。

ただし、「わかりつつある」は言いにくいので、「わかった」とか「わかる」という言い方＝時制を用いているだけです。言葉の綾とも言えそうです。

*ヒトは言葉にもてあそばれるしかない。

の一例みたいです。

その意味では、量子についても、脳についても、DNAについても、

*「わかった」(完了形)は、常に修正される運命にさらされている。

のです。「わかりつつある」(進行形)だけです。「わかる」(現在形＝断定)ようにはなっていないのです。つまり、

*永遠に「わからない」

ということです。

*「そういうのは、不可知論って言うんだよ」

なんて声が聞こえそうです。無視はしません。あざ笑いもしません。

* そうなんですか？ 勉強になりました。ありがとうございます。

とお礼を言います。皮肉ではありません。教えてくれたヒトにはお礼を言うのが礼儀だ
と思うからそうしているのです。というか、そう躰けられたので、そうしているのです。
ですから、条件反射みたいなものだと思います。



英語でも、例を挙げてみましょう。

元気よく、

* I've got it! = I got it! (※現在完了形や過去形が使われています)

と、うれしそうに叫ぶのではなく、

* I see. (※現在形ですね)

と、考え込んだような表情で=沈んだ表情で=浮かぬ顔で、つぶやく。そんな感じが「わ
かる」だと思うのですけど。



冒頭の記号バージョンだけを、ちょっと説明=「ことわり=事割り=理=断り」させ
てください。

* 大→小

つまり、

* ●→・

とは、「わかる」という行為が、

* 「大」=「●」=他者=何か=見えたり聞こえたり触れたり匂ったり味わうことがで
きるけれど、わけのわからないもの=見えず聞こえず触れられず匂わず味わえない、わけ
のわからないもの=自分の頭の中に浮かぶもの

を、

*「小」＝「・」＝「部分」＝「わけたり、つかんだり、はこんだり、ありもしないのにつくったり、ちからをかんじてゆれうごいたり、いらぬものをすてたり、ものかたったり、ごまかしたりする行為を通して頭と体でとらえること」

だという「感じ＝イメージ」です。ややこしいですね。うんと簡単に言えば、

*ちっちゃいから、馬鹿にして手玉に取れる

という「感じ＝イメージ」です。要するに、上から目線で馬鹿にするのです。そのうえで、「こんなもん、わかった」と自分に言い聞かせるのです。

一方、

*全体→部分

は、複数のヒトが1頭のゾウの部分に触れて「ゾウは○○のようなものだ」と語る話と似たイメージです。ここでの「全体」とは宇宙・世界というより、「何かの全体」という意味です。結局、ヒトは、「何かの全体」を把握することはできないと言えそうです。とらえることができるのは「何かの一部分」だけです。正確に言うと、『代理＝代替品＝まがいもの』である一部分」だけです。

また、

*A→B、C、D、E、F……

とは、「わかる」という行為が、

*「A」＝「大」＝「●」＝「全体」＝他者＝何か＝「見えたり聞こえたり触れたり匂ったり味わうことができるけれど、わけのわからないもの＝見えず聞かず触れられず匂わず味わえない、わけのわからないもの＝自分の頭の中に浮かぶもの」

を、

*「B、C、D、E、F……」という具合に、ほかの「A」＝「大」＝「●」＝「全体」＝他者＝何か＝「見えたり聞こえたり触れたり匂ったり味わうことができるけれど、わけのわからないもの＝見えず聞かず触れられず匂わず味わえない、わけのわからないもの＝自分の頭の中に浮かぶもの」

に、

*「小」＝「・」＝「わけたり、つかんだり、はこんだり、ありもしないのにつくったり、ちからをかんじてゆれうごいたり、いらぬものをすてたり、ものかたったり、ごまかしたりする行為を通して頭と体でとらえること」を通して、次々と置き換えていく

という「感じ＝イメージ」です。



*「大→小」、つまり「●→・」

も、

*全体→部分

も、

*A→B、C、D、E、F……

も、「知覚＝認識＝意識＝錯覚＝ごまかし」であるという点が、決定的に重要です。

うそなのです。でたらめなのです。思い込みなのです。



*「わかる・わかる・つかむ・はこぶ・つくる・ゆれる・すてる・かたる」は「わからない・わけない・つかめない・はこべない・つくれぬ・ゆれぬ・すてぬ・かたらない」と同時に起こる行為である。

という点も重要です。これを矛盾だと感じるのは、「言葉＝表象＝代理」という枠内にいるからです。致しかたない事態です。誠に遺憾に存じます。

また、

*「わかる」以前に、そもそも「きづかない」

とか、

*「わかる」と同時に、どんどん「わすれる」

という行為＝事態が起こっている点も忘れるわけにはいきません。



ややこしいですね。

比喩に頼りましょう。このブログの親ブログである「うつせみのうつお」(※左側のブックマークにリンクがあります)から、引用します。というか、あまりにもよく使い覚えてしまっている比喩なので、再現=再演します。

*ヒトは、せいぜい1台のテレビの1画面にしか注目することができない。

*ヒトは、地動説を頭で知っていても、体は天動説を信じている。

*ヒトは、テレビの映像が画素から成り立ち、ある視点から撮影された静止画像をコマ送りしたものであることと、その音声が再生された機械音であることを意識せずに、番組を「現実」として受け取る。

*ヒトは、自らが捏造した数学における微分というフィクションで、「方程式をグラフに描くと曲線になって、その曲線の微小な部分を拡大すると直線に見える」という、すり替えと錯覚をテーマにした小話を展開している。

ヒトにとって、「わかる」とは、今挙げた4例ほどに「でたらめ」なものなのです。矛盾だらけなのです。

それでも、その「でたらめ」は、月に仲間を送り込んで歩かせたり、地球の温度を徐々に上げるほどの精度は持ち合わせているのです。

あなどれません。この「でたらめぶり」を備えたヒトは、この惑星にとって超危険生物=地球破滅危惧種です。



今回は、「わかる」について考える過程で出てきた「杵」というイメージに、身をまかせてみる予定です。「杵」をめぐる、まさに、

*でまかせしゆぎをじっこう

してみたいと存じます。

09.12.09 3つの粹

◆ 3つの粹

2009-12-09 17:04:52 | でまかせ

「粹」ということについて、考えています。

このところ「わかる」について考えていたところ、しきりに「わく」という言葉＝イメージが気になって仕方なくなりました。



* でまかせしゅぎ

では、こういう時に

* 「分光」

という作業をします。もちろん、比喻です。

* 「わく」という音（おん）を、光に見立ててスペクトル（縞や帯みたいなもの）に「わける」

のです。別に難しいことはありません。馬鹿みたいなことです。では、やってみます。

* わく・粹・惑・分く・別く・沸く・湧く・涌く・わくわく

ねっ。馬鹿みたいでしょ。もったいぶって屁理屈をつけると

* 音（おん）の、多義性＝多層性を浮かび上がらせる。

とか、

*宇宙を支配する圧倒的な偶然性にまかせる。

とも言えます。

*さいころを振る

動作にも似ています。さいころを振ると、どの目が出るかは予想できません。その意味では、「かけ・賭け・掛け・宙ぶらりん・ばくち」でもあります。

ぶっちゃけた話が、

*だじゃれ＝でまかせ＝でたらめ＝むちゃくちゃ＝ごちゃごちゃ＝支離滅裂＝尻滅裂

です。



このブログでやっている、

*でまかせしゅぎ

は、

*言葉＝語も、言葉＝言語も、こじつけ＝でたらめ＝恣意（しい）的なものだ。

という前提に立っています。「正しい」や論理や整合性という、戯言＝作り話＝フィクション＝はくしょんには加担しません。ただし、「正確さ」にはこだわります。

*正確に、でまかせを言う。

という感じです。



「分光」のほかに、

*「ずらす」

という作業も、よくやります。

* 「枠」

をずらしてみます。あらかじめお断りしておきますが、「分光」と同じく馬鹿みたいな作業です。

* 枠 = ふちっこ = 縁 = 辺境 = 境界線 = 境目 = 分かれ目 = 隔たり = 間・あい・あいだ・あわい = 際・きわ = 差異 = 差 = 違い = ズレ

という具合です。ずらしたら、ズレが出てきました。こんなことも、よくあります。出来レースばいですね。

うんと簡単に、ずらすと

* 枠 = 限界

となります。



話を戻します。

* 「わかる」について考える

ということは、

* 母語である日本語という「枠 = 限界」の中で、思考し、記述する

と言えそうです。ただし、

* 思考において言語がどれほど大きな位置を占めているか

は知りません。言語だけでなく、

* 広義の表象

つまり、

*狭義の言葉である話し言葉と書き言葉を始め、手話、ホームサイン（※たとえば家庭内で使われている手話）、記号、符号、信号、アイコン、点字、指点字、仕草、表情、合図、身振り言語＝ボディー・ランゲージ、音声、絵、映像（静止画像・動画）、視覚芸術、音楽など

を総動員して、ヒトは思考をしているような気がします。さらに、そこに

*宇宙を支配する圧倒的な偶然性

が重なるような感じがします。

というか、そもそも、

*ヒトは表象に対して主導権を握っていない

言い換えると、

*ヒトと表象の主従関係は、表象が主でヒトが従だ

と思われれます。

このように、

*「言語＝表象＝枠＝限界」の中で、ヒトはもてあそばれるしかない

という事態が常態化していると考えています。



「枠＝限界」の「内部」を、「テリトリー＝なわばり」と呼んでみましょう。テリトリーは、居心地のいい場です。安心していられる。お母さんの懐（ふところ）というイメージでしょうか。

「昔は良かったなあ」という気持ちも、テリトリーの一種です。この感慨には、「自分がかつて輝いていた時期」つまり、単に「若かった時期」を懐かしむ心理が大きく働いているとも考えられます。

「〇〇の原点に戻る」、「本当の〇〇」、「純粋な〇〇」、「真の〇〇」、「本来の〇〇」といった紋切り型の言い方も、テリトリーを守ろうとする気持ちから発している感じがします。

その気持ちは分かりますが、いかがわしいフレーズだと思います。政治的なプロパガンダに利用される可能性が高いからです。不純な動機の餌食になりがちだという意味です。

きな臭い話はやめましょう。

ちなみに、今挙げた「内部」という意味での「テリトリー＝なわばり」の「外部」には、

*「敵がいる」

とヒトはふつう想像します。

やっぱり、きな臭くて物騒な気配がしてきました。抑うつ状態が悪化しそうな予兆がしてきました。

話を少しずらします。



ヒトは、各人がいろいろな「枠」にとらわれています。さきほど挙げた、「広義の表象」という考え方で説明ができそうです。また、別の観点から「枠」をとらえることも、可能かと思えます。

たとえば、

*個人として、および集団としての「枠」

が考えられます。

まず、

*集団レベルの「枠」

から検討してみましょう。

*家族、職場、職業、技能、学校、町内、所属する団体、宗教、自治体、地方、国家、母語など

といったところでしょうか。そうした組織内のルールや人間関係、ある職能や技能や言語を身に付けていることによる行動様式や価値観が、集団レベルの「枠」に当たります。

その中に、

*個人レベルの「枠」

があると単純化してみることもできそうです。

個人レベルの「枠」とは、

*あるヒトが生まれ、育ち、成長していく過程での、日常的な体験のすべて

だと言えます。当然、集団レベルの枠と重なります。生後間もなくある病気にかかったとか、初めて海を見たのが3歳の時だったとか、○年□月△日の夕食にハンバーグを食べたとか、日常的なささいな、あるいは重要な

*出来事や状況や事件の積み重ね

だとイメージしてください。



*個人レベルと集団レベルの枠は、外的な要因とか後天的な出来事に左右される

ものです。両者はからみ合って、かなりごちゃごちゃぐちゃぐちゃしていると思われま

す。
ここで問題にしたいというか、個人的に気になって仕方がないのは、以上のような「枠」ではなく、

*内的な「枠」

とでも言うべきものなのです。

「わかるはわからない」(2009-12-07)という記事から、以下に必要な箇所をコピーペーストしてみます。



*ヒトはわかることしかわからない。

とか、

*ヒトには「わかる」ように「なっている=できている」ことと、「わからない」ように「なっている=できている」ことがある。

感じがします。

ちなみに、こうした、

*「〇〇する」あるいは「〇〇できる」ように「なっていること=できていること」と、「なっていないこと=できていないこと」

を、このブログでは、

*「経路」

と呼ぶこともあります。



以上が引用部分です。

この

*「経路」という考え方=作り話=でまかせ

は、言語と関係がありそうです。正確なことは知りませんが、

*ヒトには、生後に言語を運用する能力・機能が先天的に備わっている。

という意味のことを、考えている=妄想している=思い込んでいる言語学者たちがいるらしいです。しかも、

*その能力・機能は、各言語に共通する=個別の言語の差異には左右されない普遍的なものである。

と想定しているようなのです。誤解があったら、ごめんなさい。もし、誤解であれば、こ

のブログでの考え方としてもいいかと思っています。

そんなことがあります。そんな気がします。「ありそう」とは、「うさんくさい=いかがわしい」とほぼ同じ意味です。例の、

*本能

という考え方=作り話=でまかせに似ていませんか？



*うだつの上がない尻尾のないおサルさんの脳内で「ズレ=狂い=壊れ」が生じて、ヒトとなった。

という意味の考え方=作り話=でまかせがあります。これも、「うさんくさい=いかがわしい」話です。いずれにせよ、

*本能が、「ズレ=狂い=壊れ」で「言語=表象」という体系を獲得した。

とするなら、本能と言語能力とはきょうだいみたいなものですから、分かりやすい考え方=作り話=でまかせだと思います。



*「わかる」という「枠」

について考えていた時に、

1)「わかる」という行為は、ヒトの端くれとしての知覚（知覚機能）・認識・意識・錯覚・想像・夢想・幻想という「枠=パターン=仕組み=メカニズム=ダイナミズム=情報+ノイズ」を免れることはできない。

2)「わかる」という行為は、先天的に備わっていて生後に発揮される、言語一般を運用し得る能力・機能という「枠=パターン=仕組み=メカニズム=ダイナミズム=経路」に沿っている。

3)「わかる」という行為は、母語である日本語の「枠=語義=用法=イメージ=ニュアンス」で考えざるを得ない。

4)「わかる」という行為は、個人レベルでのあらゆる体験（忘れたものも、覚えているものも含む）という「枠＝記憶＝情報」および「枠＝記憶・情報・想像・幻想に基づき意識的および無意識のうちに生じる思考や行動」に左右される。

ということを意識するように努めました。もちろん、これも実に「うさんくさい＝いか
がわしい」話です。



また、さきほど述べました、

*ヒトは表象に対して主導権を握っていない。

つまり、

*ヒトと表象の主従関係は、表象が主でヒトが従だ。

ということも意識しながら、

*「わかる」という「枠」

について考えるように心がけました。



このように、

*ヒトは、さまざまな「枠」のからみ合いの中で「生きている＝人間関係を成り立たせている」

という観点から考えると、

*テリトリー＝なわばり＝枠＝枠の内部

と、

*テリトリー＝なわばり＝枠＝枠の外部

と、

* 枠＝ふちっこ＝縁＝辺境＝境界線＝境目＝分かれ目＝隔たり＝間・あい・あいだ・
あわい＝際・きわ＝差異＝差＝違い＝ズレ

という、

* 3つに大別される「枠」と、そのからみ合い

というイメージ＝うさんくさいお話＝でまかせが頭に浮かんできて、気になって仕方ない状態になります。



単純化すると

* 内と外と間

あるいは、

* 内部と外部と辺境

という3つの「枠＝場」です。うさんくさい話です。



次回は、その

* 3つの「枠＝場」

について、それぞれ考えてみたいと思います。

09.12.10 ちょっとないんですけど

◆ちょっとないんですけど

2009-12-10 15:24:00 | でまかせ

前回は、単純化すると

*内と外と間

あるいは、

*内部と外部と辺境

という3つの「枠＝場」があるという与太話に行き着きました。

■

抑うつ状態がひどいので、今回は、いつもとは違った感じの形式で、書いてみます。

思い出話です。一応、上記のテーマは外さないつもりです。

■

大学生だった時に、ドイツ人の知り合いがいました。知り合いといっても、かなり年齢は離れていました。その方は、NHKの語学講座のゲストを務め、都内の音楽大学でドイツ語のオペラの指導などをなさっていました。

ももとは俳優や演出家だったとのことで、テレビとラジオ講座の題材となるスキットやストーリーも、劇としてよくできていたと評価されていたようです。

その方の活躍で、英語、フランス語、ドイツ語.....というNHKのテキストの売り上げ順位が、逆転して、英語、ドイツ語、フランス語.....となり、その功績をたたえられ、当時の西独政府から（※ひよっとすると日本政府だったかもしれません）勲章か褒章を受けたとも聞きました。

「カラヤンがもらったのと同じものだ」なんて、その方がうれしそうにしていた顔を、今も覚えています。現在の消息は知りません。

*

ちなみに、ヨーロッパでは、舞台演劇の俳優が一番正確な国語を話すという考え方が

一般的にあるようです。今は、事情が変わったかもしれませんが。

たとえば、フランス語、ドイツ語と言っても、方言があります。全国ネットのテレビやラジオの中央局でニュース原稿を読んだり、お堅い番組でキャスターのような役割をするヒトは、いわゆる標準語とか共通語を話す必要があるみたいです。

そういう人たちが、発音という点で厳しい訓練を受けるのは、当然のことでしょう。これは、日本のアナウンサーでも同じだと思います。ただ、ニュース原稿を読むのは、別に演劇関係者である必要はないのは言うまでもありません。

また、キャスターには、経済や政治の専門家や、ジャーナリストや、大学教員など、さまざまな背景を持つ人たちがいるようです。

一方、語学の先生、特に国内、あるいは国外で、外国人にその国の言葉を教える人には、俳優や元俳優が珍しくないと聞きました。



昔、中学3年生から高校生のころに、NHKのテレビとラジオの外国語講座を全部視聴していたことがありました。外国語に興味があって、好きなことしかやらない性質なので、学校の勉強や部活をおろそかにして、講座ばかりを見たり聞いたりしていました。

放送の時間帯がラジオとテレビで重なったり、部活とかち合う場合には、テレビのほうは再放送を利用し、ラジオはタイマーを使って録音していました。当時はテレビの録画をするビデオデッキは高価で、それほど普及していませんでした。

語学講座のゲスト、つまり言葉について説明をする講師ではなく、その言語で書かれたスキット＝スケッチや、例文を読む役を務めるのは、その言語を母国語とする人ですね。

NHKのフランス語講座では、イヨネスコというヒト作の不条理演劇の演出で有名だった人が、長くゲストを務めていらっしゃいました。その世界では著名な方だったようです。ニコラ・バタイユというお名前でした。昨年か一昨年に、新聞に訃報が載りました。

その人の向こうを張るような形で、さきほど触れた当時の西独の演劇人が、ドイツ政府から派遣された。そんな感じで、来日なさった方でした。仏独国境近くで生まれ育った方で、両国語のバイリンガルだどご自身ではおっしゃっていました。実際、私はその人からフランス語を短期間習いました。

文学・絵画・演劇・映画など、多分野で活躍した、フランスのジャン・コクトー（1889-1963）という人が、監督として映画を製作したさいには、助監督を務めたという話も聞きました。

今はどうか知りませんが、フランスもドイツも、自国語の海外での普及にお金をかけます。日本は、そうした事業には予算を回さない国です。

前置きが長くなってしまい、ごめんなさい。つい、思い出にふけてしまいました。前回の記事で書いた、

*昔は良かったなあ

という「テリトリー＝居心地のいい場」に、はまってしまいました。

前回に書いたように、「昔」という時期がほんとうに良かったのではありません。「若かったころの自分」に郷愁をいただいているだけです。ヒトは、こうした「粹」から逃れることはできません。なんて、一般化して自己弁護。ごめんなさい。反省します。



本題に入ります。みなさん、

*ちょっとないんですけど

という言葉とか言い方とかフレーズを、耳にすることがありませんか？ 気になったので、グーグルで“ちょっとないんですけど”と、ちゃんと“○○”でくくって検索してみたところ、401,000件のヒット数が出ました。

これだけのヒット数があるのですから、一種の慣用句とみなしてもいいのではないのでしょうか。

お店に入って、何かの商品が置いてないかと店員さんや店主さんに尋ねると、

*「すみません、ちょっとないんですけど」

なんて、よく言われることがありますよね。

で、そのドイツ人の方、仮にMさんとしておきます（※イニシャルが、「M. M.」だったのです）――が、しょっちゅう、くどいほど、

*「日本語は、論理的な言葉ではない。たとえば「ちょっとないんですけど」と、いたる所で言われるけど、あれはどういう意味なんだ。「ちょっと」は「少し」という意味のはずだ。その「少し」が「ない」とは、非論理的ではないか。「ない」のなら、「ない」と言えばいい」

という意味のことを、言うのです。個人的にも何度聞いたことやら。また、ほかの人に対して、そうぼやくのを何度耳にしたことやら。英語と日本語を交えて、あるいはドイツ語の中に日本語を引用して、または片言の日本語で、言うのです。

大学時代には、自分は外国文学科に在籍していましたが、言語学にも興味があったので、その分野の本を拾い読みや、斜め読みすることがよくありました。小学生のころから、丹念な読み方や熟読が苦手でした。今でも、そうです。

昔から、本をべらべらとめくり、内容をでっち上げてしまう癖があります。ですから、かなりいい加減というか、でまかせしゅぎ的な読み方が身に付いてしまっているようです。



初めて、Mさんから、

*ちょっとないんですけど

が、論理的ではないと言われた時には、

*それはちょっとないんじゃない＝ナイン＝ Nein. = No. = 「ちがうよ」

という気持ちをいただきました。でも、反論できませんでした。ただ、気になったので、いろいろ考えてみました。そのころ斜め読みしていた言語学の本に、おもしろいことが書いてあったので、それを読んで、反論を思いつきました。

ちょっとややこしい話なので、このブログの「翻訳の可能性と不可能性」(2009-12-05)という記事から、必要な部分をコピペさせてください。



*翻訳とは、「ばらばら」を「一本の筋」を頼りに「つなげる＝こじつける」ことである。

と言えそうです。

うる覚えで恐縮ですが、ヒトの言語の「多様性＝ばらばらぶり」の一つに、

* 膠着語（こうちゃくご）、屈折語、孤立語という分け方

があるそうです。

簡単な例を挙げます。

* 「わたしはあなたを愛している。」

における、

* 「は」「を」みたいなものが、語と語を接着剤のようにつないでいるのが、膠着語。日本語、朝鮮語、モンゴル語、トルコ語、フィンランド語、ハンガリー語、タミル語、スワヒリ語など。

であり、

* 「 I love you. 」

における、

* 「 I, my, me, mine 」 「love, loves, loved, loving 」 「 you, your, you, yours 」 みたいに語を「屈折＝要するに変化」させて文を作るのが、屈折語。英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、アラビア語など。

であり、

* 「我愛你。」

におけるように、

* 「我」「愛」「你」は孤立していて変化せず、その語順で文の意味が変わるのが、孤立語。中国語、チベット語、ベトナム語、ラオス語、タイ語、マレー語、サモア語など。

だと記憶しています。間違っていたら、ごめんなさい。「正しい」ことをお知りになりたい方は、どうかお勉強なさってください。



以上が、「翻訳の可能性と不可能性」(2009-12-05)からの引用です。

*ドイツ語は、英語と同じく屈折語

と分類されています。英語は、屈折語の中でも、屈折＝語の変化・活用が小さいという
か著しくない言葉です。それに対し、ドイツ語は冠詞にしる、名詞・形容詞にしる、動
詞にしる、すごく活用が激しい言語です。

しかも、フランス語やスペイン語だと、

*女性名詞、男性名詞

しかないのに、ドイツ語はロシア語などと同様に

*女性名詞、男性名詞、中性名詞

の区別があります。そうした区別のない英語と比較すると、ややこしさが増します。

ところで、名詞に女性、男性、中性があるというのは、あまり真剣に考えなくてもい
いそうです。いわゆる性差とは、ほとんど関係がない、いわばお飾りのものらしいで
す。そうした区別のある言語のネイティブスピーカーから、

*性差と重ねて意識することはない

という意見を聞いたことがあります。

ちなみに、現在の英語は文法とか活用という点では、かなりシンプルな言語です。上の
例にある孤立語の中国語みたいに、活用よりも語順が意味を決定する重要な要素になっ
ています。



で、

*膠着語と分類されている日本語

ですが、ものすごく単純化した言い方をすると、

* 「て・に・を・は」という「接着剤」で名詞をくっつける。

だけで話が通じるような性格を持っていると言えそうです。

* 彼が彼女に私の秘密をばらした。=彼女に彼が私の秘密をばらした。= 私の秘密を彼が彼女にばらした。=私の秘密を彼女に彼がばらした。=ばらしたのよおー、秘密をさあ、私のだけどお、彼女にい、彼がね

という具合に、とにかくくっつければ、語順はどうでもいいみたいなどころがありますね。もちろん、ニュアンスとか、強調したい部分とかは変わりますけど。



そんなことを考えていて、

*ばらしたのよおー、秘密をさあ、私のだけどお、彼女にい、彼がね

という言い方のように、

*日本語は大切なところだけを言って、あとは必要に応じて情報を付け加えていく

つまり

*省略した言い方がしやすい言語

ではないかと思いついたのです。たとえば、ファーストフードの店に、A、B、Cの3人が入ったとします。

A : 「フィレオフィッシュ」

B : 「おれ、チーズバーガー」

C : 「わたしは、ポテトだけ」

なんて会話がレジのところによく聞かれます。

* 「わたしは□□を注文します」

という言い方を省略する。これは、屈折語でも、孤立語でも可能だと思いますが、

* 膠着語は「省略」できる度合いが高い

のではないのでしょうか。



で、ミヒャエル・ミュンツァーさん（※あつ、本名、出しちゃった、とわざとらしく書く）が、

* ちょっとないんですけど

についてぼやくのを待っていて、ぼやいたのちに、すかさず次のように、言いました。

* 「日本語は非論理的だというのは、とても非論理的な言い方です。言語の構造の違いを無視しているからです。日本語は、動詞以外に目立った活用がない言語です。語と語を、くっ付ける役割をする語を使えば、どんな語順でも、意味が通じます。そこから省略という日本語特有の現象が生じます。大切な語だけを言う。状況から相手に分かる語は、省略すればいい。それだけのことです。それを活用のやたら多い言語の尺度から、論じることには無理があるのです」

という意味の反論を試みました。

* 「じゃあ、『ちょっとないんですけど』はどういう具合に省略されているんだい？」

と、予想通りの言葉が返ってきたので、用意していた言葉を出しました。

* 「『ちょっと言いにくいことなのですが、今あなたがおっしゃった品物はないのですけど』です。『ちょっと』は、英語で言えば、I'm afraid とか、I'm sorry to say にあたり、最初に自分が恐縮していることを伝えているだけです。『ちょっと』が『a little』で、それが『ない』というのは、日本語を理解していない人の発想です」

確か、そんなようなことを片言の英語で言って、説明しました。Mさんは、しばらく考え込んで、「N先生に聞いてみる」と答えました。N先生というのは、ラジオのドイツ語講座の講師を務めていた日本人で、ある大学の教授だった方です。

N先生がどうおっしゃったのかを、その後Mさんからお聞きする機会はありませんでした。また、

* ちょっとないんですけど

をめぐる、「ぼやき＝日本語非論理説＝日本語批判＝日本語への罵倒・悪態」を耳にすることもなくなりました。



* 「〇〇語は論理的だ」、「〇〇語は美しい」、「〇〇語は□□語より優れている」、「〇〇語は□□語より普遍性を備えている」

というたぐいのフレーズを見聞きすることは多いです。

これは、〇〇語を母語とするヒトの

* 愛国心の表れ

とも言えますが、

* きわめてずさんな言語観に基づいている

と言わざるを得ません。自分の漏らしたおならは、他人のそれに比べて臭くない、というのと似ていませんか？

また、

* 母語という「枠」にとらわれている

と考えることもできるでしょう。



「枠」を「場」という語にずらして考えてみましょう。

自分の母語にとっての

* 異言語

にしる、母語（標準語の場合）の変種とも言える

* 方言

や、これもまた母語の変種と言っていいような

*世代間で異なる言葉遣い（※話し言葉では大きく、書き言葉ではいくらか異なります）

や、

*古文（=各時代の古語）

にしろ、自分の住んでいる国に存在する

*手話

や、

*指点字（目と耳とが不自由な人とのコミュニケーションで使われる手段です）

にしろ、そうした

*個人レベルでの母語以外の言語

に

*接触

したり、あるいは

*習得しようと試みること

は、スリリングな体験です。少なくとも、自分にとってはそうです。



*母語という「枠=場」＝「内部」

にとらわれざるを得ない各ヒトは、

*異言語・方言・若者言葉（ or オヤジ／オバサン言葉 or ジジ／ババ言葉）・古語という「枠=場」＝「外部」

と、

* 触れ合う「機会＝事態＝出来事＝事件」が発生する「枠＝場」＝「辺境」

に常に身を置いている。そんなふうに思えます。

そうした「枠＝場」＝「辺境」は、身近に体験できると思います。

というか、

* 内部・外部・辺境といった「作り話＝フィクション＝考え方」は、うさんくさい与太話

であり、ヒトを「個人対個人」のレベルで考えると、

* すべての「枠＝場」が辺境である

というのが正確だという気がします。これは、手垢の付いた、もっともらしく、またうさんくさい

* 自と他

という2項対立を持ち出して考えると分かりやすいと思います。

さらに言うなら、個人が集まった「共同体対共同体」レベルにおいても、

* 「内部」「外部」「辺境」といった区別はない

と言ったほうが正確で、

* 「内部」「外部」「辺境」という「枠＝場」すべてが「辺境」である

と言えるような感じがします。



きょうは、調子が良くないので、ずいぶんおとなしい感じの「でまかせ」になってしまいました。次回は、いつものように、とちくるった趣の「でまかせ」をかます予定です。

09.12.11 あなたとは違うんです

◆あなたとは違うんです

【2009-12-11 に書いたブログ不投稿（＝不登校）記事】

ヒトには、3つの「枠＝場」があるのではないかという話の続きです。

単純化すると

*内と外と間

あるいは、

*内部と外部と辺境

という感じです。でも、残念なことに、これらの

*「枠＝場」は、必ずしもヒトに意識されない。

ものらしいのです。



たとえば、母語である

*日本語という「枠＝場＝限界」の中で、考えたり、話したり、書いたりする

場合には、自分が日本語を使っていることを、あまり意識しないのではないのでしょうか。

ところが、外国に出かけたり、あるいは日本語以外の言語を母語とする人と出会って、何らかの接触をするさいには、

* 「話が通じない」

とか

* 「わけが分からない」

といった状況を経験します。相手の話していることが理解できなかつたり、自分の思いが分かってもらえない。もどかしいし、時には悲しい思いをするでしょう。



図式化すると、

* 「自分＝内部」という「枠＝場＝限界」

が、

* 「異なった母語を話すヒト＝外部」という「枠＝場＝限界」

と、

* 「出逢う・接する＝辺境」という「枠＝場＝限界」

に、

* 身を置く

と言えそうです。

立場を逆に考えてみましょう。

* 「異なった母語を話すヒト＝外部」という「枠＝場＝限界」

も、同じ状況に身を置いているわけです。「おあいこ＝逆もまた同じ＝vice versa」というわけです。



上では、異なった言語を話す人との接触という、分かりやすい例を挙げました。こうした体験を、少しづらして考えてみましょう。

* 同じ母語を話すヒト同士の間

でも、

* 「話が通じない」

とか

* 「わけが分からない」

といった、

* もどかしい思い

をすることが、日常的によくありませんか？ 職場、学校、近所にいる人たちだけでなく、家族や親しい友達との間でも、そうした

* じれったい気持ち

になることがありますか？ 結局、

* ヒトとヒトは分かり合えない

なんて、悲観的な感情をいだいてしまいそうです。そう言えば、自民党が政権を握っていたころの末期に、ころころと総理大臣が変わりましたが、

* (わたしは) あなたとは違うんです！

とか言った首相がいましたね。流行語にもなりました。あれは、至言＝名言＝迷言だと思います。

すごく当たり前だけど、普段はあんまり意識しなくて、はっとその事実に気付き、大きくなずいてしまう。そういう意味で、至言ではないでしょうか。一方で、

* (わたしは) あなたと同じなんです！

とも言えるような気がします。



*ヒトとヒトの間には溝がある

とか、

*ヒトとヒトは分かり合えない

なんて考えていると寂しくなります。にもかかわらず、

*ヒトには共通する部分がたくさんある

とか

*人類はみなきょうだいだ

なんて考え直すと、いくらか希望が見えてくるような気がして、いくぶん元気になりませんか？

*ヒトとヒトとは、重なる＝かぶる部分と、重ならない＝かぶらない部分がある

とも言えるような気がします。

これって、すごく当たり前のことですよ。でも、その

*当たり前が、どれくらい当たり前なのか

が気になって仕方ありません。



ちょっと整理してみます。

*ヒトには、「枠＝場＝限界」としての「内部」と「外部」と「辺境」がある。

みたいです。その

*「枠＝場＝限界」は、必ずしもヒトに意識されない。

ものらしいのです。ということは、

*「枠=場=限界」としての「内部」と「外部」と「辺境」は、「他者」なのではないか。少なくとも、部分的に、あるいは一時的に、あるいは可變的に「他者」なのではないか。

という疑問が湧いてきます。



*「他者」とは、「自分」ではないものだ。

と考えるのが普通だと思われます。

*「自と他」という2項対立

は、心理学や哲学と呼ばれる分野で、よく議論されているテーマです。さまざまな人たちが、いろいろなことを言い、多種多様な学派や理論や説や派閥を作っています。

ヒト特有の、「テリトリー=なわばり」作りです。

この駄文は、すごくテキトーで面倒くさがり屋が書いています。しかも、お勉強や他人様の言うことを聞くのが大の苦手ときています。結局、自分流でしこしこやっているという次第です。

でも、それなりに本気ですし、正確であろうとし、ブログという形で書いているわけですから、分かりやすく書こうとしています。本当ですよ。



実は、きのう、きょうと、かなり抑うつ状態が悪化しています。そういう自分の状態と、今書いていることとはだいぶ重なるのですが、

*「自分というもの」に対する違和感

について、ずっと考えています。

*「自分」

ではなく、

*「自分というもの」

と書いたことに注目してください。「自分」と「自分というもの」を比較してみましょう。

* 「自分というもの」は「自分」より、自明なものではない。

気がしませんか？「○○というものは、ですねえー」なんて、言い方があります。その時の

* 「○○というもの」

と言ったり、書くさいには、

* 「○○」は「定かではない=よく分からない」ものだ

というニュアンスがありませんか？



* 「○○というもの」

の

* 「もの」

という「言葉=語」が曲者（くせもの）です。

* 「もの・物・者・モノ」

と「分光」（※このブログでは、同音の言葉に分けてみる行為を指します）できます。

次に、「ずらして」みましょう。このブログでは、「ずらす」とは、同じような=似た意味の言葉を並べていく行為を指します。

* 「もの・存在・対象・物体・事物・物事・何か」

* 「もの・何か・こと・事・言・ことがら・事柄」

* 「もの・こと・言・ことば・言葉・語」

* 「もの・存在・ひと・ヒト・人・人間・誰か・あいつ」

いろいろな含みを持った言葉＝語であることが分かります。さきほど用いた「曲者」とは、そういう意味です。



*「分光」も「ずらすこと」も、「でまかせ＝出るに任せること＝言葉にもてあそばれること＝圧倒的な偶然性に身をまかせること」

です。

*ヒトは言葉を使うことはできない。むしろ、言葉に使われる。

というのが、このブログでの基本的な考え方です。

*主導権は言葉が握っている。

と言い換えることもできます。なぜなら、

*言葉とは、各人が習得した「枠＝場＝限界＝枷（かせ）＝各人を縛るもの」である（※「習得した」が決定的に重要です、いわば「掟＝ルール」みたいなものという意味です）。

し、

*言葉は各人が生まれる以前から体系化されて存在し、語の数とそれぞれの語の語義は各人の制御可能な能力を超えて数多く存在する。

からです（たぶん単純化した言い方ですけど）。



ただし、各人が一致団結した、あるいは同様の行動を示すと、若干、言葉を変化させることが可能です。でも、その変化は微々たるものです。とはいえ、その微々たる変化が積み重なると、大きな変化になることは言うまでもありません。実際、そうしたプロセスを経て、どの言語も変化してきたようです。

上述の、

*主導権は言葉が握っている。

とは、各人の日常生活および生涯でのレベルの話だと考えてください。本当は、各人のレベルだけでなく、ヒト一般のレベルでも、「主導権は言葉が握っている」と言いたいのですが、ここでは、その点には立ち入りません。



話を戻します。

* 「自分というもの」に対する違和感

を、強く意識する「こと＝場合＝状況＝気分の時」があります。うつ病だからかもしれません。

たとえば、朝に目を覚まします。その時に、

* 自分のご機嫌をうかがう

ことがありますか？

* 「きょうは、どんな気分かな？ どんな体調かな？」



また、次のような時もあります。

何かうまくいかない。気分が乗らない。しっくりいかない。しっくりしない。変な感じがする。もどかしい。言い換えると、

* 心が言うことを聞いてくれない。体が言うことを聞いてくれない。

* どうしようもない。

* どうしたらいいか分からない。

* わけが分からない。

* はあ（※ため息です）。

* あーあ (※同上)。

* ふうーっ (※同上)。

* しくしく (※泣きそうに、あるいは涙が目に浮かんでいます)。

* うじうじ (※戸惑ったり、途方に暮れています)。

* バン (※ものに当たっています) !

* ドン (※ものに当たっています) !

* ドスン (※ものに当たっています) !

* バタンキュー (※すねて、寝転がっています) !

という感じです。



繰り返します。

ヒトには、

* 「自分というもの」に対する違和感

を、強く意識する「こと＝場合＝状況＝気分の時」があります。ちょっと「客観的なニュアンスで＝他人事（ひとごと）みたいに」言えば、

* 自分を扱いかねている＝自分をもてあましている

状態という感じでしょうか。

* ヒトは自らが考えている以上に不自由である。

という言い方も近いと思います。



* 「自分」と「自分というもの」が「ズレている」。

これが、現在の自分にとっては、最も正確な言い方だという気がします。「○○」と括弧でくくってあることに注目してください。

* 「とりあえず、○○と呼んでいるもの」という「保留＝留保＝断定を避ける気持ち」が働いている

さいに、括弧を用いる場合がありますが、それです。



* 「自分」と「自分というもの」との間にある「ズレ」

というフレーズの「ズレ」とは、名付け得ないもの、つまり、言葉で言い表せないものだと考えられます。

ただし、

* 体で、そのズレの気配を「察知する＝感じる」

ことなら、できそうです。さきほど、ため息や擬態語や擬声語を用いて書いた部分を、もう一度見てください。そして、その文字と括弧内の説明を読みながら、イメージしてみてください。体感できるのではないのでしょうか。

「それ」なんです。ここで問題にしているのは、

* あなたが「イメージしている＝体感している」「それ」

なんです。たぶん、ですけど。なぜ、

* たぶん

なのかと申しますと、

* (わたしは) あなたとは違うんです！

と同時に（※この「と同時に」が決定的に重要です。「Aと同時にB」という場合には、AとBは対立しません、両立するのです）、

* (わたしは) あなたと同じなんです!

だからです。たぶん。



* 「自分」と「自分というもの」との間にある「ズレ」

について、できればもっと考えてみたいです。ただ、やはり括弧がついているものを思考の対象とすることは、土台無理だという感じがします。

ダメモトという言葉で、自分をだまし、おだててみます。



テレビに話しかけても応えてこない。写真に映っている人を針で指しても痛いと言わない。そんな括弧がついた代理たち。

括弧のついた「自分」と「自分というもの」、その両者の間にある「ズレ」に、声をかけ、針で刺すように働きかけてみる。

うーむ。やっぱり、駄目みたいです。

09.12.XX こんなことを書きました (その 17)

◆ 「こんなことを書きました (その 17)」

今回は、2009-12-02~2009-12-10 + α に書かれた記事のダイジェストです。「こんなことを書きました (その 16)」(2009-09-04 + 2009-11-11~2009-11-29 + α & 2009-12-01~2009-12-11) の続きです。各記事の短い解説と、キーワードやキーフレーズが書いてあります。

※以下は、ブログタイトル「でまかせしゅぎじっこうちゅう」2009-12-02～2009-12-10 に掲載した記事と、2009-12-11 に投稿する予定だったにもかかわらず、不投稿（＝不登校）に終わった記事です。「でまかせしゅぎじっこうちゅう」も、掲載の途中で激しい抑うつ状態に見舞われ、10日足らずの間に削除・閉鎖しました。

*「でまかせ・いず・む」2009-12-02：冒頭では、言葉と自分との関係について身近雑記をまじえてつづっています。これから先どう生きていけばいいのか、と自問してもいます。書きながら考えるという自分流の書き方を実践しながら話を進めています。話は、「どのような言葉を選んで文章をつづるか」と「言葉の主導権を潔くみとめつつ書く」へと移っていきます。かねてから実行している「でまかせ」という言葉への姿勢を提唱しています。「でまかせ」という語にこびりついているネガティブな（※ポジティブ対ネガティブという対立はフィクション＝作り話にすぎないのですが）イメージを全面的に肯定し、あえて「でまかせしゅぎ」を選択する、と宣言しています。キーワードとキーワードは、「抑うつ」「頑張る」「死ぬ間際」「大和言葉」「漢語と和語の二重構造」「翻訳」「根強い『言葉＝言語』への不信感」「広い意味での表象」「ヒトと表象との関係性」「圧倒的な偶然性に身をゆだねる」です。直接書かなかったキーワードは、「フェルディナン・ド・ソシュール」「ステファヌ・マラルメ」「ジャック・デリダ」「ジェームズ・ジョイス」「サミュエル・ベケット」「福沢諭吉」「西周」「二葉亭四迷」「夏目漱石」「森鷗外」「柳父章」「山岡洋一」「バイリンガリズム」です。

*「もてあそばれるしかない」2009-12-03：「翻訳」をかなり広い意味で論じています。大きなテーマを扱う自分が、あくまでも自己流で「でまかせ」を実行していることを断っています。誰々が何と言ったか、あるいは書いたかには興味はないと述べています。当然のことながら、既存の学問や学術研究とは無縁の素人の馬鹿話でしかないと断っています。そうした弁明は居直りではなく、そういう言葉との付き合い方があってもいいのではないかという提案のつもりで書いています。キーワードとキーワードは、「広義の表象」「絶対的他人との遭遇」「ヒトの言うこと為すことのすべては、『でたらめ＝世迷言＝でまかせ』である、という『考え方＝説＝お話＝作り話＝フィクション＝でたらめ＝でまかせ』から出発します」「ある『でたらめ』を他の『でたらめ』に『翻訳』するさいに生じる『ズレ』について考える」「フェルディナン・ド・ソシュール」です。直接書かなかったキーワードは、「ヒュー・ケナー」「ジェームズ・ジョイス」「サミュエル・ベケット」「ギュスターヴ・フローベール」「ジョージ・スタイナー」「ジャック・デリダ」「ミシェル・フーコー」「ジル・ドゥルーズ」です。

*「わかるはわかるか」2009-12-04：前日に書いた記事を分けて掲載した後編です。テーマは前回と同じで、「翻訳」をかなり広い意味で論じています。大きなテーマを扱う自分が、あくまでも自己流で「でまかせ」を実行していることを断っています。キーワードとキーワードは、「正確さ」「わかりやすさ」「分かり合う」「手話」「ブリコラージュ」「楽

しいのは、結果でなくてプロセス」「このブログでは、そもそも正解のある問題に取り組んでいるわけではありません。なにしろ、「わかる」は「でたらめ」だ、から出発しているのです」、です。直接書かなかったキーワードも前回と同じで、「ヒュー・ケナー」「ジェームズ・ジョイス」「サミュエル・ベケット」「ギュスターヴ・フローベール」「ジョージ・スタイナー」「ジャック・デリダ」「ミシェル・フーコー」「ジル・ドゥルーズ」です。

*「翻訳の可能性と不可能性」2009-12-05：以前は、過去の記事にリンクを貼りまくり、過剰な自己輸入＝自己引用をしていたのを反省し、意識的にそうした作業を控えていましたが、この日は久しぶりに過去のブログ記事に触れています。ただし、1カ所だけです。「翻訳」を論じるさいに用いなければならない「わかる」という語を考察した連載に言及せざるを得なかったからです。この日の記事では、数日前から意味を広げて論じていた翻訳を、異言語間の翻訳に限定する方法をとっています。キーワードは、「膠着語」「屈折語」「孤立語」「日本語」「英語」「中国語」「うみ・海（・濃）」「sea（・see）」「mer（・mère）」「語義・意味・イメージ・ニュアンス・コンテクション」「聖書の翻訳」「クルアーン（コーラン）」です。直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦」「吉本隆明」「ジョージ・スタイナー」です。

*「わかるという枠」2009-12-06：前日の続きです。ヒトが、言語レベルでも、行動のレベルでも「枠＝制約＝限界」というものにとらわれている状況について、思うところをつづっています。「わかる」という大和言葉を漢字をまじえて「分光」する作業を行い、さらにその作業で用いた漢字の意味とイメージを分析しています。断ってありませんが、この作業の部分は、かつてのブログ記事からの自己引用です。「枠」「ずらす」「ズレ」という言葉とイメージと運動にこだわっています。そうすることで、誰もが通常意識しない「わかる」という枠に揺さぶりをかけようとしています。キーワードは、「国語辞典」「漢和辞典」「類語辞典」です。直接書かなかったキーワードは、「コア・イメージ」「中上健次」『紀州木の国・根の国物語』です。

*「わかるはわからない」2009-12-07：「わかる」に相当する語を、日本語と英語と手話と漢字から拾い出して分析していますが、これも過去の記事からの自己引用です。キーワードは、「ヒトはわかることしかわからない」「ヒトには「わかる」ように「なっている＝できている」ことと、「わからない」ように「なっている＝できている」ことがある」です。直接書かなかったキーワードは、「ジャック・デリダ」「ミシェル・フーコー」です。

*「わかるはプロセス」2009-12-08：「わかる」を「わかる」という「枠」に収めないように注意しつつ、読者に「わかる」が「わかる」ではないことをほのめかそうと、いろいろな細工と比喩とレトリックを用いています。再読すると、かなりとちくるった、あやうい展開の仕方になっています。テーマがテーマだけに、致し方ないと思いますが。この記事では、書かれた言葉の身ぶり・めくばせ・演技をご覧いただくというプロセスに重点を置いたつもりです。どうか、「でたらめを並べているなあ」という感じで、お目を

通してください。それが本望です。

* 「3つの枠」2009-12-09：今回は「わく・枠」そのものを「分光」したり、「ずらし」てみたのちに、「枠」と不可分＝表裏一体で働く「わかる」に再度こだわっています。その「枠」と「わかる」が言語（母語）という表象をまとう限り、「言語＝表象＝枠＝限界」の中でヒトはもてあそばれるしかない事態が常態化している、と指摘しています。「枠」がテリトリーとも深く結びついていることにも触れています。さまざまな話を次々とつなげながら、そうした話たちがあくまでも「説＝フィクション＝作り事」であることを読者に喚起しようと、異常なほどの気遣いをしています。テーマに忠実であろうとすれば、そうならざるを得ないからです。キーワードは、「わかる」「枠」「テリトリー」「内部・外部・辺境」「うさんくさい」「いかがわしい」です。直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦」「ロラン・バルト」です。

* 「ちょっとないんですけど」2009-12-10：大学生時代に知り合いだったドイツ人が、「ちょっとないんですけど」という日本語のフレーズを例にとって、日本語は非論理的な言語だと主張していた思い出話から、言語の論理性というテーマを軸に話を展開しています。軽いエッセイとしても読める記事だと思います。キーワードは、「ミヒャエル・ミュンツァー」「NHKドイツ語講座」「ジャン・コクトー」「ニコラ・パタイユ」「膠着語」「屈折語」「孤立語」「日本語における省略」「内部・外部・辺境」です。直接書かなかったキーワードは、「中島悠爾」です。

* 「あなたとは違うんです」【2009-12-11 に書いたブログ不投稿（＝不登校）記事】：「わかる」「枠」「内部・外部・辺境」というフィクションとそれが喚起するイメージを、「ヒトとヒトは分かり合えるか」という、単純で深遠な問いに置き換えて論じています。「自分」と「他者」という語を用いて話を展開するうちに、「自分」ではなく、『自分というもの』に対する違和感を問題にし始めます。そこから、「〇〇というもの」および「もの」という言い回しにこだわり出します。このように、話を「進める＝ずらす」という「操作＝作業＝過程」を通じて、ヒトが言葉に主導権を握られている状況を浮き彫りにしようと努めています。同時に、そうした状況は、ヒトが「自己（自分）というもの」をコントロールできない事態であるとも言えます。キーワードとキーフレーズは、「内部・外部・辺境」「話が通じない」「わけが分からない」「ヒトとヒトは分かり合えない」「（わたしは）あなたとは違うんです！」「『自分』と『自分というもの』との間にある『ズレ』」です。直接書かなかったキーワードは、「フロイト」「ジャック・ラカン」「ジャン・ピアジェ」「レフ・ヴィゴツキー」です。

以上です。

あとがき

あとがき

哲学がしたーい。誰々が何々と言ったなんて、関係なーい。自分の頭と体で考えてみたーい。インプットする暇などない。アウトプットに全力をあげよう。今ここにある手持ちのものを総動員して、言語、哲学、表象について、考えてみたい。哲学を庶民の手に！

うつを患いながらも、以上のような気持ちで、いわば憂さ晴らしに書き始めたのが、本書のもととなったブログでした（「うつせみのあなたに」というブログは、現在も開店いたしております）。いったん始めたら、そればかりを律儀に続ける——これこそ、まさに、うつになりやすい典型的な性格だと思います。

そうした性格の私は、ほぼ1年間にわたり毎日毎日（ときおりダウンもしましたが）、ブログ記事にしては長いものを書き続けたのでした。その結果、生まれたのが本書です。テーマは、人間の原点である「表象の働き」＝「代理の仕組み」——「何か」の代わりに、その「何か」ではないものを用いるという仕組み——です。

具体的には、言語、哲学、社会現象、表象文化が、私にとっての思考の対象になりました。今でも、そのスタンスは変わりません。そうした分野を、駄洒落を頻発し、遊び心を持ち、あくまでも素人の立場から、自由奔放に論じる。上述の「表象の働き」を、読み手に話しかけるように、なるべくややこしくならないように書きつづる（とはいっても、ややこしくならざるを得ない部分もありますけど）——。それが、本書の一貫した態度です。

今思えば、心の病をかかえていたものの（現在もかかえています）、贅沢な時間を過ごした気がします。なにしろ、自分のいちばん興味のある、「何か」の代わりに、その「何か」ではないものを用いる」という仕組みについて、考えることができたのですから。

『うつせみのあなたに 第9巻～第11巻』の記事タイトル

第1巻

08.12.19 今日は誕生日

08.12.20 地図は現地ではない

08.12.21 消えてしまいたい指数

08.12.22 言葉に振りまわされる毎日

08.12.23 狂ったサル

08.12.24 あえて、その名は挙げない

08.12.25 遠い所、遠い国

08.12.26 横たわる漱石

08.12.27 信じてはいけない言葉

08.12.28 そして、話はお金に行き着く

08.12.29 匿名性の恐ろしさ

08.12.30 再び「消えてしまいたい指数」について

08.12.31 その点、ナンシー関は偉かった

09.01.01 私家版『存在と無』一序文一

09.01.02 論理の鬼

09.01.03 うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について

09.01.04 haiku と俳句、ベースボールと野球

09.01.05 翻訳の可能性＝不可能性

09.01.06 ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない

09.01.07 名のないモンスター、あるいは外部の思考

09.01.08 見えないものを見る

09.01.09 読めないけど分かる言葉

09.01.10 聞こえるけど聞けない言葉

09.01.11 目は差別する

09.01.12 投資って何だろう？ お金って何だろう？

09.01.13 架空書評：狂った砂時計

09.01.14 ん？

09.01.15 「ん」の不思議

09.01.16 あなたなら、どうしますか？

09.01.17 やっぱり、ハンコは偉い

09.01.18 架空書評：何もかもが輝いて見える日

09.01.19 こんなことを書きました（その1）

第2巻

09.01.20 それは違うよ

09.01.21 ま～は、魔法の、ま～

- 09.01.22 なぜ、ケータイが
- 09.01.23 お口を空けて、あーん
- 09.01.24 冬のすずめ
- 09.01.25 架空書評：彼らのいる風景
- 09.01.26 交信欲＝口唇欲
- 09.01.27 ケータイ依存症と唇
- 09.01.28 オバマさんとノッチさん
- 09.01.29 もしかして、出来レース？
- 09.01.30 カジノ人間主義
- 09.01.31 コラブログとモノブログ
- 09.02.01 架空書評：ビッグ・ブラザー
- 09.02.02 こんなことを書きました（その2）
- 09.02.03 1カ月早い、ひな祭り
- 09.02.04 神様になる方法
- 09.02.05 かつらはずれる
- 09.02.06 究極の武器はヒューヒューともしもしなのだ
- 09.02.07 ひとかたならぬお世話になっております
- 09.02.08 架空書評：PDSジェネレーションズ
- 09.02.09 1人に2台のテレビ
- 09.02.10 人面管から人面壁へ

09.02.11 マトリックス

09.02.12 こんなマヨじゃ、いやだ！

09.02.13 そっくり

09.02.14 「東京」CE 無限大

09.02.15 架空書評：九つの命

09.02.16 こんなことを書きました（その3）

第3巻

09.02.17 ああでもあり、こうでもある

09.02.18 差別化

09.02.19 飽きっぽくて、忘れっぽい

09.02.20 まぼろし

09.02.21 トリトメのない話

09.02.22 架空書評：奪還

09.02.23 おいしくない社会

09.02.24 あきらめない

09.02.25 最後のとりでを守る

09.02.26 やっぱり CHANGE なのだ

09.02.27 イエス・アイ・キャン

09.02.28=10.06.26 うつせみのあなたに

- 09.03.01 なぜ、お父さんがいないの？
- 09.03.02 女か男か？
- 09.03.03 ヒトは本を読めない
- 09.03.04 作者はいない
- 09.03.05 おくりびと vs. 千の風になって
- 09.03.06 毎度ありがとうございます
- 09.03.07 ゆうれいをはらう
- 09.03.08 こんなことを書きました（その4）
- 09.03.09 要するに、まなかな、なのだ
- 09.03.10 女心を男が歌う
- 09.03.10-09.03.12 でまかせしゅぎじっこうちゅう（前編）
- 09.03.13-09.03.15 でまかせしゅぎじっこうちゅう（後編）
- 09.03.16-09.03.25 うつせみのうつお
- 09.03.26-09.03.27 かわる（1）～（5）
- 09.03.28-09.03.29 かわる（6）～（10）
- 09.03.30 なる（1）～（3）
- 09.03.31 なる（4）～（6）
- 09.04.01 なる（7）～（8）
- 09.04.02 なる（9）～（10）
- 09.04.03 たとえる（1）～（2）

09.04.04 たとえる (3) ~ (4)

09.04.05 たとえる (5) ~ (6)

09.04.06 たとえる (7)

09.04.07 たとえる (8)

09.04.08 たとえる (9)

09.04.06-09.04.09 でまかせしゆぎじっこうちゅう

09.04.10-09.04.16 うつせみのうつお

09.04.17 たとえる (10)

09.04.18 こんなことを書きました (その5)

第4巻

09.04.19 平安時代のテープレコーダー

09.04.20 言葉を奪われる

09.04.21 「事実=意見」=両方ともでたらめ

09.04.22 「人間=機械」説 (1)

09.04.23 4月23日にギャグる

09.04.24 「人間=機械」説 (2)

09.04.25 「人間=機械」説 (3)

09.04.26 反「人間=機械」説

09.04.27 あう (1)

09.04.28 あう (2)

09.04.29 あう (3)

09.04.30 あう (4)

09.05.01 あう (5)

09.05.02 あう (6)

09.05.03 あう (7)

09.05.04 こんなことを書きました (その6)

09.05.05 スポーツの信号学 (1)

09.05.06 ドラマ信号論 (1)

09.05.07 信号論から見た経済 (1)

09.05.07 信号論から見た経済 (2)

09.05.08 信号学的視線論 (1)

09.05.09 信号学的視線論 (2)

09.05.10 信号論 (1)

09.05.11 もくじをつくりました

09.05.12 信号論 (2)

09.05.12 信号論 (3)

09.05.13 こんなことを書きました (その7)

第5巻

09.05.14 かく・かける (1)

- 09.05.15 かく・かける (2)
- 09.05.16 かく・かける (3)
- 09.05.16 かく・かける (4)
- 09.05.17 かく・かける (5)
- 09.05.18 かく・かける (6)
- 09.05.19 かく・かける (7)
- 09.05.19 かく・かける (8)
- 09.05.20 占い・占う
- 09.05.21 賭け・賭ける
- 09.05.22 書く・書ける (1)
- 09.05.22 書く・書ける (2)
- 09.05.23 こんなことを書きました (その8)
- 09.05.24 と、いうわけです (1)
- 09.05.24 と、いうわけです (2)
- 09.05.25 あられる・あらず (1)
- 09.05.26 あられる・あらず (2)
- 09.05.27 あられる・あらず (3)
- 09.05.28 あられる・あらず (4)
- 09.05.29 あられる・あらず (5)
- 09.05.30 あられる・あらず (6)

09.05.31 あられる・あらす (7)

09.06.01 あられる・あらす (8)

09.06.02 こんなことを書きました (その9)

第6巻

09.06.03 つくる (1)

09.06.04 つくる (2)

09.06.05 つくる (3)

09.06.06 つくる (4)

09.06.07 テリトリー (1)

09.06.08 テリトリー (2)

09.06.08 テリトリー (3)

09.06.09 テリトリー (4)

09.06.10 テリトリー (5)

09.06.11 テリトリー (6)

09.06.12 テリトリー (7)

09.06.13 こんなことを書きました (その10)

09.06.18 なわ=わな

09.06.19 台風と卵巣

09.06.20 出る

09.06.21 うんちと言葉

09.06.22 地と知と血 (1)

09.06.22 地と知と血 (2)

09.06.23 「あつい」と「わからない」

09.06.24 ぼーっとする、ゆえに我あり

09.06.25 時の神＝あわいわあい (1)

09.06.25 時の神＝あわいわあい (2)

09.06.26 こんなことを書きました (その 11)

第 7 卷

09.06.27 空前の「純文学」ブーム

09.06.28 「時間」と「とき」

09.06.29 「揺らぎ」と「変質」

09.06.30 不自由さ (1) 2010 年

09.06.30 不自由さ (2) 2010 年

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (1)

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (2)

09.07.02 うたう

09.07.03 まつはいつまでも、まつ

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (1)

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (2)

- 09.07.05 マンネリズム・マニエリズム
- 09.07.06 こんなことを書きました（その 12）
- 09.07.07 いみのいみ
- 09.07.08 何となく
- 09.07.14 記述＝奇術＝既述
- 09.07.15 3人のゲンちゃん
- 09.07.16 あつきのせい？
- 09.07.17 システムと有効性と比喻
- 09.08.01 気になるというか
- 09.08.02 もう1つ気になることが
- 09.08.03 さらに気になることが
- 09.08.04 できないのにできる
- 09.08.05 何もないところから
- 09.08.06 めちゃくちゃこじつけて
- 09.08.07 銃が悪いのではなく
- 09.08.08 どうにもならないときには
- 09.08.25 こんなことを書きました（その 13）

第8巻

- 09.08.11 たわむれる
- 09.08.12 なつかれる

09.08.13 げん・幻 -1-

09.08.14 げん・幻 -2-

09.08.15 げん・幻 -3-

09.08.16 げん・幻 -4-

09.08.17 げん・幻 -5-

09.08.18 げん・幻 -6-

09.08.19 げん・幻 -7-

09.08.20 げん・幻 -8-

09.08.21 げん・幻 -9-

09.08.22 げん・幻 -10-

09.08.30 こんなことを書きました（その 14）

09.08.23 げん・言 -1-

09.08.24 げん・言 -2-

09.08.26 げん・言 -3-

09.08.27 げん・言 -4-

09.08.28 げん・言 -5-

09.08.29 げん・言 -6-

09.08.31 げん・言 -7-

09.09.01 げん・言 -8-

09.09.XX げん・言 -9-

09.09.XX げん・言 -10-

09.09.XX げん・現 -1-

09.09.XX げん・現 -2-

09.09.XX げん・現 -3-

09.09.XX こんなことを書きました（その 15）

09.09.04-09.09.26 小品集（1）

09.09.27-09.10.23 小品集（2）

09.10.25-09.11.14 小品集（3）

第9巻

09.09.04 お墓参り

09.11.11 言葉とうんちと人間（言葉編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（うんち編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（人間編）

09.11.13 代理だけの世界（1）

09.11.14 代理だけの世界（2）

09.11.15 代理だけの世界（3）

09.11.19 代理だけの世界（4）

09.11.27 1年前の記事を読んで

09.11.28 今、考えていること

09.11.29 社会復帰はあきらめました

09.11.30 代理だけ

09.12.01-09.12.11 うつせみのあなたに（再録）

09.12.XX こんなことを書きました（その16）

09.12.02 でまかせ・いず・む

09.12.03 もてあそばれるしかない

09.12.04 わかるはわかるか

09.12.05 翻訳の可能性と不可能性

09.12.06 わかるという枠

09.12 07 わかるはわからない

09.12.08 わかるはプロセス

09.12.09 3つの枠

09.12.10 ちょっとないんですけど

09.12.11 あなたとは違うんです

09.12.XX こんなことを書きました（その17）

第10巻

09.12.06 ヒトいろいろ

09.12.07 信号としての石川君

09.12.08 コトバとチカラ

09.12.09 ごめんなさい

- 09.12.10 政治とは「分ける」こと
- 09.12.11 きな臭い話
- 09.12.08 ブログ廃人と呼ばれて
- 09.12.09 続・社会復帰はあきらめました
- 09.12.10 ブログと心中？
- 09.12.11 よくないなあ
- 09.12.12 素面でいたい
- 09.12.13 儀式
- 09.12.14 爪を切る
- 09.12.15 わける（1）
- 09.12.16 わける（2）
- 09.12.XX こんなことを書きました（その18）
- 09.12.16 二句
- 09.12.19 ずらす
- 09.12.20 かえるのではなくてかえる
- 09.12.21 とりとめもなく
- 09.12.22 パラレル
- 09.12.23 日本語にないものは日本にない？（1）
- 09.12.24 日本語にないものは日本にない？（2）
- 09.12.25 日本語にないものは日本にない？（3）

09.12.26 日本語にないものは日本にない？（４）

09.12.27 日本語にないものは日本にない？（５）

10.01.12 かえるはかえる

10.01.13 かえるにかえる

10.01.14 もどるにもどれない

10.01.15 け＝く

10.01.16 まことにまこと

10.01.17 まことはまことか（前半）

10.01.17 まことはまことか（後半）

10.01.18 本物の偽物（前半）

10.01.18 本物の偽物（後半）

10.01.19 からから

10.01.20 2010年1月20日にギャグる

10.01.21 こんなことを書きました（その19）

第11巻

10.01.22 夢の素（1）

10.01.23 夢の素（2）

10.01.24 夢の素（3）

10.01.24 夢の素（4）

- 10.02.02 うつせみのたわごと -1-
- 10.02.02 うつせみのたわごと -2-
- 10.02.03 うつせみのたわごと -3-
- 10.02.04 うつせみのたわごと -4-
- 10.02.06 うつせみのたわごと -5-
- 10.02.07 うつせみのたわごと -6-
- 10.02.08 うつせみのたわごと -7-
- 10.02.09 うつせみのたわごと -8-
- 10.02.10 うつせみのたわごと -9-
- 10.02.11 うつせみのたわごと -10-
- 10.02.12 うつせみのたわごと -11-
- 10.02.13 うつせみのたわごと -12-
- 10.02.14 うつせみのたわごと -13-
- 10.02.15 うつせみのたわごと -14-
- 10.02.16 「外国語」で書くこと
- 10.02.17 揺さぶり、ずらし、考える
- 10.02.19 動詞という名の名詞
- 10.02.21 名詞という名の動詞（前半）
- 10.02.21 名詞という名の動詞（後半）
- 10-02-25 不思議なこと

10.02.27 はかる -1-

10.02.28 はかる -2-

10.02.XX はかる -3-

10.02.XX はかる -4-

10.03.XX こんなことを書きました（その 20）

10.03.04 代理としての世界 -1-

10.03.05 代理としての世界 -2-

10.03.06 代理としての世界 -3-

10.03.07 代理としての世界 -4-

10.03.09 代理としての世界 -5-

10.03.11 代理としての世界 -6-

代理としての世界（改訂版）（1）

代理としての世界（改訂版）（2）

代理としての世界（改訂版）（3）

代理としての世界（改訂版）（4）

奥付

奥付

うつせみのあなたに 第9巻

<https://puboo.jp/book/17489>

著者：星野廉

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/renhoshino77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/17489>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/17489>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

うつせみのあなたに 第9巻

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
